貝塚市埋蔵文化財調査報告　第44集

東遺跡Ⅱ、新井ノ池遺跡発掘調査概要

1998. 3 . 31

貝 塚 市 教 育 委 員 会

東遺跡Ⅱ、新井ノ池遺跡発掘調査概要

1998. 3 . 31

貝 塚 市 教 育 委 員 会

はじめに

わが貝塚市は、北に波静かな大阪湾、南に緑豊かな和泉山脈に接し、恵まれた自然環境を有する地域であります。そのため、多くの人々の営みが昔から繰り広げられ、市内各所には様々な遺跡が存在します。これらは貴重な歴史的・文化的遺産であり、後世に伝えるために保護を講じることは、現在に生きる私たちに与えられた義務であります。しかし、わが市においても、近年の都市化の波により徐々に減少しております。

今回報告いたします調査もこうした開発行為に伴う緊急発掘調査ではありますが、幾多の成果を得ることができましたので、それら成果の一部をここに報告いたします。

本書刊行にあたりまして、皆様の文化財に対するご理解を深めて頂くとともに、文化財の保護、保存、研究の一助となれば幸いに存じます。

なお、調査並びに本書作成にあたり、関係各位には多大なご理解、ご協力を頂き、ここに深く感謝申し上げますとともに、今後とも本市文化財保護行政に対する一層のご理解とご支援をお願いする次第であります。

平成10年3月31日

貝塚市教育委員会

教育長　福　井　昱　彦

例　　言

1、本書は大阪府貝塚市において実施した、市営住宅改築事業、市立中央小学校増築事業に伴う事前発掘調査の概要報告である。

2、調査にあたっては、関係者各位より多大な理解と協力を得た。記して感謝の意を表す。

貝塚市教育委員会教育部総務課

貝塚市役所建設部建築住宅課

3、発掘調査は貝塚市教育委員会教育部社会教育課文化財係、学芸員前川浩一、三浦　基、木嶋崇晴が担当した。

現地・内業調査及び本書作成にかかる諸作業については下記の諸氏の参加を得て実施した。

稲田宏美　石野貴史　尾越功一　大西隆子　川畑乃文　幸崎美江　清水久子
中辻澄子　松本武志　溝端美也子　山本寿子　山本　睦　米子千智

4、獣骨廃棄土坑、井戸出土木製品については化学分析を依頼し、㈱ズコーシャ中野寛子氏他、帯広畜産大学中野益男先生から脂肪の分析、㈱古環境研究所からは木製品の放射性炭素年代測定について、ご報告いただいた。

5、本書の執筆は目次に示したとおり、Ⅰは三浦、前川、Ⅱは木嶋、編集は前川が行った。

6、現地調査にあたっては、下記の方々にご教示をいただいた。記して感謝の意を表します。

横田冬彦　横田晴子　鈴木　良　高橋昌明　前　圭一　朝治　武　吉田徳夫
細川涼一　藤本清二郎　松井　章　積山　洋　久保和士　廣田浩治　米田健二
近藤孝敏　（敬称略）

7、出土遺物、調査記録は貝塚市教育委員会にて保管している。

目　　次

はじめに

例　　言

目　　次（本文目次、図版目次、挿図目次）

Ⅰ　東遺跡の調査Ⅱ　　（三浦）

1、調査に至る経過　（前川）……1

2、位置と環境……1

3、調査の概要……2

4、検出遺構……3

5、出土遺物……14

6、まとめ……20

7、東遺跡出土の獣骨　（前川）……22

8、東遺跡から出土した遺構・遺物に残存する脂肪の分析……25

9、貝塚市、東遺跡出土試料の放射性炭素年代測定……38

Ⅱ　新井ノ池遺跡の調査　　（木嶋）

1、調査に至る経過　　（前川）……39

2、位置と環境……40

3、調査の概要……41

4、検出遺構……41

5、出土遺物……50

6、まとめ……51

挿　図　目　次

図１　貝塚市遺跡分布図

図２　東遺跡調査地位置図

図３　調査区地区割図

図４　調査区柱状土層図

図５　遺構配置図

図６　SE-201

図７　SX-201土層断面、SX-201-3出土状況

図８　SE-201出土土器

図９　SX-201出土土器

図10　SX-201出土土器

図11　SX-201-3出土土器

図12　SX-207出土土器

図13　SX-208出土土器

図14　SX-203（96、105）、SX-210（97）、SD-106（98、100、103）、中世包含層（99、101、102、104、106）出土土器

図15　新井ノ池遺跡調査地位置図

図16　調査区地区割図

図17　調査区土層図

図18　第２遺構面　遺構配置図

図19　第３遺構面　遺構配置図

図20　第４遺構面　遺構配置図

図21　第５遺構面　遺構配置図

図22　遺構配置図

図23　出土遺物

Ｉ－8　表、図目次

表１　試料の残存脂肪抽出量

表２　試料中に分布するステロールの割合

図2-1　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成

図2-2　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成

図３　試料中に残存する脂肪のステロール組成

図４　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

図５　試料中に残存する脂肪酸組成による種特異性相関

図　版　目　次

図版１　東遺跡

１、調査区南東部

２、同　　上

図版２　東遺跡

１、調査区中央部

２、同　　上

図版３　東遺跡

１、調査区北西部第１調査面

２、調査区北西部第２調査面

図版４　東遺跡

１、ＳＥ－２０１

２、ＳＥ－２０１断面

図版５　東遺跡

１、ＳＸ－２０１

２、ＳＸ－２０１－３

図版６　東遺跡

１、ＳＸ－２０１上面遺構状況

２、ＳＸ－２０１

図版７　東遺跡

１、ＳＸ－２０７

２、同　　上

図版８　東遺跡

ＳＥ－２０１（1、3、4、8、11、14、18）

図版９　東遺跡

ＳＥ－２０１（16）、ＳＸ－２０７（82、84）、包含層（101～103）

図版10　新井ノ池遺跡

１、ＳＤ－４０１

２、第６遺構面

図版11　新井ノ池遺跡

１、第５遺構面

２、第４遺構面

図版12　新井ノ池遺跡

１、第３遺構面

２、第２遺構面

図版13　新井ノ池遺跡

SD-401（1、2、3、6、23）、包含層第７層（8、9）、第　６層（10、13、14）、第４層（17～19）、側溝（20～22）、出土遺物

表　目　次

表１　近世出土獣骨一覧

表２　中世出土獣骨一覧

5．長楽寺跡　7．地蔵堂丸山古墳　8．地蔵堂廃寺　9．下新出遺跡　10．秦廃寺　15．麻生中新池遺跡　16．河池遺跡　19．泉州麻生塩壷出土地　20．堀遺跡　21．橋本遺跡　22．貝塚寺内町遺跡　23．加治・神前・畠中遺跡　28．沢城跡　29．新井・鳥羽遺跡　30．新井ノ池遺跡　31．半田遺跡　32．麻生中遺跡　34．澱池遺跡　35．積善寺城跡　36．清児遺跡　38．高井天神廃寺・高井城跡　43．二ツ池遺跡　51．窪田遺跡・窪田廃寺　55．槍ケ谷城跡　56．半田遺跡(清児地区)　57．堤遺跡　58．小瀬五所山遺跡　59．石才遺跡　60．王子遺跡　61．土生遺跡　64．海岸寺山遺跡　66．脇浜遺跡　67．今池遺跡　70．石才南遺跡　71．名越遺跡　72．地蔵堂遺跡　73．名越西遺跡　75．新井・鳥羽北遺跡　79．王子西遺跡　80．津田遺跡　82．福田遺跡　86．麻生中出口遺跡　87．小瀬遺跡　88．堤三宅遺跡　91．堀新遺跡　92．橋池遺跡　93．麻生中下代遺跡　94．堀秋毛遺跡　95．半田北遺跡　97．東遺跡　102．津田北遺跡　103．久保遺跡　109．窪田ハマデ遺跡　110．海塚遺跡　111．脇浜川端遺跡

図１　貝塚市遺跡分布図（部分）　　S=1/25,000

Ⅰ　東遺跡の調査Ⅱ

1、調査に至る経過

貝塚市では老朽化した市営東住宅の改築工事（第２期）を計画し、平成８・９年度事業として、貝塚市役所建設部建築住宅課から埋蔵文化財の取扱いについて協議の申し入れがあった。

改築予定地は、東遺跡に含まれ、第１期工事時点にて２次調査を実施した南側に位置しており、地下に埋蔵文化財が包蔵されていることが十分考えられる地点であった。

そこで、建築住宅課と社会教育課との間で協議を重ねた結果、埋蔵文化財の有無の確定と既設建物基礎による地下の破壊状況確認を目的として確認調査を実施することの合意をみた。

確認調査は既設建物以外の部分において、２ケ所の調査区（面積30㎡）を設定し、平成７年11月27日に実施した。調査の結果、建築予定地西側には中世後半の遺物包含層、遺構が良好に存在し、また、既設建物基礎による破壊は全面に及んでいないことが判明した。

この結果をもとに、建築住宅課と埋蔵文化財の取扱いについて協議を重ねた結果、今回の建設行為によって破壊を受ける部分約900㎡について２次発掘調査を実施することの合意をみた。

発掘調査は平成８年３月４日から６月20日にかけて実施した。調査地は貝塚市東30－１他である。

2、位置と環境

調査を実施したのは貝塚市北西部に位置する東遺跡である。

東遺跡は貝塚市北西部を西に流れる津田川左岸の段丘部に位置し、東西約220m、南北約220mの範囲に広がる中世から近世にかけての集落跡、農地跡である。遺跡の範囲は市営東住宅を中心

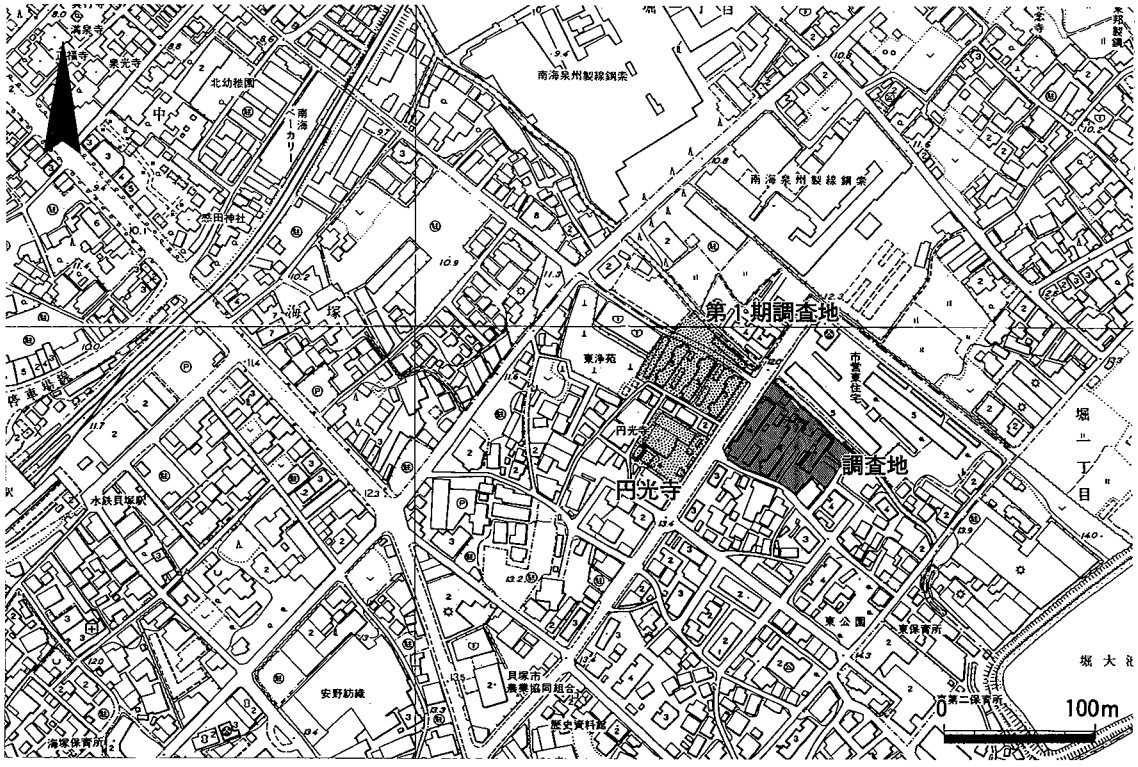


図２　東遺跡調査地位置図

としており地形は川方向に傾斜している。標高11～12mを測る地域である。

周辺の遺跡としては、北に古墳時代から室町時代にかけての集落跡である堀遺跡、中世から近世にかけての集落跡、窯跡である津田遺跡、平安時代から近世にかけての集落跡である小瀬五所山遺跡、東に中世から近世にかけての集落跡である新井・鳥羽北遺跡、中世の集落跡である福田遺跡、南に中世の集落跡である堀秋毛遺跡、弥生時代から室町時代にかけての集落跡である加治・神前・畠中遺跡、西に中世から近世にかけて繁栄した貝塚寺内町遺跡などが存在する。

3、調査の概要

調査は建設によって破壊を受ける部分約900㎡ を実施した。調査の結果、２面の遺構面を検出し、江戸時代の土坑・粘土採掘土坑・溝と中世（14～15世紀ごろ）の溝・井戸・土坑を発見した。調査区は国家座標に基づいて５ｍ×５ｍの区画を設定し、東西方向にＡ～Ｌ、南北方向に１～９の名称を与えた。調査区における基本層序の状況は、既設市営住宅建物基礎によって大幅に遺構を破壊されている部分が存在しており、調査区のほぼ全域に解体時の撹乱整地層が存在している状況であった。約１ｍ以上の盛土および撹乱層の下に、基本的には暗灰黄色土（近世遺物包含層）、オリーブ褐色土（中世遺物包含層）の２層が存在している。遺構面は中世遺物包含層上面および地山上面で検出した。

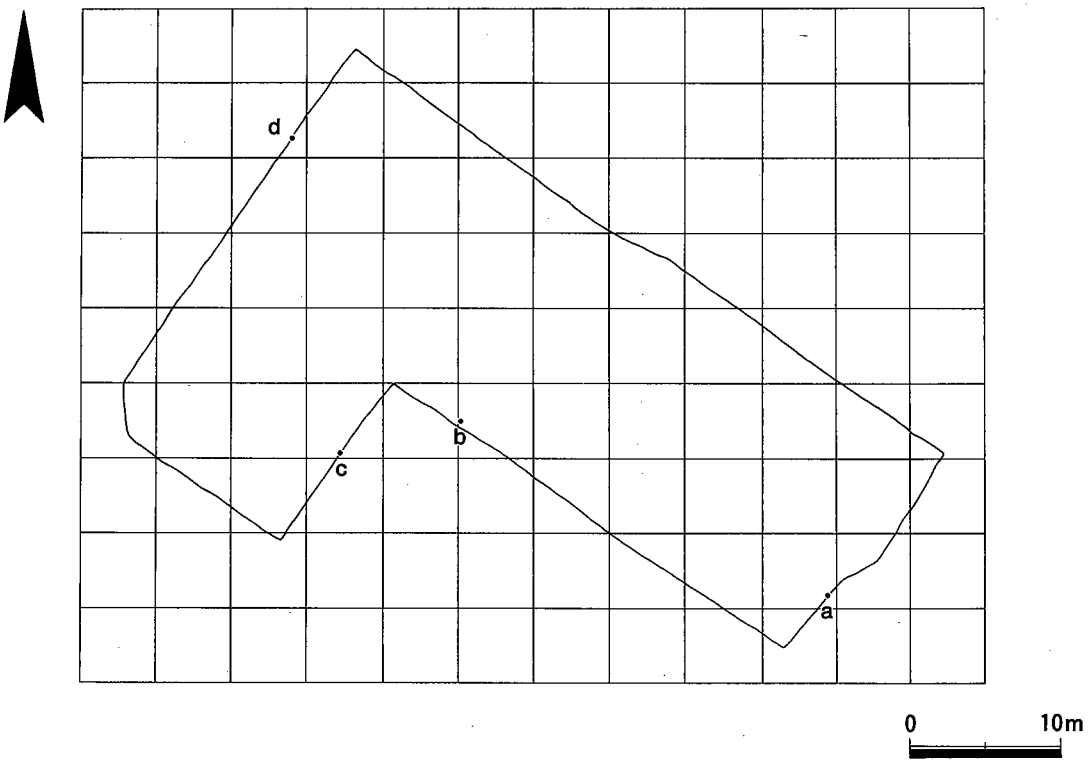


図３　調査区地区割図

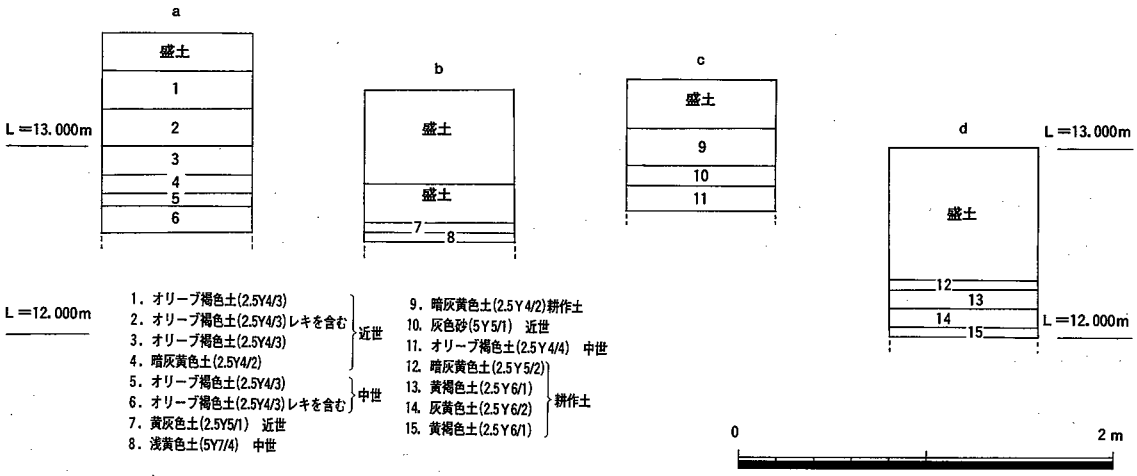


図４　調査区柱状土層図

４、検出遺構

以下、各遺構面について概要を説明する。また、各遺構面の名称は上面より第１遺構面、第２遺構面として説明する。

第２遺構面

本遺構面では溝、井戸、土坑などの遺構を検出している。中世のもので、調査区の中でも残っている部分は南東部と南西部の２カ所である。

ＳＥ－２０１

本遺構はＣ－８、Ｃ－９区にて検出した石組み井戸である。内径約１ｍ、深さ約３ｍである。石組みは底部分で比較的長細い石をほぼ六角形にならべ、その上に石を組んでいるが、黄色粘土（地山）は堅くまた粘度も高く、石組みは強固に組み上げられている。そのため、裏込め土はほとんど見られず、出土遺物も少量であった。石組みの状況から石組みの積んだ方向を読み取ることができ、時計回り方向で積み上げたことがわかるが、上部でやや積み方が乱れる。遺物は白色土器、瀬戸小壷、瓦器椀、白磁碗、土師小皿、土師質甕、瓦質こね鉢、東播系須恵質こね鉢、瓦質すり鉢、瓦質羽釜、竹製かご、蛇の骨などが出土しており14世紀初頭までのものである。また、井戸底部分からは見込み部に五七の桐紋を赤漆で、全体を黒漆で仕上げた鉢が出土している。

ＳＸ－２０１

本遺構はＩ－６、Ｉ－７、Ｊ－６、Ｊ－７区にて検出した土坑である。この土坑は、直径４ｍ、深さ0.3mで獣骨（牛、馬、犬、鹿、猪、スッポン、亀）を廃棄したもので、土坑の底に灰色土を敷き詰めた後、牛骨を中心とする獣骨を廃棄し、その上に周辺部で見られるような黄色粘土（地山土）で覆うようにして埋めた状況を確認している。獣骨の他には14世紀代後半と考えられる瓦質羽釜・すり鉢などが多数出土した。また、約１ｍの方形の小土坑（ＳＸ－２０１－２、－３）を検出した。小土坑掘削後にＳＸ－２０１を掘削しており、時期的には大きな差はなく土坑の掘削、廃棄、被覆が行われたと考えられる。掘削・廃棄は少なくとも３回の掘削と廃棄がされ、特

にＳＸ－２０１は小土坑と比較にならない量を短期間で廃棄しており、その処理の量はかなりのものであったと考えられる。

ＳＸ－２０７

本遺構はＢ－７、Ｃ－７、Ｃ－８区にて検出した溝である。幅2.3m、検出長3.4mの規模で、埋土は暗灰褐色土である。遺物は瓦器椀、瓦質羽釜、瓦質すり鉢、東播系須恵質こね鉢、湊焼須恵質甕が出土している。時期は、遺物から14世紀前半である。溝の方向、埋土が同一で出土遺物の時期差もないことから、ＳＸ－２０８につながると考えられる。

ＳＸ－２０８

本遺構はＣ－７、－８、Ｄ－６～Ｄ－８区にて検出した溝である。埋土は暗灰褐色土で最大幅3.7m、検出長7.9m、深さ約0.1mである。遺物は瓦器椀、瓦質羽釜が出土している。ＳＸ－２０７から続くこの溝は、北側を流れる北境川にほぼ平行して流れている。また、本溝から北側に向かって地形が傾斜する変化点でもあり、これらのことから区画溝と考えられる。地形的には集落は、井戸を検出した調査区南側の平坦部に広がることが想定される。このことから、本溝は集落の北端に掘られた境界の溝といえる。

ＳＸ－２０２

本遺構はＤ－７、Ｄ－８、Ｅ－７、Ｅ－８区にて検出した溝である。埋土は、暗灰褐色土で検出長3.2m、深さ0.2mで溝幅に対して浅く、降雨時に緩やかな流れがある程度のものであったことがわかる。

ＳＸ－２０３

本遺構はＣ－８、Ｄ－８区にて検出した土坑である。埋土は暗灰褐色土で検出長3.9m、幅約２m、深さ0.2mである。ＳＥ－２０１からの排水溝と考えられる。

ＳＸ－２０４

本遺構はＣ－９、Ｄ－９区にて検出した土坑である。埋土は暗灰褐色土で、検出長1.8m、深さ0.3mである。

ＳＸ－２０５

本遺構はＣ－８区にて検出した土坑である。埋土は暗灰褐色土で検出長1.6m、幅0.8m、深さ0.1mである。

ＳＸ－２０６

本遺構はＣ－８区にて検出した土坑である。埋土は、暗灰褐色土で検出長2.6m、幅1.4m、深さ0.1mである。

ＳＸ－２０９

本遺構はＤ－８区にて検出した溝状遺構である。埋土は暗灰褐色土で、検出長3.5m、深さ0.1mである。ＳＸ－２０２と同様にＳＸ－２０８に流れ込む溝であると考えられる。

ＳＸ－２１０

本遺構はＤ－６区にて検出した溝である。埋土は暗灰褐色土である。上部削平と撹乱により全

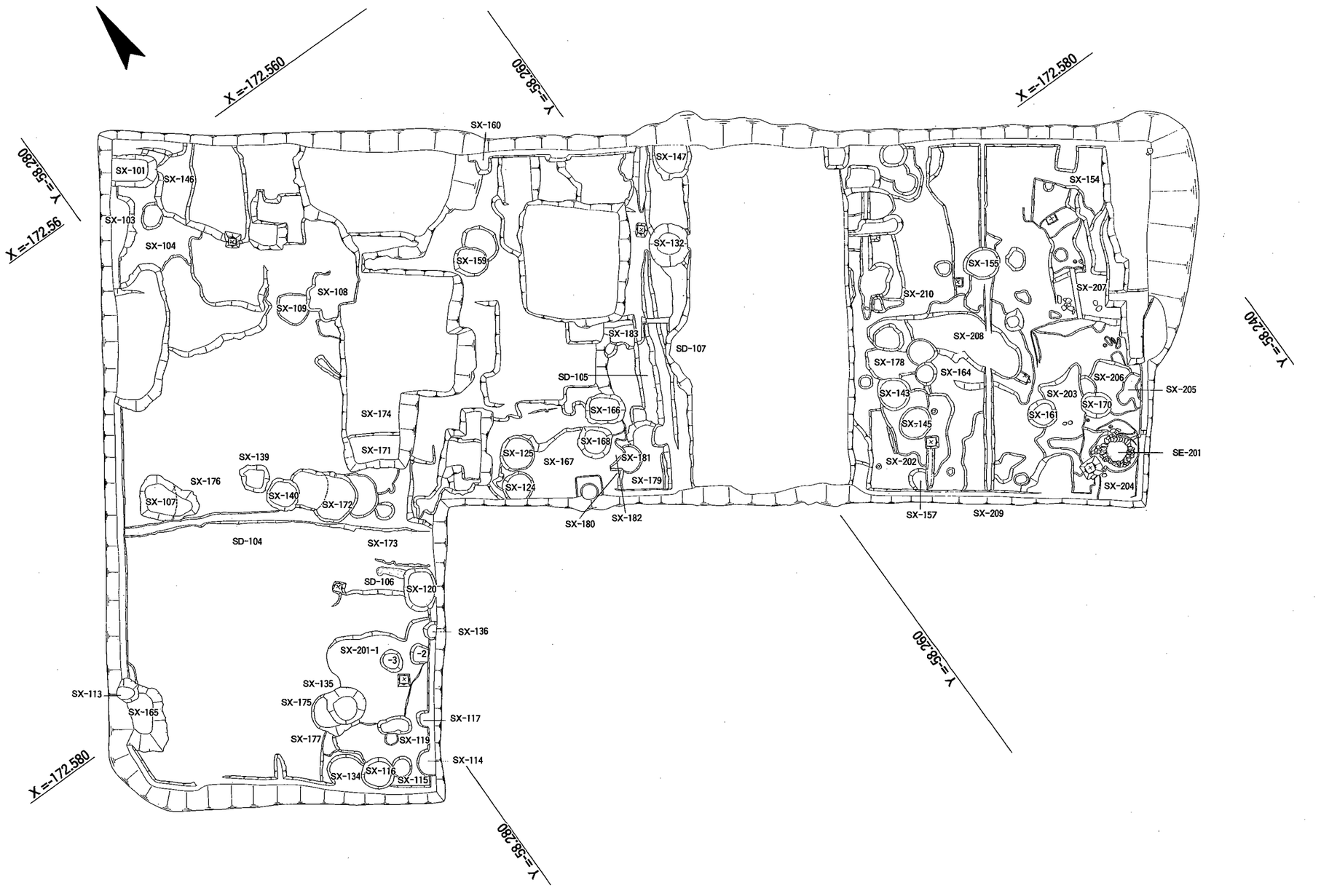

X =-172.560
Y =-58.260
X =-172.580
Y =-58.280
X =-172.56
Y =-58.240
Y =-58.280
X =-172.580
Y =-58.280
SX-160
SX-147
SX-101
SX-146
SX-103
SX-104
SX-159
SX-132
SX-108
SX-109
SX-183
SD-107
SD-105
SX-166
SX-168
SX-174
SX-171
SX-125
SX-167
SX-181
SX-179
SX-124
SX-180
SX-182
SX-139
SX-176
SX-107
SX-140
SX-172
SD-104
SX-173
SD-106
SX-120
SX-136
SX-201-1
-3
-2
SX-135
SX-175
SX-113
SX-165
SX-177
SX-119
SX-117
SX-114
SX-134
SX-116
SX-115
SX-154
SX-155
SX-210
SX-207
SX-208
SX-178
SX-164
SX-143
SX-145
SX-202
SX-157
SX-209
SX-206
SX-205
SX-203
SX-170
SX-161
SE-201
SX-204
0
10
20m

図５　遺構配置図

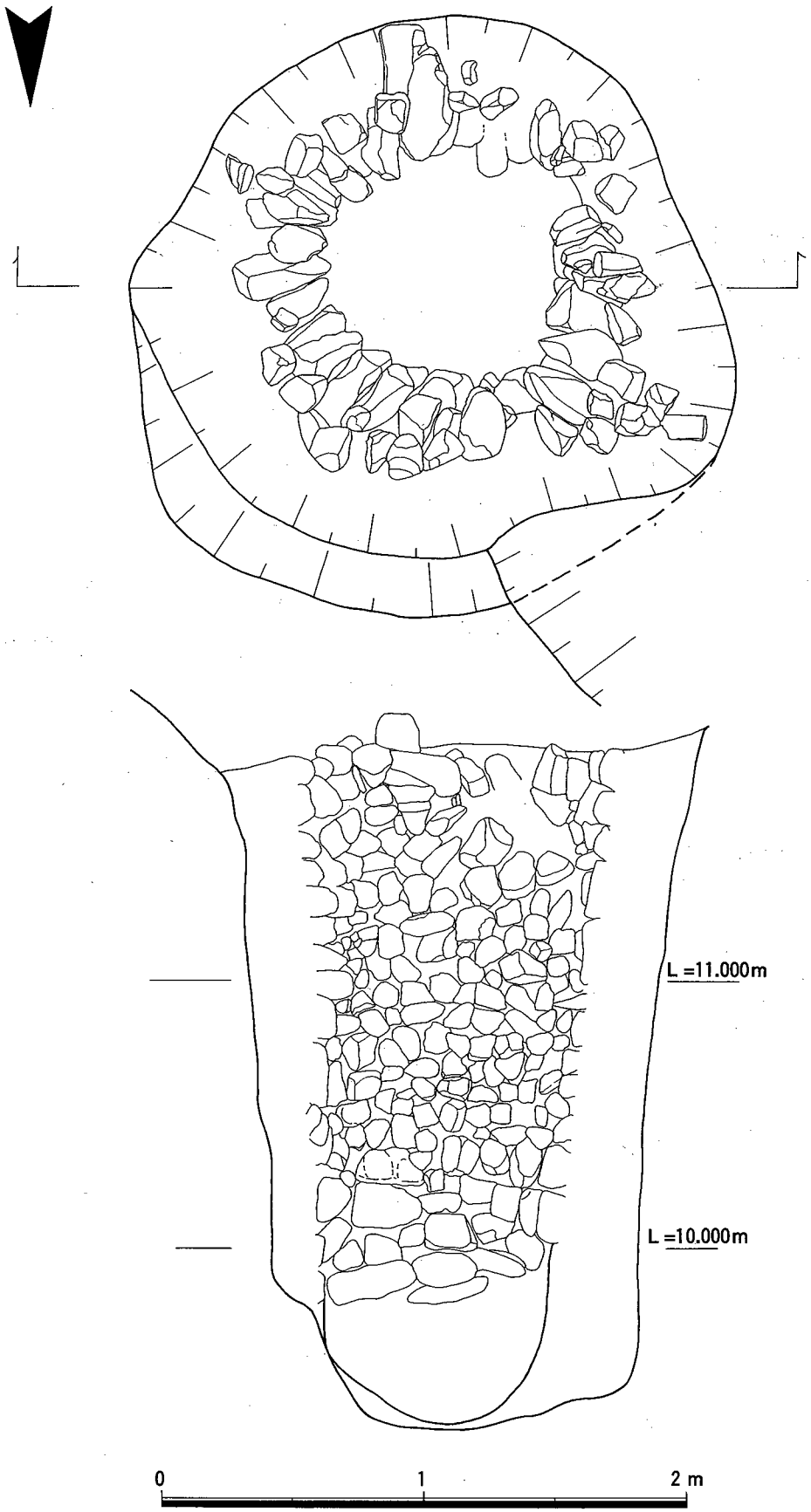


図6　SE－201

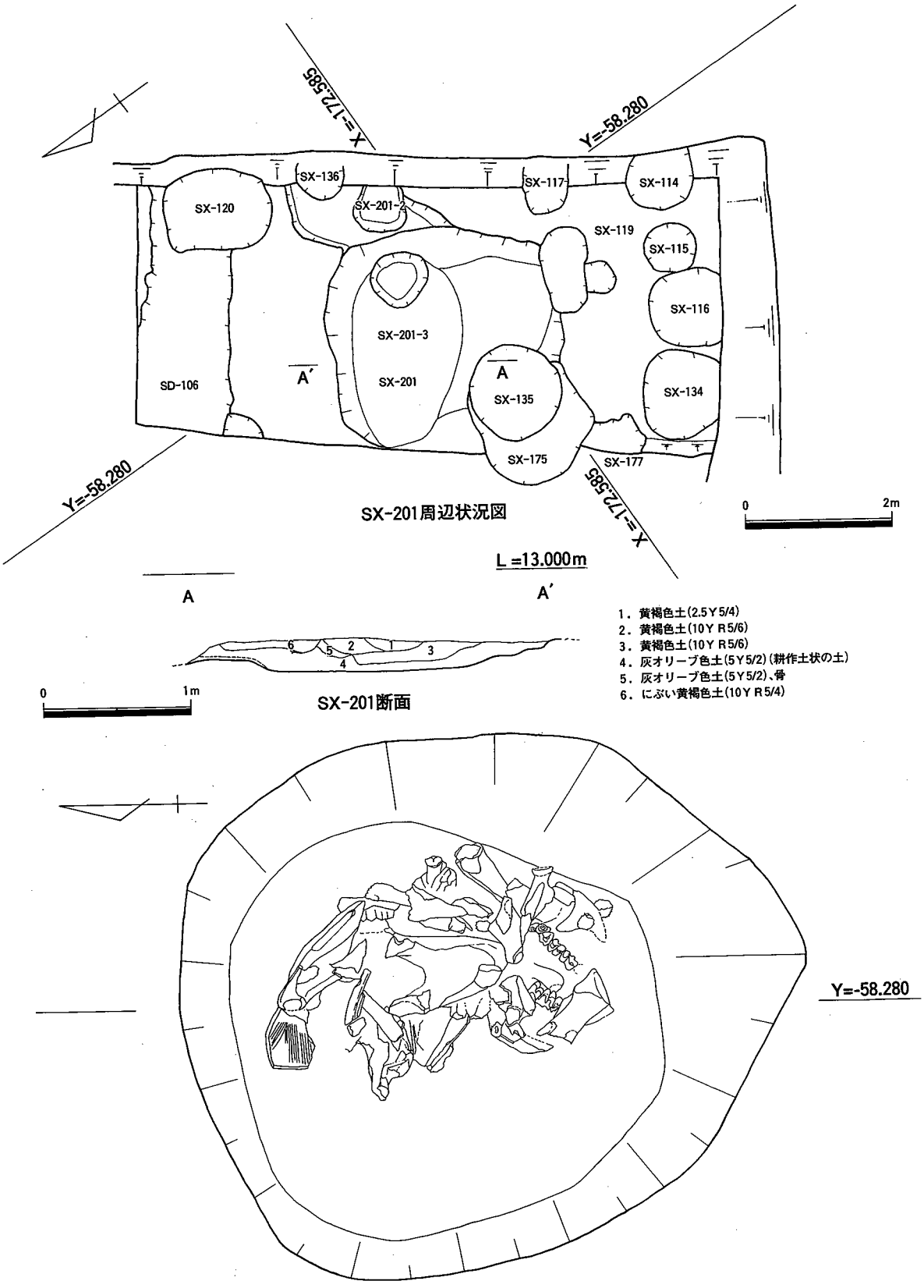


図７　ＳＸ－２０１堀断面図、ＳＸ－２０１－３出土状況図

体の規模は不明であるが検出長0.9m、幅約0.6m、深さ0.4mである。ＳＸ－２０７，ＳＸ－２０８と同一かもしくは平行して走る溝と考えられる。

第１遺構面

調査区ほぼ全域において土坑（廃棄土坑、粘土採掘土坑）、溝を検出した。廃棄土坑は耕作土を埋土としており、粘土採掘土坑は耕作土を主体とし、地山土ブロックを含む埋土である。溝の埋土は暗灰黄色土である。

ＳＤ－１０４

本遺構はＩ－５、Ｊ－４、Ｊ－５、Ｋ－５区にて検出した溝である。幅約0.5m、検出長13.5m、深さ0.1mで、埋土は耕作土である。本溝は、水田の潅漑用水路と考えられる。また、西側に平行して走るＳＤ－１０６との間は道であったことが、市営住宅建設前の地図により確かめることができた。

ＳＤ－１０６

本遺構は幅約１m、検出長約４mの溝である。埋土は耕作土で北側に石組みがある。遺物は青磁碗、白磁碗が出土している。道は、幅約1.5mを測る。

ＳＤ－１０５

本遺構はＥ－４、Ｅ－５、Ｆ－４、Ｆ－５、Ｆ－６、Ｇ－６区にて検出した溝である。北境川に流れ込むもので18世紀末から19世紀前半の陶磁器、瓦が出土している。最大幅２m、深さ0.3mで、埋土は暗灰褐色土である。

ＳＤ－１０７

本遺構はＦ－５、Ｆ－６、Ｇ－６区にて検出した溝である。ＳＤ－１０５を切っており、溝が再掘削されていることがわかる。幅0.8m、深さ0.2mを測る。

ＳＸ－１０１

本遺構はＩ－１、Ｉ－２区にて検出した粘土採掘土坑である。幅約1.4mである。検出長2.2m、深さ0.6mである。埋土は耕作土で、採掘した粘土ブロックを含み、同時に瓦や陶磁器を廃棄している。陶磁器は19世紀代のものが出土している。

ＳＸ－１０３

本遺構はＩ－２区にて検出した粘土採掘土坑である。調査区外に広がるため全体の規模は不明であるが検出長１m、深さ0.3mである。埋土は耕作土で瓦や陶磁器を廃棄している。陶磁器は19世紀代のものが出土している。

ＳＸ－１０４

本遺構はＩ－２区にて検出した粘土採掘土坑である。他の遺構に切られるが、検出長約1.1m×0.9m、深さ0.2mである。埋土は耕作土で、瓦や陶磁器が出土している。

ＳＸ－１０７・ＳＸ－１７６

本遺構はＪ－４区にて検出した粘土採掘土坑である。ＳＸ－１０７は一辺約1.6mの方形で、深さ0.5mである。ＳＸ－１７６はＳＸ－１０７に切られており、検出長約１m、深さ0.5mである。

掘削後、耕作土で埋め戻されたと考えられるが、水路からの水の流入によって降雨時には水が溜まっていたようである。

ＳＸ－１０８

本遺構はＨ－３、Ｈ－４区にて検出した粘土採掘土坑である。検出長2.2m、深さ0.4mで、遺物は瓦片が出土している。

ＳＸ－１０９

本遺構はＩ－３、Ｈ－３区にて検出した粘土採掘土坑である。ほぼ円形で直径1.5m、深さ0.03mである。

ＳＸ－１４６

本遺構はＨ－３、Ｉ－３区にて検出した検出長3.4m、深さ0.3mの粘土採掘土坑である。

ＳＸ－１７１

本遺構はＨ－５、Ｉ－５区にて検出した土坑である。埋土は耕作土で幅2.8m、検出長1.2m、深さ約１mである。広範囲に粘土採掘を行ったと見られる。

ＳＸ－１７２

本遺構はＩ－５区にて検出した土坑である。ＳＸ－１７３を切り、隣接遺構に切られる。直径約2.2m、深さ0.2mの円形の粘土採掘土坑と考えられる。しかし、ＳＸ－１０１ほかに見られるような広範囲に粘土採掘を行ったものではない。埋土は耕作土である。

ＳＸ－１７３

本遺構はＩ－５区にて検出した粘土採掘土坑である。ＳＸ－１７４を切り、ＳＸ－１７２に切られる。直径２m、深さ0.1mである。

ＳＸ－１７４

本遺構はＩ－５区にて検出した土坑である。隣接遺構に切られており、検出長は２m以上、深さ0.2mである。切り合い関係から周辺遺構では一番古いと考えられる。時期は出土遺物から19世紀代と考えられる。

埋め桶遺構

ＳＸ－１２０から、ＳＸ－１３６までは埋め桶遺構及びその可能性のあるものである。ほとんどの埋め桶は２ないし３個所が近接しており、耕作土および陶磁器、瓦による廃棄によって埋められている。また、残存状況に差が見られ、底板が残るものと側板のみが残るものに分けられる。調査区西側で検出した埋め桶は４つ並び、他のものとは異なる。

ＳＸ－１２０

本遺構はＩ－６区にて検出した。楕円形を呈し底板、側板が残る。長軸1.9m、短軸1.4m、深さ0.4mである。ＳＤ－１０６を切っている。

ＳＸ－１２４

本遺構はＨ－６区にて検出した。ＳＸ－１２５と対をなし、直径1.4m、深さ0.4mで、近接して存在している。遺物は肥前系印判染付皿などが出土し、明治時代のものと考えられる。

ＳＸ－１２５

本遺構はＧ－５、Ｇ－６、Ｈ－５、Ｈ－６区にて検出した。直径1.6m、深さ0.1mで、出土遺物は肥前系印判染付、銭銅貨などで明治時代のものである。

ＳＸ－１４３

本遺構はＤ－７、Ｅ－７区にて検出した。ＳＸ－１４５と対をなし、直径約1.5m、深さ0.3mである。遺物は瓦片が出土している。

ＳＸ－１４５

本遺構はＤ－７、Ｅ－７区にて検出した。直径約1.5m、深さ0.05mである。遺物は瓦片が出土している。

ＳＸ－１３９

本遺構はＩ－４、Ｊ－４区にて検出した。直径約1.5m、深さ0.5mである。ＳＸ－１４０と対となるもので底板を確認した。遺物は出土していない。

ＳＸ－１４０

本遺構はＩ－４、Ｉ－５、Ｊ－４、Ｊ－５区にて検出した。直径約1.2m、深さ0.4mである。遺物は出土していない。

ＳＸ－１５５

本遺構はＣ－６、Ｃ－７区にて検出した。東西方向両側の遺構と３カ所セットと考えられ、直径約1.5m、深さ0.3mである。底板が残る。遺物は出土していない。

ＳＸ－１５９

本遺構はＧ－４区にて検出した。隣接遺構と並ぶと考えられ、底板、側板が残る。直径1.3m、深さ0.3mである。遺物は出土していない。

ＳＸ－１６４

本遺構はＤ－７区にて検出した。直径0.9m、深さ0.4mで隣接遺構と並ぶ。埋土は粘土ブロックを含む。遺物は出土していない。

ＳＸ－１６６

本遺構はＧ－５、Ｇ－６区にて検出した土坑である。直径1.4m、深さ0.5mでＳＸ－１６８と並ぶ。埋土は粘土ブロックを含み、埋土の状況から埋め桶、粘土採掘土坑の可能性がある。遺物は出土していない。

ＳＸ－１６８

本遺構はＧ－６区にて検出した土坑である。直径1.4m、深さ0.3mで埋土は粘土ブロックを含む。遺物は出土していない。

ＳＸ－１６０

本遺構はＦ－３区にて検出した土坑である。調査区外に広がるため全体の規模は不明であるが、幅0.7m、検出長約１m、深さ0.3mである。遺物は出土していない。

ＳＸ－１１４

本遺構はＪ－７区にて検出した。調査区外に広がるため全体の規模は不明であるが、直径1.1m、深さ0.4mである。

ＳＸ－１１５

本遺構はＪ－７区にて検出した。直径1.1m、深さ0.2mである。遺物は出土していない。

ＳＸ－１１６

本遺構はＪ－７区にて検出した。直径1.3m、深さ0.3mである。側面部分にて竹製のタガ、底板が残る。

ＳＸ－１３４

本遺構はＪ－７区にて検出した。直径1.6m、深さ0.1mである。遺物は出土していない。

ＳＸ－１３６

本遺構はＩ－６区にて検出した土坑である。直径約１m、深さ0.4mである。土坑内からは牛、馬の骨が出土している。

ＳＸ－１１７

本遺構はＩ－７、Ｊ－７区にて検出した土坑である。調査区外に広がるため全体の規模は不明であるが、検出長0.9m、幅0.8m、深さ0.3mである。土坑内からは犬の骨が出土している。底部分に骨を入れ、上部に地山粘土ブロックで密封する形で埋め戻しがされている。

ＳＸ－１１９

本遺構はＩ－７、Ｊ－７区にて検出した土坑である。検出長1.5m、幅0.8m、深さ0.3mである。土坑内からは犬の骨が出土している。底部分に骨を入れ、上部に地山粘土ブロックで密封する形で埋め戻しがされている。

ＳＸ－１７５

本遺構はＪ－６、Ｊ－７区にて検出した土坑である。直径1.8m、深さ0.5mである。埋土は耕作土に地山粘土ブロックを含むものであり粘土採掘土坑と考えられ、埋め戻し後にＳＸ－１３５が切っている。遺物は瓦が出土している。

ＳＸ－１７７

本遺構はＪ－６、Ｊ－７区にて検出した土坑である。撹乱によって遺構が破壊されており全体の規模は不明であるが、検出長0.6m、深さ0.2mである。遺物は瓦が出土している。

ＳＸ－１３５

本遺構はＪ－６区にて検出した井戸である。直径1.5m、深さ1.5mで大量の瓦を投棄して埋め、井戸内からは瓦のほかに金属製滑車も出土している。時期は出土した瓦から明治以降と考えられる。

ＳＸ－１１３

本遺構はＫ－５、Ｌ－５区にて検出した井戸である。内径約1.1m、1.5mである。

ＳＸ－１６５

本遺構はＫ－５、Ｋ－６、Ｌ－５、Ｌ－６区にて検出した土坑である。直径1.6m、深さ２m以上で井戸の可能性も考えられる。精良な粘土の地山が分布する地点であることから、粘土採掘土

坑と考えられる。土坑内からは牛の骨が出土している。

ＳＸ－１３２

本遺構はＥ－５、Ｆ－５区にて検出した土坑である。直径1.7m、深さ1.8mである。ＳＤ－１０５を切りＳＤ－１０７に隣接しており、溝横につくられた貯水槽と考えられる。遺物は磁器染付碗を中心として19世紀代のものが出土している。

ＳＸ－１４７

本遺構はＥ－４区にて検出した土坑である。円形で直径1.7m、深さ約0.5mである。ＳＸ－１３２と同様に貯水槽の可能性が考えられる。

ＳＸ－１５４

本遺構はＢ－６区にて検出した土坑である。検出長１ｍ、幅0.9m、深さ0.15mである。

ＳＸ－１５７

本遺構はＥ－８区にて検出した土坑である。撹乱に切られており、直径0.8m、深さ0.2mである。

ＳＸ－１６１

本遺構はＤ－８区にて検出した土坑である。円形で直径1.4m、深さ0.3mである。

ＳＸ－１６７

本遺構はＧ－６区にて検出した土坑である。広範囲に行った粘土採掘土坑と考えられる。検出長3.2m、深さ0.3mである。

ＳＸ－１７０

本遺構はＣ－８区にて検出した土坑である。円形で長軸約1.5m、短軸1.2m、0.2mである。

ＳＸ－１７８

本遺構はＤ－７、Ｅ－７区にて検出した土坑である。周辺遺構に切られているが検出長約２ｍ、幅1.3m、深さ0.1mである。粘土採掘土坑と考えられ、既設建物による削平により詳しい状況は不明である。

ＳＸ－１７９

本遺構はＧ－６区にて検出した土坑である。周辺遺構に切られ、また調査区外に広がるため全体の規模は不明である。検出長約３ｍ、深さ0.2mである。粘土採掘土坑と考えられる既設建物による撹乱、削平により詳しい状況は不明である。

ＳＸ－１８０

本遺構はＧ－６区にて検出した土坑である。周辺遺構に切られ、検出長0.5m、深さ0.1mである。

ＳＸ－１８１

本遺構はＧ－６区にて検出した土坑である。周辺遺構に切られている。遺構は平面形が円形と考えられ、直径約1.3m、深さ0.3mである。

ＳＸ－１８２

本遺構はＧ－６区にて検出した土坑である。周辺遺構に切られ、全体の規模は不明である。検出長0.5m、深さ0.1mである。

ＳＸ－１８３

本遺構はＦ－５区にて検出した土坑である。撹乱に切られるため全体の規模は不明であるが検出長1.1m、深さ0.1mである。

粘土採掘は調査区北側の地山が精良な粘土部分で行われている。土坑の形状や埋め戻し方法は何種類かに分けることができる。比較的規模の大きいもので集中して広範囲に掘削を行ったもの。調査区北側隅に集中するＳＸ－１０１、ＳＸ－１０３、ＳＸ－１４６など。ＳＸ－１０１のように方形のプランをもつもの。埋め戻し時に耕作土と掘削途中で出た粘土ブロックの混じるもの、また、耕作土と陶磁器、瓦を廃棄して埋めるものに分けられる。調査区北西部でみられる土坑は円形で、ＳＸ－１７４からＳＸ－１４０まで切り合いながらつながる土坑である。粘土採掘時に、円形土坑を近接して掘削した結果、土坑同士が直線的につながるものとなり、多少の規模の差はあるものの、耕作土を埋土として掘削順序がよくわかる。掘削された粘土は近接する貝塚寺内町で建築資材（建物壁、土塀、蔵等）として使用されたことが近年の分析で明らかとなっている。

５、出土遺物

ＳＥ－２０１

１、19は白色土器である。ともに口径10.8cmで、ヘソ皿状に見込み部が盛り上がる。

２～５、７～11、12～18は瓦器椀で、高台部の退化がみられるもので14世紀初頭に位置付けられる。15は口径7.0cmの土師器小皿である。17は口径11.2cmの土師器皿である。16は外面に灰オリーブ色釉のかかる口径1.4cmの瀬戸小壷で13世紀後半のものである。20～23は土師質甕、24は瓦質こね鉢、25は東播系須恵質こね鉢、26、27は瓦質すり鉢である。28～34は瓦質羽釜である。

ＳＸ－２０１

35～37は土師器小皿である。38は復元口縁部径10.8cmの瓦器小皿である。39は復元底部径7.2cmの白磁皿である。40は復元11.7cmの土師質ルツボである。未使用品で内面をユビ押さえで仕上げる。41は復元口径10.2cmの土師質タコ壷である。42、43、45、46は瓦質すり鉢である。44、47、48は瓦質甕である。49～58は瓦質羽釜である。出土遺物の時期は瓦器椀から判断すると高台が消失し、浅い小皿に近い状態であることから14世紀後半に位置付けられる。

ＳＸ－２０１－３

59～61は瓦質羽釜である。60は口縁部に２ヶ所穴を有する。焼成前に穴をあけている。62は復元口径31.4cmの瓦質すり鉢である。時期はＳＸ－２０１とほぼ同時期と考えられる。

ＳＸ－２０３

96は口径7.0cmの土師器小皿である。105は復元底部径14.8cmの陶器である。

ＳＸ－２０７

63～67、71～75は瓦質羽釜である。外面鍔部下をケズリ、内面ハケ目調整を施す。69は瓦質羽釜であるが鍔部の形が異なる。70は瓦質釜である。76、77は瓦質甕である。時期は、14世紀前半に位置付けられる。

ＳＸ－２０８

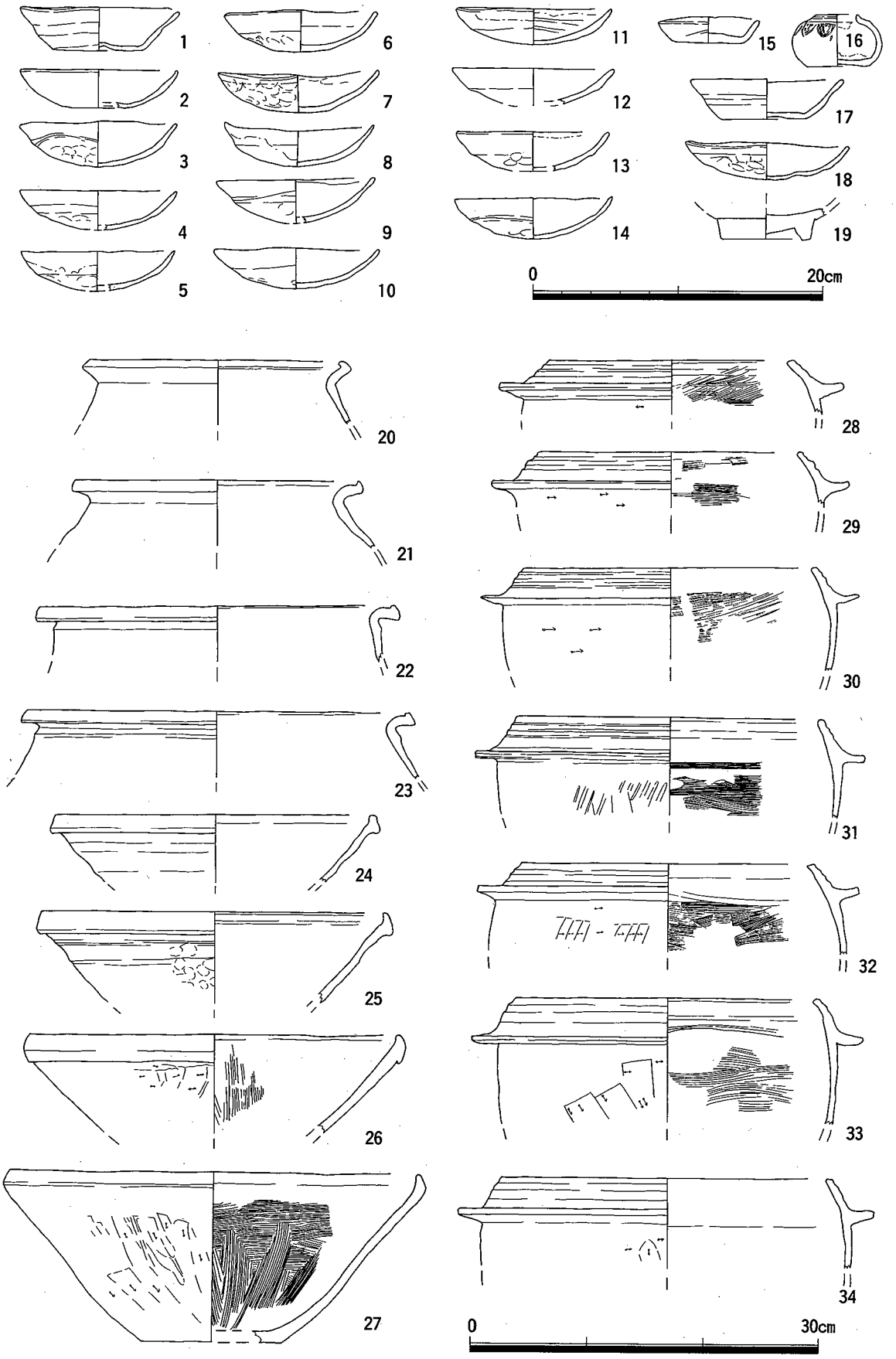


図8　ＳＥ－２０１　出土土器

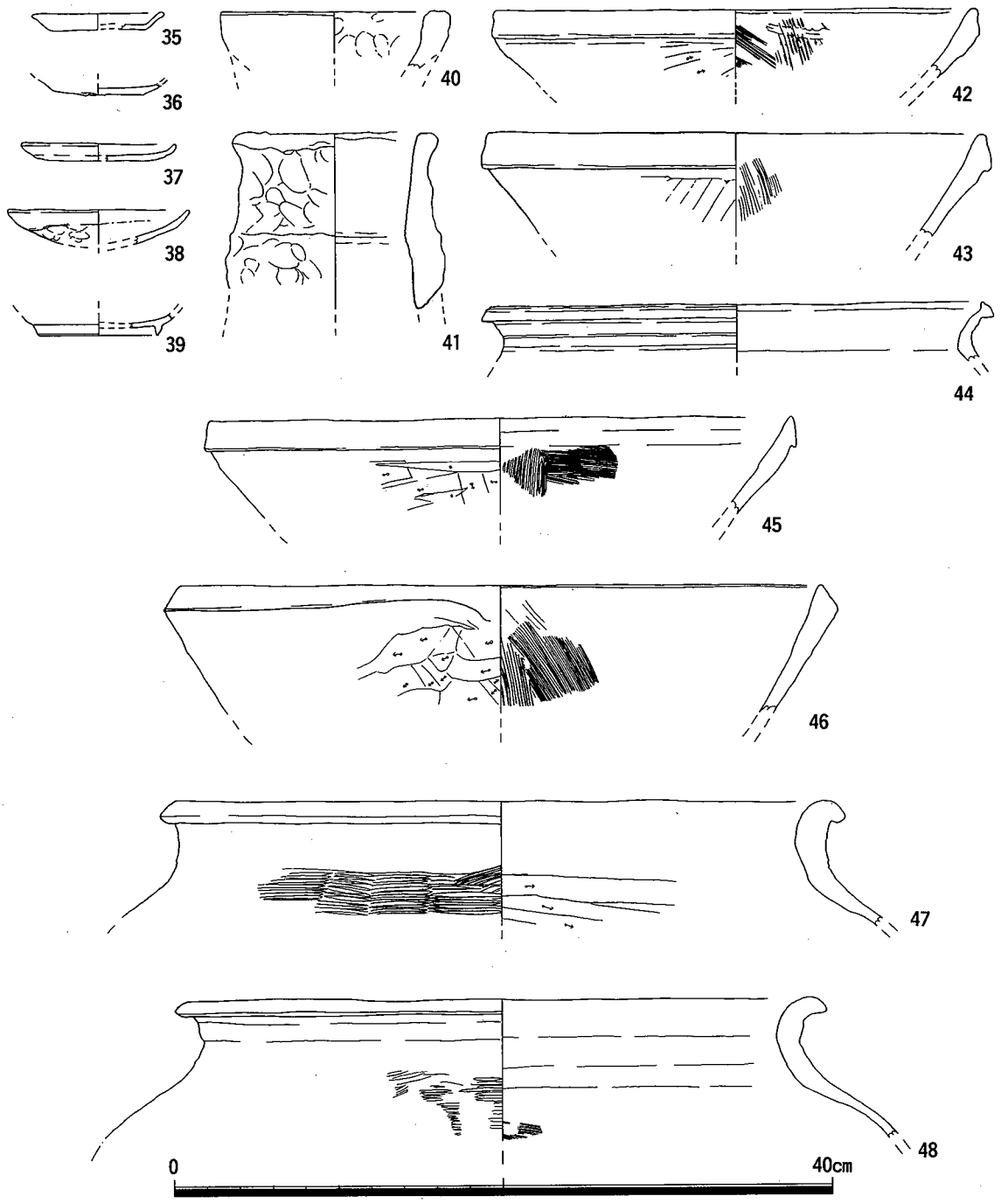


図9　ＳＸ－２０１　出土土器

78、80、81は土師器皿である。80は内面をハケ調整で仕上げる。79は口径9.6cmの瓦器小皿である。82～84は、青磁碗である。82は見込み部に印刻を施す。83は見込み部に印花を施す。

85は復元口径23.2cmの須恵器壷である。86は復元口径22.8cmの土師質甕である。87、89は瓦質こね鉢、88は瓦質すり鉢である。

90、91は土師質たこ壷である。復元口径14.0cmのもので同一個体の可能性のあるものである。92～94は瓦質羽釜である。95は復元口径39.0cmの瓦質甕である。

ＳＸ－２１０

97は復元口径10.6cmの土師器小皿である。

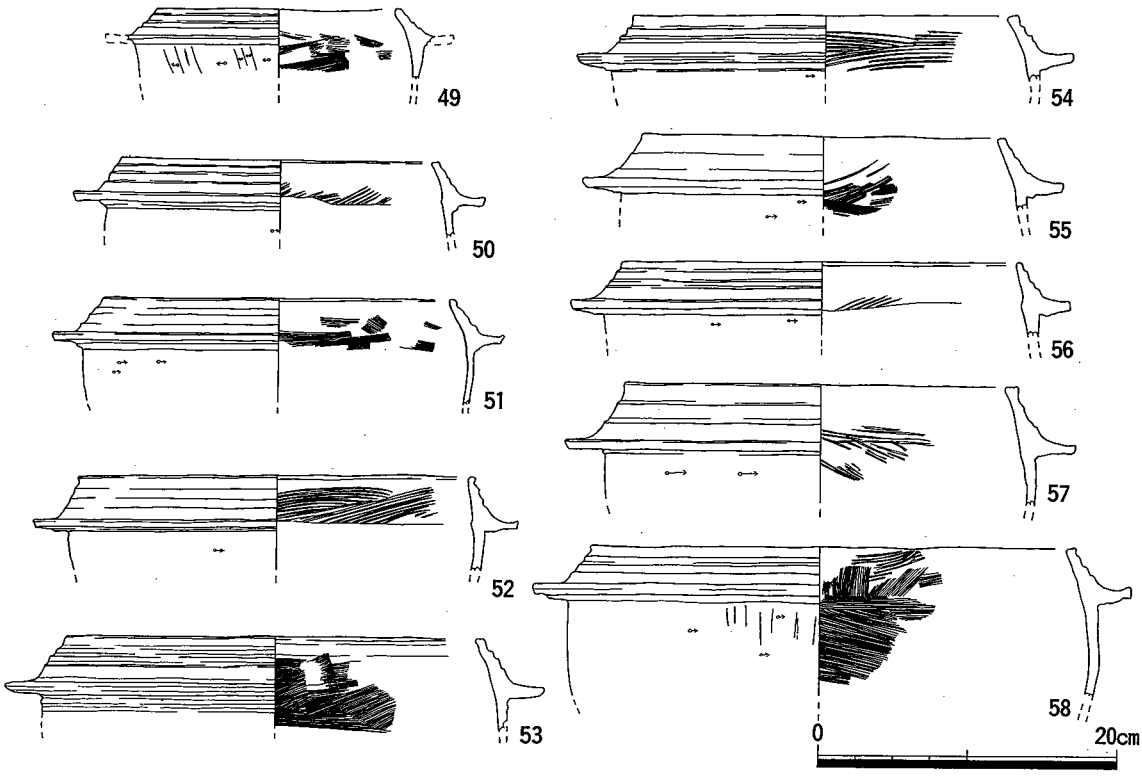


図10　ＳＸ－２０１　出土土器

ＳＤ－１０６

98、103は青磁碗である。98は高台径5.0cmである。103は高台径5.0cmである。内面見込み部に印花を施す。

100は復元高台径5.4cmの白磁碗である。

包含層出土遺物

99、102は青磁碗である。99は復元高台径6.0cmである。102は高台径5.0cmである。見込み部に線刻を施す。

101、104は青花である。101は復元高台径6.4cmである。内面見込み部に呉須で花文、外面に文様を施す。104は復元高台径18.0cmの皿である。内面に呉須で文様を描く。

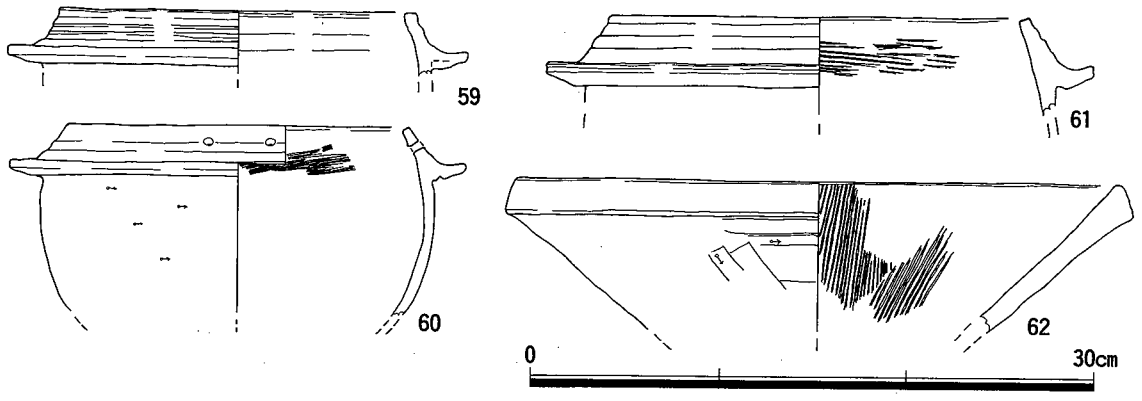


図11　ＳＸ－２０１－３　出土土器

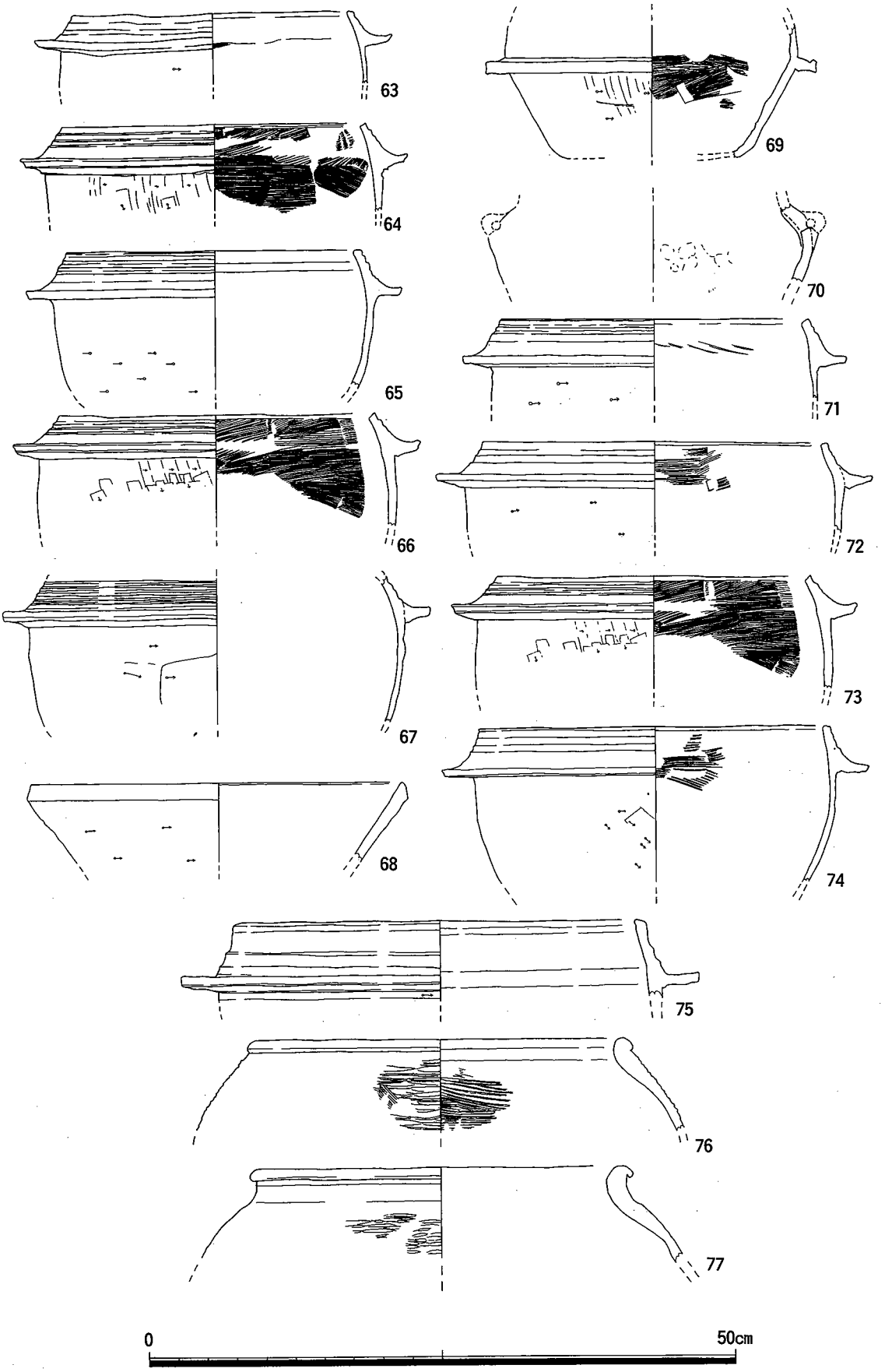


図12　ＳＸ－２０７　出土土器

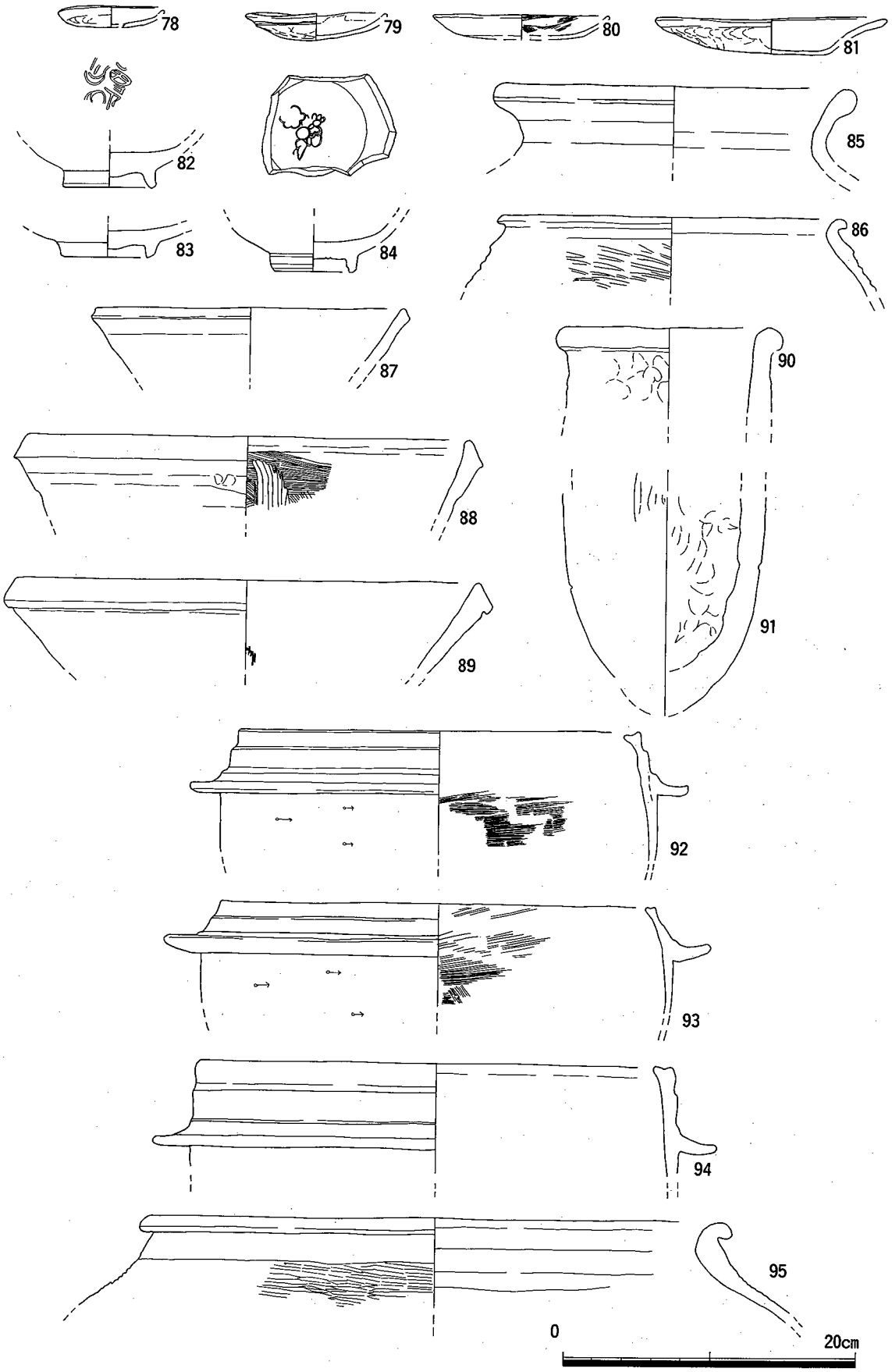


図13　ＳＸ－２０８　出土土器

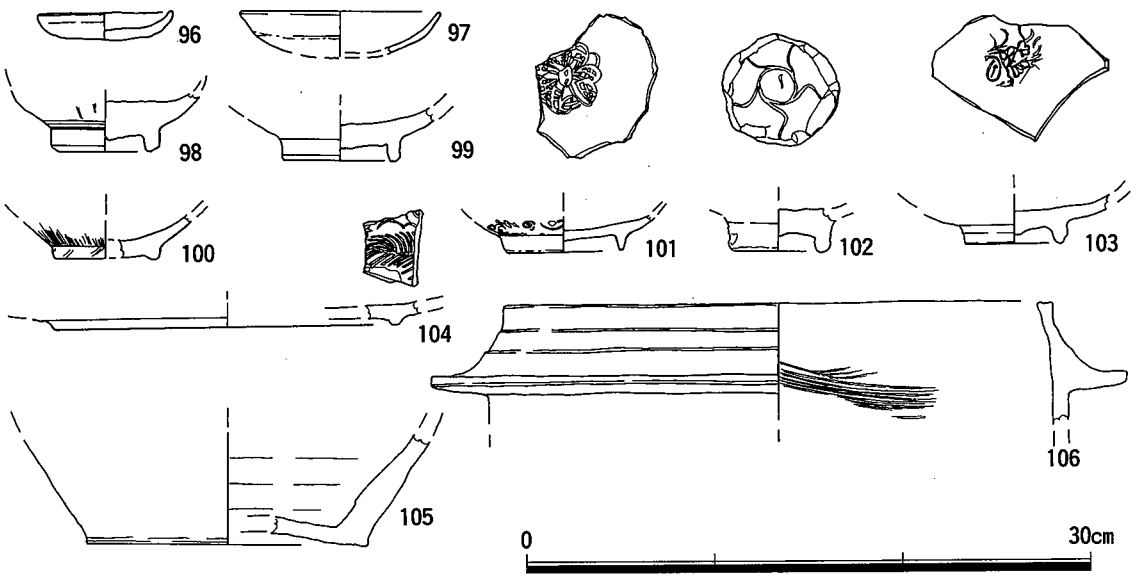


図14　ＳＸ－２０３（96、105）、ＳＸ－２１０（97）、ＳＤ－１０６（98、100、103）、中世包含層（99、101、102、104、106）出土土器

106は復元口径14.0cmの瓦質羽釜である。

６．まとめ

今回の調査では撹乱を受けている場所が広く存在したにもかかわらず、中世と近世の多くの遺構を検出した。当地は古くは嶋村と呼ばれており、その名が文献に姿を見せるのは16世紀の中頃のことである（中家文書）。近世には南東にある福田村庄屋による枝村支配を受けていたことが長年の古文書調査によって明らかにされている（福原家文書）。これまで古文書では明確でなかった近世以前の村の存在を考古学的に確認したことが、大きな成果と言える。

本調査地では中世以前の遺物はほとんど出土しておらず、遺構も検出していない。本格的な開発の手が入るのは中世からである。中世の遺構は、井戸、区画溝を検出した調査区南東部の集落関係の遺構と、調査区南西部の獣骨廃棄土坑の２箇所である。

調査地で最も古い遺構は井戸（ＳＥ－２０１）で、埋没時期は14世紀初頭である。石組みで強固につくられ、遺物は、白磁碗、瀬戸小壷、白色土器、瓦器椀、土師小皿、土師質甕、瓦質こね鉢、東播系須恵質こね鉢、瓦質すり鉢、瓦質羽釜、漆塗りの鉢、竹かごなどが出土している。出土遺物の時期は14世紀初頭を主とするが、13世紀後半の遺物も少量含まれる。遺物包含層からも同時期の瓦器椀片が出土しており、本集落の出現期を示す遺構は未検出であるが、13世紀後半には一定規模の集落が形成されていたと考えられる。

次に、集落の北端の境と考えられる溝（ＳＸ－２０７、ＳＸ－２０８）からは、瓦器椀、羽釜、すり鉢などの14世紀前半の遺物が多数出土している。今回の調査では建物跡を検出できなかったが、井戸の規模や出土遺物の量の多さから考えると調査区南側に想定される集落では、建物も小規模なものではなく、集落範囲も広範囲に及ぶのではないかと推測できる。本集落の成立と集落の範囲については、今後の調査地南側の調査成果を待ちたい。

獣骨廃棄土坑は、不用獣骨の最終処分土坑といえる。ＳＸ－201、ＳＸ－201－２、－３の３ヶ

所検出した土坑内からは牛、馬、犬、鹿、猪、スッポン、亀などの骨が出土している。スッポン、亀、犬は食用として、牛、馬、鹿、猪は食用以外にも骨を加工したり、皮を加工したりといったことが行われていたと推定される。廃棄土坑のみが検出されただけで作業場にあたる遺構は検出できなかったが、ＳＸ－２０１の南側未調査部分に近接して存在した可能性がある。獣骨廃棄土坑の掘削時期は出土遺物から、14世紀後半に位置付けられる。ＳＸ－２０１は処理頭数が多く、一連の解体作業によりほぼ一度に廃棄している。また、ＳＸ－２０１－２、－３は解体作業途中で出る一部を廃棄したと推定される。

集落との関係を考えると、時期的には獣骨廃棄土坑が若干新しいといえる。距離的には未調査部分と撹乱を受けた部分をはさんで約30m離れているに過ぎず、集落に近接して廃棄場所が存在していたことになる。

調査地において15世紀後半から18世紀前半にかけての遺物・遺構は発見できず、空白の期間がある。集落が縮小あるいは集落内で土地の利用方法がかわったため、調査地が利用されない状況となったと考えられる。

近世には調査地は耕作地として利用される。その頃に掘削された溝として、ＳＤ－104、ＳＤ－105があげられる。ＳＤ－104は、調査区北西部で北境川と平行する。ＳＤ－105は、調査区中央部を南西－北東方向に走り、北境川に直角方向に流れ込む。両溝ともに灌漑用溝で、溝内からは18世紀後半から19世前半にかけて陶磁器、瓦などが多数出土している。これらの遺物は、近接する集落で廃棄されたものと考えられる。

調査区北側では粘土採掘土坑が分布しており、埋め戻し後に再び耕作地として使用された変遷が明らかとなった。また、19世紀前半から明治にかけて使用された埋め桶を多数検出した。貯水槽や肥溜めとして使用されたと考えられる。埋め桶については、それぞれの用途、使用時期を明らかにして考えていく必要がある。

中世の獣骨廃棄土坑であるＳＸ－201周辺には、近世段階の獣骨廃棄土坑（ＳＸ－117、ＳＸ－119、ＳＸ－136他）も集中しており、中世、近世ともに獣骨の廃棄場所は重複する。検出地は中世では集落内北端であるが、近世では集落外の耕作地であり、利用状況が異なる。近世廃棄場所が重複することは、何らかの意識の存在が推定できるが、現状資料で解明することは困難である。

以上、判明点、今後の課題について明らかにすることができた。今後も考古学的なアプローチだけでなく、古文書、自然科学等による成果とも連携して調査を進めていく必要がある。

7、東遺跡の獣骨類

はじめに

今回の調査では中世から近世にかけての自然遺物が多数出土した。ここでは、特に出土の多い獣骨類についてその概要を示す。

現地調査での諸事情から、これらの獣骨は発掘残土等の水洗選別を実施しておらず、土器類等と同様の取り上げ方法を採っている。そのため、すでにサンプリングエラーを多く含むことが前提となっている。また、取り上げ時の崩壊等で数cmの細片になったものが多く、接合復元が不可能なものが多数を占めるなど当初から大きなバイアスが存在している。本来ならば、種・部位別の詳細なデータを提示すべきであるが、上記のバイアスがすでに存在すること・紙幅の関係等から、今回は遺構毎の種別の出土状況を主に示す。

1、種・部位の同定方法

現地での取り上げ後、洗浄・乾燥を行い、パラロイドB-72による保存処理を行った。その後、接合作業を実施したが、接合数は少ない。

同定は、Schmid（1972）[1]、後藤・大泰司（1986）[2]のアトラスを使用し、イヌ・ネコについては一部現生標本を使用した。

2、結　　果

同定の結果は、表1、2にまとめた。動物種ではほ乳類6、爬虫類2、魚類2の計10種を確認した。以下、出土遺構の多い近世から示す。

近　　世

獣骨が出土した遺構は33ヶ所を数える。出現頻度はイヌが最も多く15ヶ所、ウマ(11)、ウシ(10)と続き、ネコが6ヶ所である。

出土量的にはウシ、ウマが最も多い。これは、長管骨（四肢骨）が破片となったためであり、全体での個体数は10個体以下と推定できる。頭骨、椎骨の出土は低率であり、長管骨に偏る。両種は保存状態は不良であり、解体痕等の観察は困難である。

最多頻度のイヌはＳＸ－117、119、124、133、144、147において多量に出土した。ネコはＳＸ－119において多量に出土した。117は一部ネコ（1個体）を含むものの、その他はイヌだけであり（1個体以上)、119は一部シカを含むものの、イヌ（6個体以上)、ネコ（6個体以上）である。全体ではイヌ23個体以上、ネコ13個体以上の最小個体数が考えられるが、取り上げ時のバイアス等を考慮に入れると2～3倍の個体数が推定できる。すなわち、イヌ45～70個体、ネコ25～40個体である。保存状態は処理が必要で無い程良好であり、ＳＸ－124、144、171ではカットマークが認められ、解体されている。119は、頭骨から後肢にかけて揃っている。

イノシシは臼歯、シカは長管骨、臼歯の出土であり、全体ではイノシシは2個体程度、シカは5個体以下の個体数が推定できる。しかし、骨の残存率は非常に低い。

	ウシ	ウマ	ウシ、ウマ	イヌ	ネコ	シカ	イノシシ、ブタ	不明	スッポン	カメ	タイ	サバ科	備　考
SD-105	臼歯1							○					
SD-106	1	1		1			犬歯1	○					
SD-107	臼歯1	◎	○			3？		○					
SX-101				4？									
SX-103				1				○					
SX-107		◎											
SX-113								○					
SX-117				◎	1								
SX-119				◎	◎	1		○					
SX-118								○					
SX-120					1？			○					
SX-124				◎									解体痕
SX-128		臼歯1											
SX-130								○					
SX-131													
SX-133			○	◎	○								
SX-136	◎	◎		2	2								
SX-139				1									
SX-140			○			2							螺旋痕
SX-144	2			◎	2			○			1	6	解体痕
SX-147				◎									
SX-155				1？									
SX-161	○												
SX-163				1				○					
SX-165	臼歯2	◎						○					
SX-167		○	○	1				○					
SX-169	○												
SX-171	2	臼歯1		2		4	1		1				解体痕
SX-174		臼歯1											
SX-177								○					
SX-179	◎	1				2		○					
SX-180		1											

表1　近世出土獣骨一覧　　（数字は破片点数）

近世では、出土量的にはウシ、ウマが多いが、個体数からすると圧倒的にイヌが多く、ネコがそれに次ぐ。この状況が集落全体の活動の結果とはできないが、少なくとも、調査地に廃棄された状況は、イヌ、ネコが日常的に扱われ、解体されたことを示している。

中　　世

獣骨が出土した遺構は４ヶ所を数える。出現頻度はウシ、ウマがすべての遺構から出土し、シカ、イノシシが２ヶ所、イヌが１ヶ所である。当該時期の遺構は近世に比べ極端に少なくなり、骨の出土した遺構は４ヶ所とさらに限定されるため、近世との単純比較はできない。しかし、ほとんどがウシ、ウマで占められる。

ＳＸ－２０７は顎骨、臼歯を中心に出土し、ウシ・ウマ共に１個体以上が推定できるが、躰部は破片となっており、出土も少量である。ＳＸ－２０１の下部に存在するＳＸ－２０１－２についても臼歯の出土であり、ウシ・ウマ共に１個体以上が推定できるのみである。本来は四肢骨等も存在したと考えられる。ＳＸ－２０１は最も多量に出土した。土坑上層を５cm 程掘削するとほぼ全面にぎっしりと骨が詰まった状況である。ウシ・ウマ共に四肢骨を中心に出土するが、椎骨等他の部位もあり全身の骨が出土している。部位からの個体数はウシ４個体、ウマ２個体である。個体数については、各部位の接合・同定が十分でなく、実際に扱われた個体数については、２～３倍程度の個体数が推定できる。ＳＸ－２０１－３については、現地において出土状況図等を作

	ウシ	ウマ	ウシ、ウマ?	イヌ	ネコ	シカ	イノシシ、ブタ	不明	スッポン	カメ	備考
SX-201	◎	○	○	3		4、臼歯1	臼歯1		1	1	
SX-201-2	臼歯3	臼歯4									
SX-201-3	◎	2、臼歯3				3	1?				
SX-207	臼歯、顎骨	臼歯、顎骨	○								

表2　中世出土獣骨一覧　　（数字は破片点数）

成し、現地説明会まで出土状況を保存した。現地での取り上げは土坑部分を切り取ることとし、骨の取り出しは室内で行った。出土状況図作成面以下の部分については、出土状況図・写真等を参考に、骨単位での取り上げに成功している。ウシは角１、上顎部２個体、下顎骨２個体、肩胛骨左右各１点、上腕骨右２点、左右橈骨・尺骨セット各１点、右橈骨１点、左寛骨、脛骨、踵骨各１点、左中足骨２点が出土し、２個体が推定できる。ウマは左橈骨・尺骨のセットが１点と臼歯が出土し、２個体が推定できるが、残存率は低い。その他、上層掘削時の破片が100点程度あるが、ウシ・ウマものである。

出土した骨の表層が剥離しているため、解体痕等は十分に観察できない。確認できるものは、ＳＸ－２０１ウシ左中足骨に鉈状刃物による痕跡のみである。(3)

ウシ、ウマ以外は断片であり、イヌ３点（１個体)、シカ５点（２個体)、イノシシ２点（２個体)、スッポン･カメ各１点（各１個体）合計12点と少ない。この量では積極的に論じることはできないが、それぞれの遺構にはウシ、ウマに混入し廃棄されたことが考えられる。住民の食用のものであろう。

ＳＸ－２０１～２０１－３は、不用骨を処分したゴミ穴である。土坑の規模・出土骨から見ると、２０１－２、２０１－３は１回の解体作業、若しくは作業途上での廃棄が考えられる。２０１については、１回以上若しくは処理頭数が多い一連の解体作業での廃棄が推定できる。しかし、バイアス等の検討が十分でなく、作業場を検出していないため、これらについては推定の域をでない。土坑の掘削、埋没状況は数時間～数日単位の短期間のものであることは確実であり、解体作業の最終段階について明確にできたものと考える。

おわりに

市内の発掘調査では、古代ではウシ・ウマの臼歯、近世ではウシ・ウマの四肢骨が少量出土するものの、魚骨が中心に出土している。これは骨が酸性土壌の分解作用によって消滅し、発掘調査での確認が難しいということが原因である。今回これらの条件を越えて、中世、近世の獣骨が出土したことは、地域史を考える上で貴重な成果と言える。

獣類の作業の具体相は不明であるが、調査地周辺に作業場が存在したことは確実であり、今後周辺調査に期待がかかる。(前川)

注)

（１）Elisabeth Schmid 1972 "Atlas of Animal Bones -For Prehistorians, Archaeologist and Quaternary Geologists-" ELSEVIER PUBLISHING COMPANY

（２）後藤仁敏、大泰司紀之編　1986『歯の比較解剖学』医歯薬出版株式会社

（３）松井章氏（奈良国立文化財研究所）のご教示による。

8、東遺跡から出土した遺構・遺物に残存する脂肪の分析

帯広畜産大学生物資源化学科　中野益男
㈱ズコーシャ総合科学研究所　中野寛子、長田正宏

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、核酸、糖質（炭水化物）および脂質（脂肪・油脂）がある。これらの生体成分は環境の変化に対して不安定で、圧力、水分などの物理的作用を受けて崩壊してゆくだけでなく、土の中に棲んでいる微生物による生物的作用によっても分解してゆく。これまで生体成分を構成している有機質が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。

最近、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が存在していたこと、[1]古代遺跡から出土した約2千年前のトウモロコシ種子、[2]約5千年前のハーゼルナッツ種子[3]に残存する脂肪の脂肪酸は安定した状態に保持されていることがわかった。このように脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した。[4]

脂質は有機溶媒に溶けて、水に溶けない成分を指している。脂質はさらに構造的な違いによって誘導脂質、単純脂質および複合脂質に大別される。これらの脂質を構成している主要なクラス（種）が脂肪酸であり、その種類、含量ともに脂質中では最も多い。脂肪酸には炭素の鎖がまっすぐに延びた飽和型と鎖の途中に二重結合をもつ不飽和型がある。動物は炭素数の多い飽和型の脂肪酸、植物は不飽和型の脂肪酸を多く持つというように動植物は種ごとに固有の脂肪酸を持っている。ステロールについても、動物性のものはコレステロール、植物性のものはシトステロール、微生物はエルゴステロールというように動植物に固有の特徴がある。従って出土遺物の脂質の種類およびそれらを構成している脂肪酸組成と現生動植物のそれとを比較することによって、目に見える形では遺存しない原始古代の動植物を判定することが可能となる。

このような出土遺物に残存する脂肪を分析する方法を「残存脂肪分析法」という。この「残存脂肪分析法」を用いて、東遺跡から出土した土坑および土器の性格を解明しようとした。

1．土壌および土器片試料

大阪府貝塚市に所在する東遺跡から出土した中世と近世の土坑内の土壌試料と土器試料を分析した。遺跡内での各遺構の配置状況および各遺構内での試料採取地点先の図5他である。試料No.1～No.7は18世紀後半以降と推定されている土坑のもので、No.1～No.3をSX－114の2層上部、2層下部、3層から、No.4～No.6をSX－117の1層中部、2層、3層から、No.7をSX－136の1層から採取した。試料No.8～No.12は14世紀初頭から15世紀前半と推定されている土坑のもので、No.8とNo.10をSX－201の1層、2層から、No.11とNo.12をSX－201－3の下顎下、土器下から採取した。NO.9はSX－201の1層から出土した瓦質羽釜の体部片である。

2．残存脂肪の抽出

土壌試料26～225gに3倍量、土器片試料14gに試料が浸るだけのクロロホルム－メタノール（2：1）混液を加え、超音波浴槽中で30分間処理し残存脂肪を抽出した。処理液を濾過後、残渣に再度クロロホルム－メタノール混液を加え、再び30分間超音波処理をする。この操作をさらに2回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られた全抽出溶媒に1％塩化バリウムを全抽出溶媒の4分の1容量加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

残存脂肪の抽出量を表1に示す。抽出率は土壌試料が0.0047～0.2866％、平均0.0560％、土器片試料が0.0213％であった。この値は全国各地から出土した土壌、石器、土器等の試料の平均抽出率0.0010～0.0100％に比べると、土壌試料は5倍以上高く、土器片試料は2倍くらい高かった。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪は単純脂質で構成されていた。このうち遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸の結合したトリアシルグリセロール（トリグリセリド）、ステロールエステル、ステロールの順に多く、微量の長鎖炭化水素も存在していた。

3．残存脂肪の脂肪酸組成

分離した残存脂肪の遊離脂肪酸とトリアシルグリセロールに5％メタノール性塩酸を加え、125℃封管中で2時間分解し、メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルをクロロホルムで分離し、さらにジアゾメタンで遊離脂肪酸を完全にメチルエステル化してから、ヘキサン－エチルエーテル－酢酸（80：30：1）またはヘキサン－エーテル（85：15）を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した。[5]

残存脂肪の脂肪酸組成を図2－1と2－2に示す。残存脂肪から10種類の脂肪酸を検出した。このうちパルミチン酸（C16：0）、ステアリン酸（C18：0）、オレイン酸（C18：1）、リノール酸（C18：2）、アラキジン酸（C20：0）、ベヘン酸（C22：0）、エルシン酸（C22：1）、リグノセリン酸（C24：0）、ネルボン酸（C24：1）の9種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー－質量分析により同定した。

各試料の脂肪酸組成を見ると、すべての試料中で主要な脂肪酸はパルミチン酸で約37～66％分布していた。特に試料No.4～No.6、No.8、No.9、No.11、No.12ではパルミチン酸が全脂肪の半分以上を占めていた。一般に考古遺物にはパルミチン酸が多く含まれている。これは長い年月の間にオレイン酸、リノール酸といった不飽和脂肪酸の一部が分解し、パルミチン酸を生成するためで、主として植物遺体の土壌化に伴う腐植物から来ていると推定される。ステアリン酸は動物体脂肪や植物の根に比較的多く分布している。オレイン酸の分布割合の高いものとしては、動物性脂肪と植物性脂肪の両方が考えられ、植物性脂肪は特に根、茎、種子に多く分布するが、動物性脂肪の方が分布割合は高い。リノール酸は主として植物種子・葉に多く分布する。

一方高等動物、特に高等動物の臓器、脳、神経組織、血液、胎盤に特徴的にみられる炭素数20以上のアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸などの高級脂肪酸はそれら3つの合計含有率が試 料No.1とNo.2で 約40～42%、No.5とNo.7で 約23～25%、NO.3、No.4、No.6、No.10、No.11、No.12で約12～19%、No.8とNo.9で約6～7%であった。通常の遺跡出土土壌中の高級脂肪酸含有率は約4～10%であるので、高級脂肪酸含有量は試料No.8とNo.9では通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みで、他のすべての試料中では多めであった。特に試料No.1とNo.2には高級脂肪酸が非常に多く、中でもリグノセリン酸が約23～25%も分布していた。リグノセリン酸は脳神経系糖脂質の主要な構成脂肪酸である。高級脂肪酸含有量が多い場合としては、試料中に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等の特殊な部分が含まれている場合と、植物の種子・葉などの植物体の表面を覆うワックスの構成分が含まれている場合とがある。高級脂肪酸が動物、植物のどちらに由来するかはコレステロールの分布割合によって決めることができる。概して、動物に由来する場合はコレステロール含有量が多く、植物に由来する場合はコレステロール含有量が少ない傾向にある。

以上、東遺跡のすべての試料中では主要な脂肪酸がパルミチン酸で、高級脂肪酸もSX－201の1層試料No.8と同層の土器片試料No.9以外には多めに含まれており、特にSX－114の2層試料No.1とNo.2にはリグノセリン酸が非常に多く含まれていることもわかった。

4．残存脂肪のステロール組成

残存脂肪のステロールをヘキサン－エチルエーテル－酢酸（80：30：1）を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ピリジン－無水酢酸（1：1）を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にする。得られた誘導体をもう一度同じ展開溶媒で精製してから、ガスクロマイトグラフィーにより分析した。残存脂肪の主なステロール組成を図3に示す。残存脂肪から11～23種類のステロールを検出した。このうちコプロスタノール、コレステロール、エルゴステロール、カンペステロール、スチグマステロール、シトステロールなど8種類のステロールをガスクロマトグラフィー－質量分析により同定した。

各試料中のステロール組成をみると、動物由来のコレステロールは試料No.7とNo.9に約23～30%、No.5、No.6、No.8、No.10に約13～18%、他のすべての試料に約4～9%分布していた。通常一般的な植物腐植土中にはコレステロールは2～6%分布している。従って、試料No.7とNo.9のコレステロール含有量は非常に多く、No.5、No.6、No.8、No.10のそれも多く、他の試料中ではほぼ通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みであった。

植物由来のシトステロールはすべての試料中に約3～21%分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはシトステロールは30～40%もしくはそれ以上に分布しているので、すべての試料中でのシトステロール含有量は通常の遺跡出土土壌の植物腐植土中でよりも少なめであった。

クリ、クルミ等の堅果植物由来のカンペステロール、スチグマステロールは、すべての試料中

にカンペステロールが約２～５％、ストグマステロールが約３～10％分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはカンペステロール、スチグマステロールが約１～10％分布している。従って、試料中に含まれているこれらのステロールは通常の遺跡出土土壌の植物腐植土中でよりも少なめであった。

微生物由来のエルゴステロールは試料No.９で痕跡程度にしか検出されず、他のすべての試料中に約0.3～2.3％分布していた。この程度の量は土壌微生物の存在による結果と考えられる。

哺乳動物の腸および糞便中に特異的に分布するコプロスタノールは試料No.６に約46％、No.３、No.５、No.７、No.８に約11～15％、他のすべての試料に約３～９％分布していた。コプロスタノールは通常の遺跡出土土壌中には分布していないが、１％程度の量は検出されることがある。また、コプロスタノールの分布により試料中での哺乳動物の存在を確認できる他に、コプロスタノールが10％以上含まれていると、試料中に残存している脂肪の動物種や性別、また遺体の配置状況などが特定できる場合がある。[6] この場合コプロスタノールとコレステロールの分布比はヒト男性4.25、ヒト女性2.75、健康なウシ0.88、病気にかかっているウシ0.42、ウマ0.36、イヌ0.89となる。試料中のコプロスタノールとコレステロールの分布比を表２に示す。表からわかるように、コプロスタノールとコレステロールの分布比は試料No.２とNo.７がウシ（病気牛）、No.８がウシ、No.５とNo.11がウシもしくはイヌ、No.９とNo.12がウマに近かった。試料No.１～No.３はコレステロールとシトステロールの分布比は小さいが、コプロスタノールが存在することから動物遺体または動物由来の脂肪が残存している可能性が高い、試料No.３の値はヒト女性に近いが、ヒト遺体を直接埋葬したにしてはコレステロール含有量が少なすぎるので明確な判定はできない。

一般に動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロールの分布比の指標値は土壌で0.6以上[7]、土器・石器・石製品で0.8～23.5をとる。[8,9] 試料中のコレステロールとシトステロールの分布比を表２に示す。表からわかるように、コレステロールとシトステロールの分布比は試料No.４～No.10が0.6以上であった。試料No.11とNo.12は分布比は0.6以下であったが、かなり0.6に近いものであった。従って、試料No.４～No.10とNo.11、No.12には動物遺体または動物由来の脂肪が残存していることを示唆している。

以上、東遺跡の試料中に含まれている各種ステロール類は、動物性コレステロールがSX－136試料No.７とSX－201土器片試料No.９に非常に多く、SX－117の試料No.５とNo.６、SX－201の試料No.８とNo.10に多く、哺乳動物の腸もしくは糞便由来のコプロスタノールがSX－117試料No.６に非常に多く、SX－114試料No.３、SX－117試料No.５、SX－136試料No.７、SX－201試料No.８に多く、他のすべての試料中にもかなり多く、植物油来のシトステロールがすべての試料中に通常の遺跡出土土壌の植物腐植土中でよりも少なめであった他は、すべて通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みに含まれていることがわかった。コレステロールとシトステロールの分布比はSX－117、SX－136、SX－201のすべての試料が0.6以上、SX－201－3の試料も0.6以下ではあるが0.6に近い値を示し、これらの土坑には動物遺体もしくは動物由来の脂肪が残存している可能性を示唆していた。SX－114の試料はコレステロールとシトステロールの分布比が0.3に近い値を示した

が、コプロスタノールが存在することから、動物遺体または動物由来の脂肪が残存している可能性が高い。コプロスタノールとコレステロールの分布比からは、SX－114の２層試料No.２、SX－136の試料No.７、SX－201の１層試料No.８がウシ、SX－117の２層試料No.５とSX－201－3の下顎下試料No.11がウシもしくはイヌ、SX－201の土器試料No.９とSX－201－3の土器下試料No.12がウマの値に近いことがわかった。

５．脂肪酸組成の数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って各試料の類似度を調べた、同時に試料中に残存する脂肪の持主を特定するために、現生動物試料の脂肪酸との類似度も比較した。予めデータベースの脂肪酸組成とクラスター分析を行い、 その中から類似度の高い試料を選び出し、再びクラスター分析によりパターン間距離にして表したのが図４である。

図からわかるように、東遺跡の試料No.１とNo.２はそれらのみで相関行列距離0.05以内でA群を形成した。東遺跡の他のすべての試料はイノシシ、ニホンジカ、ウサギの様な動物試料と共に相関行列距離0.1以内でB群を形成した。他の対照試料はC～F群を形成した。これらの群のうちA群とB群は相関行列距離0.2以内の所にあり互いに類似していた。C～D群はA、B群とは異なる系統樹に属していた。

以上、東遺跡のすべての試料中に残存する脂肪はSX－114の２層試料No.１とNo.２が他の試料とは若干傾向を異にしてはいるが、No.１とNo.２を含む全試料がほぼ同じ系統樹に属し、イノシシ、ニホンジカ、ウサギの様な動物試料の脂肪と類似していることがわかった。

６．脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸（炭素数16のパルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸まで）と高級脂肪酸（炭素数20のアラキジン酸以上）との比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をY軸にとり種特異性相関を求めた。この比例配分により第１象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等に由来する脂肪、第１象限から第２象限の原点から離れた位置にヒト胎盤、第２象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪がそれぞれ分布する。第２象限から第３象限にかけての原点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植、第3象限から第４象限にかけての原点から離れた位置に海産動物に由来する脂肪が分布する。

試料の残存脂肪から求めた相関図を図５に示す。図からわかるように、試料No.１とNo.２は第１象限内に分布しA群を形成した。他のすべての試料は第２象限内に広く分布しB群を形成した。A群の分布位置は試料中に残存する脂肪が高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等の特殊な部分

に由来し、B群のそれは高等動物の体脂肪や骨油に由来することを示唆している。

以上、東遺跡のSX－114の2層試料No.1とNo.2に残存する脂肪は高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等の特殊な部分に由来し、他のすべての試料中に残存する脂肪は高等動物の体脂肪や骨油に由来することがわかった。

7．総括

東遺跡から出土した土坑および土器の性格を判定するために、土坑内の土壌および土器片の残存脂肪分析を行った。残存する脂肪酸分析の結果、すべての試料中で主要な脂肪酸がパルミチン酸であることがわかった。高級脂肪酸は、SX－201の1層試料No.8と土器片試料No.9を除くすべての試料に多めに含まれており、特にSX－114の2層試料No.1とNo.2には脳に特異的に分布するリグノセリン酸が非常に多く含まれていることがわかった。

脂肪酸組成の分布に基づく数理解析の結果クラスター分析からは、試料中に残存している脂肪が、SX－114の2層試料No.1とNo.2の傾向が若干異なってはいるが、それらNo.1とNo.2も含む全試料がほぼ同じ系統樹に属し、イノシシ、ニホンジカ、ウサギのような動物試料の脂肪と類似していることがわかった。種特異性相関からは、SX－114の2層試料No.1とNo.2に残存する脂肪は高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等の特殊な部分に由来し、ほかのすべての試料中に残存する脂肪は高等動物の体脂肪や骨油に由来することがわかった。

残存するステロール分析の結果、試料中に含まれている各種ステロール類は、動物性コレステロールがSX－117、SX－136、SX－201の試料に非常に多いかまたは多く含まれていたり、哺乳動物の腸もしくは糞便由来のコプロスタノールがSX－114、SX－117、SX－136、SX－201の試料に非常に多いかまたは多く含まれていたり、植物由来のシトステロールがすべての試料中で少なめに含まれていた他は、すべて通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みに含まれていることがわかった。コレステロールとシトステロールの分布比はSX－117、SX－136、SX－201の試料が0.6以上、SX－201－3の試料も0.6に近い値を示し、これらの土坑には動物遺体もしくは動物由来の脂肪が残存している可能性を示唆していた。SX－114の試料はコレステロールとシトステロールの分布比が0.3に近い値を示したがコプロスタノールが存在することから動物遺体または動物由来の脂肪が残存している可能性が高い、コプロスタノールとコレステロールの分布比からはSX－117にはウシもしくはイヌ、SX－201にはウシ、SX－201土器にはウマ、SX－201－3にはウシもしくはイヌ、またウマの値に近いステロール類が残存していることがわかった。

以上の成績から、東遺跡から出土したすべての土坑や土坑内土器試料に残存する脂肪はイノシシ、ニホンジカ、ウサギ試料の脂肪と類似していることがわかった。また、コプロスタノールの分布比の値から見ると土坑SX－117にはウシもしくはイヌ、SX－201にはウシ、SX－201の土器にはウマ、SX－201－3にはウシ、イヌ、ウマの値に近いステロール類が、SX－114には高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等の特殊な部分に由来する脂肪酸が残存していることもわかった。

参考文献

(1) R.C.A.Rottländer and H.Schlichtherle：「Food identification of samples from archaeological sites」『Archaeo Physika』,10巻,1979,pp260.

(2) D.A.Priestly,W.C.Galinat and A.C.Leopold：「Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Anasazi maize seed」,『Nature』,292巻,1981,pp146.

(3) R.C.A.Rottländer and H.Schlichtherle：「Analyse frühgeschichtlicher Gefäβ－inhalte」,『Naturwissenschaften』, 70巻, 1983, pp33.

(4) 中野益男：「残存脂肪分析の現状」,『歴史公論』, 第10巻（6）, 1984, pp124

(5) M.Nakano and W.Fischer：「The Glycolipids of Lactobacillus casei DSM 20021」,

(6) 中野益男：「残留脂肪酸による古代復元」,『新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』, 田中 琢, 佐原 眞編, クバプロ, 1995, pp148.

(7) 中野益男, 伊賀 啓, 根岸 孝, 安本教傅, 畑 宏明, 矢吹俊男, 佐原 眞, 田中 琢:「古代遺跡に残存する脂質の分析」,『脂質生化学研究』, 第26巻, 1984, pp40.

(8) 中野益男：「真脇遺跡出土土器に残存する動物油脂」,『真脇遺跡－農村基盤総合整備事業能都東地区真脇工区に係わる発掘調査報告書』, 能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団, 1986, pp401.

(9) 中野益男, 根岸 孝, 長田正宏, 福島道広, 中野寛子：「ヘロカルウス遺跡の石器製品に残存する脂肪の分析」,『ヘロカルロス遺跡』, 北海道文化財研究所調査報告書, 第３集, 1987,pp191.

表1　試料の残存脂肪抽出量

試料No.	採取地点		湿重量(g)	全脂質(mg)	抽出率(%)
1	SX-114	2層上部	185.0	140.6	0.0760
2	〃	2層下部	196.5	230.6	0.1174
3	〃	3層	189.7	543.5	0.2866
4	SX-117	1層中部	227.9	12.6	0.0055
5	〃	2層	224.6	10.5	0.0047
6	〃	3層	117.1	27.2	0.0232
7	SX-136	1層	44.3	4.3	0.0097
8	SX-201	1層	24.7	5.8	0.0234
9	〃	1層土器	14.1	3.0	0.0213
10	〃	2層	139.5	14.6	0.0105
11	SX-201-3	下顎下	36.9	8.6	0.0233
12	〃	土器下	26.2	9.4	0.0359

表2　試料中に分布するステロールの割合

試料No.	コプロスタノール(%)	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール／シトステロール	コプロスタノール／コレステロール
1	3.35	5.00	20.54	0.24	0.67
2	2.57	5.91	19.88	0.30	0.43
3	11.09	3.94	13.58	0.29	2.81
4	4.69	8.54	14.61	0.58	0.55
5	14.60	17.12	12.51	1.37	0.85
1	46.27	12.59	2.94	4.28	3.68
2	11.05	22.88	10.87	2.10	0.48
3	12.99	17.97	11.15	1.61	0.72
4	9.02	29.78	16.42	1.81	0.30
10	3.75	13.77	6.93	1.99	0.27
11	6.70	7.43	16.50	0.45	0.90
12	3.43	9.06	16.84	0.54	0.38

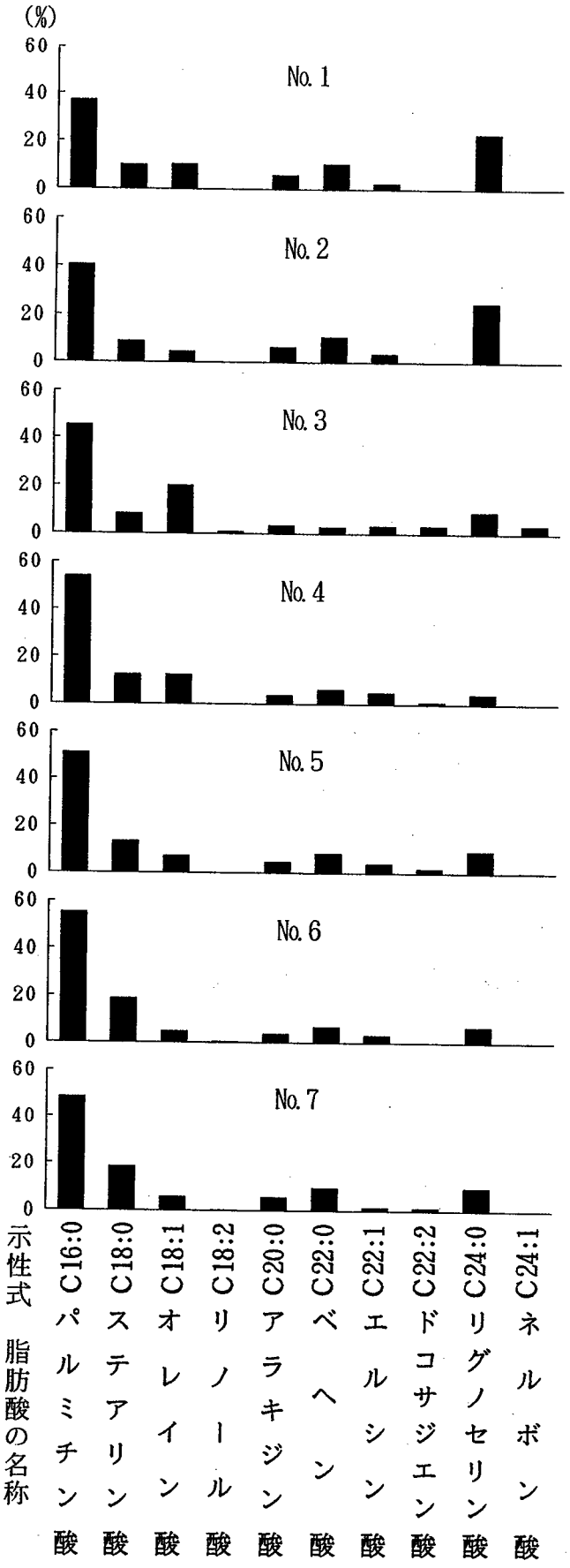


図2-1　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成

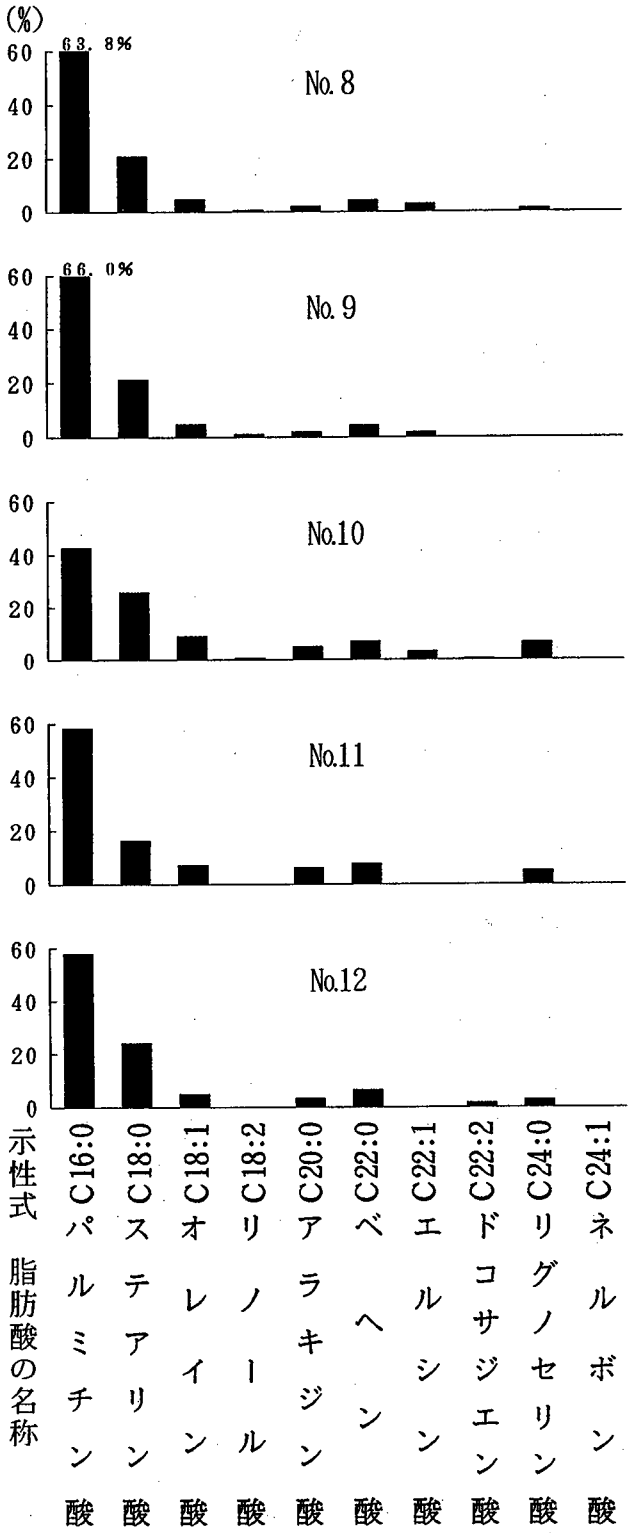


図2-2　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成

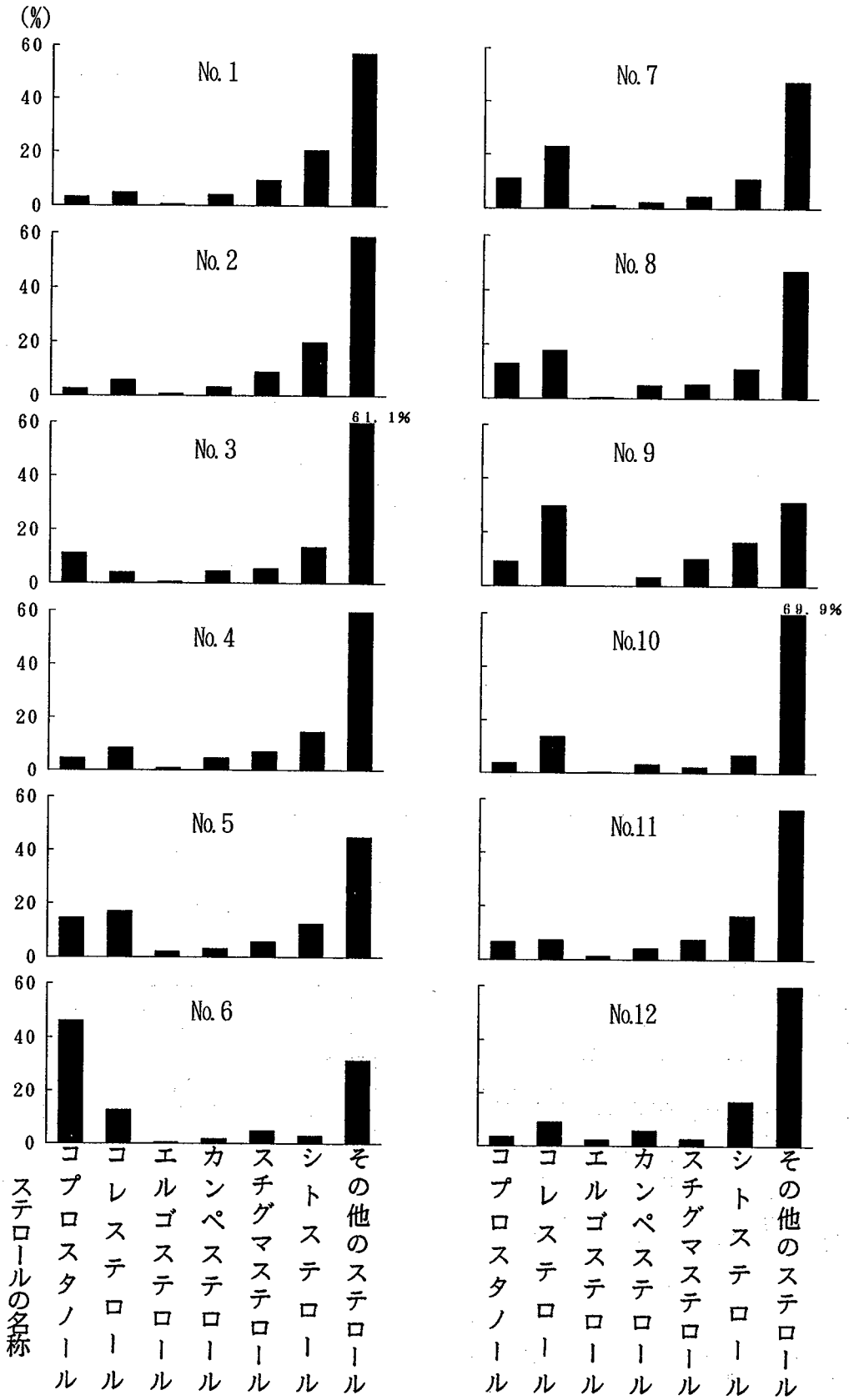


図3　試料中に残存する脂肪のステロール組成

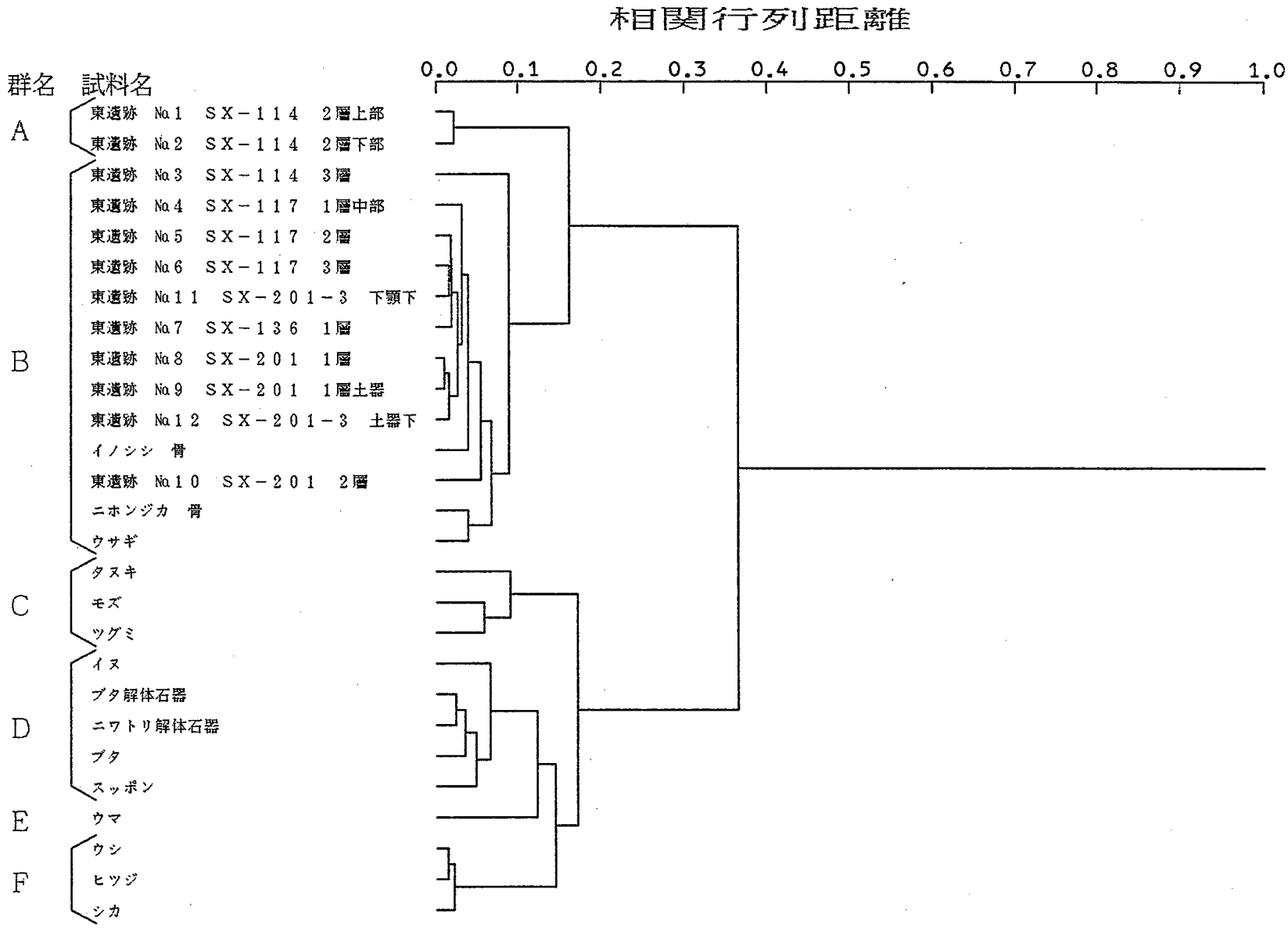


図 4　　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

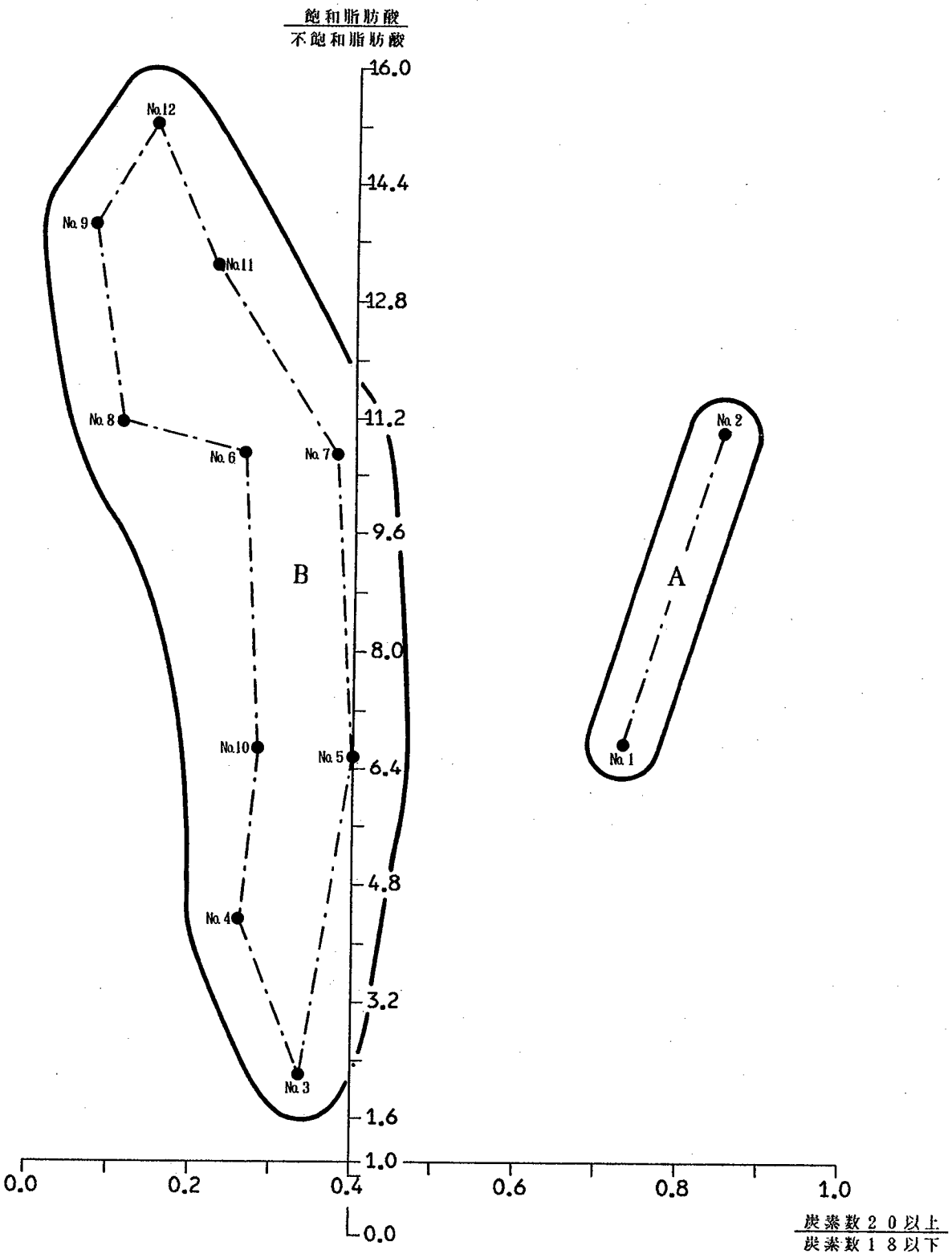


図５　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

9、貝塚市、東遺跡出土試料の放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

1．試料と方法

No.	試　料	試料の種類	前処理・調整	測定法
1	SE-201,曲物	木　材	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄 石墨調製	ＡＭＳ法

2．測定結果

試料名	^{14}C年代 (年BP)	δ^{13}C (‰)	補正^{14}C年代 (年BP)	暦年代	測定No. Beta-
No. 1	*970±60*	*-26.6*	*950±60*	交点 *AD 1040* 2σ *AD 990 TO 1225* 1σ *AD 1020 TO 1175*	103885

(2σ : *95% probability*, 1σ : *68% probability*)

1）^{14}C年代測定値

試料の^{14}C/^{12}C比から、単純に現在（1950年AD）から何年前（BP）かを計算した値。^{14}Cの半減期は5,568年を用いた。

2）δ^{13}C測定値

試料の測定^{14}C/^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

3）補正^{14}C年代値

δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C/^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を補正することにより、暦年代（西暦）を算出した。補正には年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年BPより古い試料には適用できない。

※本試料の測定は、アメリカのローレンス・リヴァーモア国立研究所（Lawrence Livermore National Lavoratory）の加速器を用いて行われた。

Ⅱ　新井ノ池遺跡の調査

1、調査に至る経過

貝塚市教育委員会では生徒増加による教室不足を解消するために、市立中央小学校の増改築工事を計画し、平成８・９年度事業として、貝塚市教育委員会教育部総務課と社会教育課との間で埋蔵文化財の取扱いについての協議を開始した。

改築予定地は、新井ノ池遺跡に含まれるものの、周辺においての発掘調査例が少なく、遺跡の状況が明確に掴めていない地点であった。

そこで、総務課と社会教育課との間で協議を重ねた結果、埋蔵文化財の状況確認を目的として確認調査を実施することの合意をみた。

確認調査は既設建物以外の部分において、調査区（面積15㎡）を設定し、平成８年８月５日に実施した。調査の結果、一部破壊を受けているのものの、建築予定地には中世の遺物包含層、遺構が良好に存在することが判明した。

この結果をもとに、総務課と埋蔵文化財の取扱いについて協議を重ねた結果、今回の建設行為によって破壊を受ける部分約254㎡について２次発掘調査を実施することの合意をみた。

発掘調査は平成９年５月６日から６月13日にかけて実施した。調査地は貝塚市麻生中854他である。

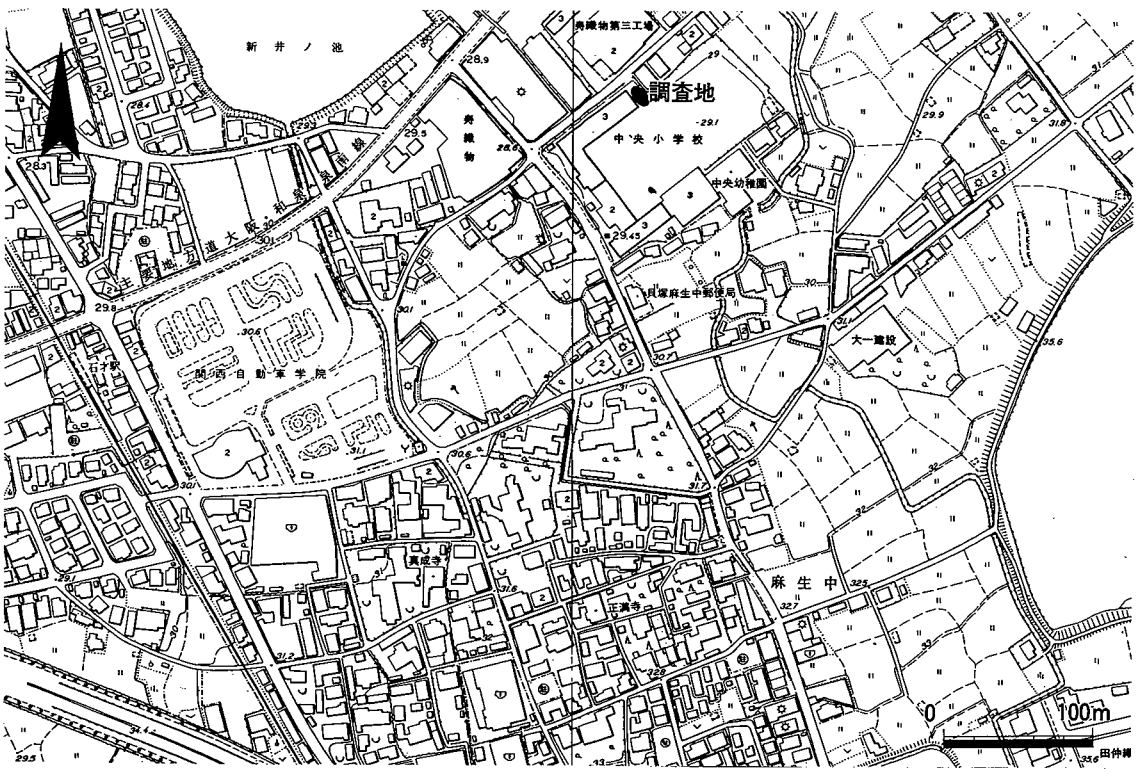


図15　新井ノ池遺跡調査地位置図

2、位置と環境

新井ノ池遺跡は貝塚市麻生中に所在し、西方向には新井ノ池があり、遺跡のほぼ中央を大阪和泉泉南線が縦貫し、道路沿いには郊外型の店舗が建ち並んでいる。

調査地は貝塚市を南北に通る熊野街道の東側に位置し、海抜約28mを測る地点である。

新井ノ池遺跡は弥生時代から古墳時代・中世にかけての散布地及び集落跡と推定されている。これまでの調査では平安時代の掘立柱建物跡や中・近世の耕作地跡を検出した。

本遺跡の北には白鳳期の瓦が多数出土する秦廃寺跡があり、古代からこの周辺地域に古代寺院を中心とした集落が存在していたことを窺わせる。

また古代に起源をもつ熊野街道が遺跡範囲内を縦貫している。この熊野街道は宇多上皇の熊野巡拝をもって始まるとされており、貴族から庶民へとその信仰は広まっていき、紀州熊野大社への重要な交通路として発達していった。また沿道には神祠が祀られ、これらは「熊野九十九王子」と称された。貝塚市内には3つの王子があったとされている。その一つに麻生河王子があり、明治42年まで麻生河王子神社が存在していたことから麻生郷地域に王子があったと考えられる。またこの地域は熊野街道と水間街道の分岐点にあたり、交通上重要な位置を占める。周辺の遺跡には中世の集落跡である麻生中出口遺跡、弥生時代から中世にかけての集落跡である麻生中遺跡、麻生中下代遺跡、1981年の調査で平安時代末期から鎌倉時代前期の瓦を中心に出土している新井・鳥羽遺跡がある。各遺跡は熊野街道の発達に伴い栄えた集落跡と考えられ、本遺跡も集落跡や街道そのものの発見が期待される。

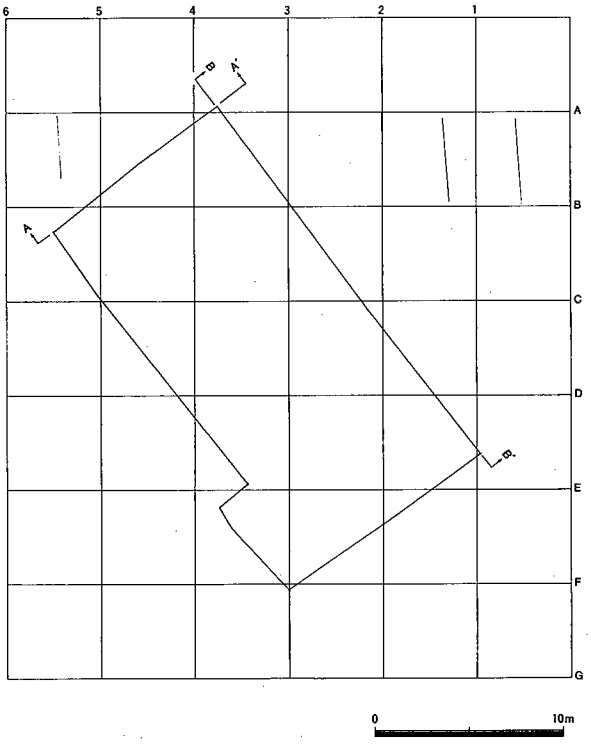


図16　調査区地区割図

3、調査の概要

調査は建築計画に基づき、254㎡の面積を調査区として設定した。(図2)

調査区は国家座標値X＝-174046・Y＝-57445を基準にして5m×5mに区画し、西に5区を設け(1～5)、南に6区を設けた(A～F)。

調査区の南側(C-1・4、D-1～3、E-1・2区)は大きく撹乱をうけていたが、北側は遺物包含層が認められ、この部分を中心に調査をおこなった。

基本層序(図3)

第1層は盛土(層厚0.2m)、第2層は現代耕土(層厚0.2～0.4m)、第3層は灰色粘質土(層厚約0.2m)、第4層は灰色土(層厚約0.1m)、第5層は暗灰黄色土に黄色小礫が混じる(層厚約0.15m)、第6層は暗灰黄色土(層厚約0.15m)、第7層は黄褐色土(層厚約0.09m)、第8層は黄褐色シルト質土(層厚約0.24m)、第9層は灰黄色砂礫(層厚約0.8m)が堆積している。第10層は灰黄色礫である。調査は第10層上面までおこなった。

第7層上面で第10層にあたる灰黄色礫層が調査区西側(B-4・5、C-4区)で露出し、それより東側はSD-401によって大きく落ち込む。

第3・4層からは土師器片、瓦器椀片、須恵器杯片(図10-17)、瓦質鉢片(図10-18)、青磁碗片(図10-19)が出土しており近世の耕作土層と考えられる。第5・6層からは土師器小皿片(図10-12)、瓦器椀片(図10-10・11)、土師質羽釜片(図10-14)、白磁碗片(図10-13)が出土しており中世後半と考えられる。第7～9層はSD-401の堆積層である。

4、検出遺構

調査では第3層から第10層の上面で遺構を検出し、計7面の遺構面を確認した。

第1・2・3遺構面からは耕作地に伴う溝、鋤溝、土坑、第4・5遺構面からは数条の溝、第6遺構面からはSD-401の埋没面、第7遺構面からはSD-401の底部を検出した。

以下主な遺構について記述する。

第1遺構面

第3層灰色粘質土層上面で確認をおこなった。遺構面は北東から南西方向に0.05m傾斜する。

鋤溝　A-4、B-3・4、C-3区で検出した鋤溝である。鋤溝は北東－南西方向のものと北西－南東方向に走る2種類の方向のものを検出した。前者の規模は検出長0.6～3.3m、幅0.1～0.3m、深さ0.01～0.04mを測る。埋土は灰オリーブ色土である。後者の規模は検出長0.5～1.6m、幅約0.1m、深さ0.02mを測る。埋土は黄灰色土である。前者は現在の道路に平行しており、近代の水田耕作による鋤溝と考えられる。後者は前者より古い水田耕作のものと考えられる。遺物は土師器片、瓦器椀片、瓦質土器片、瓦片が出土している。近世の遺物がほとんど見られず中世の遺物を中心としているが、周囲の状況から遺構面の時期は近世から現代であると考えられる。

第2遺構面(図4)

第4層灰色土層上面で確認をおこなった。遺構面の中央部が南北方向にやや高くなっている。

SD-209　B-4区で検出した溝である。検出長3.8m、幅0.15～0.3m、深さ0.05～0.13mを測る。断

面形状は浅い皿形を呈す。埋土は灰黄色砂質土である。遺物は土師器片、瓦器椀片が出土した。

ＳＤ-210　B-4区で検出した溝である。検出長3.8m、幅0.2～0.45m、深さ0.03～0.16mを測る。断面形状は浅い皿形を呈す。埋土は灰色砂質土である。遺物は土師器片、瓦器椀片が出土している。これらの溝は同一方向で重複しており、切り合い関係からＳＤ-209よりもＳＤ-210の方が先行する。また後述するＳＤ-301・302に比べると検出幅が狭く、後世に削平を受けた可能性がある。

鋤溝　A-3・4、B-3・4、C-2・3区で検出した鋤溝である。鋤溝は北東－南西方向に走るもの（座標北に対して50°西に振った方向）とこれに直交するものの２種類を検出した。前者の規模は検出長0.5～3.5m、幅0.1～0.4m、深さ0.01～0.07mを測る。埋土は灰色土である。後者の規模は検出長0.7～1.8m、幅0.1～0.2m、深さ0.03～0.07mを測る。埋土は黄灰色土である。遺物は土師器片、瓦器椀片、瓦質甕片、須恵器片が出土している。鋤溝の切り合い関係から北東－南西方向のものから北西－南東方向へと耕作する方向を変えているようである。

この検出状況からＳＤ-210と北東－南西方向の鋤溝、ＳＤ-209と北西－南東方向の鋤溝がそれぞれ伴うものと考えられる。

Ｐit-201・202　C-3区で検出した土坑である。直径0.2～0.35m、深さ0.08～0.11mを測る。

埋土は灰色土である。遺物はＰit-201からサヌカイト剥片1点、Ｐit-202から土師器片が出土している。これらの土坑は耕作地に用いられた木杭の痕跡と考えられる。

第３遺構面（図５）

第５層暗灰黄色土上面で確認をおこなった。遺構面は南東から北西方向に約0.05m傾斜する。

ＳＤ-301　B-4・5区で検出した溝である。検出長3.8m、幅0.5～1.1m、深さ0.07～0.18mを測る。断面形状は浅い皿形を呈す。埋土は黄褐色砂質土である。方位は座標北に対して50°西に振った方向である。遺物は土師器片、瓦器椀片のほか白磁碗片が出土している。

ＳＤ-302　B-4・5、C-4区で検出した溝である。検出長3.8m、幅約0.5m、深さ0.02～0.04mを測る。断面形状は浅い皿形を呈す。埋土は灰褐色砂質土である。遺物は土師器片、瓦器椀片が出土している。

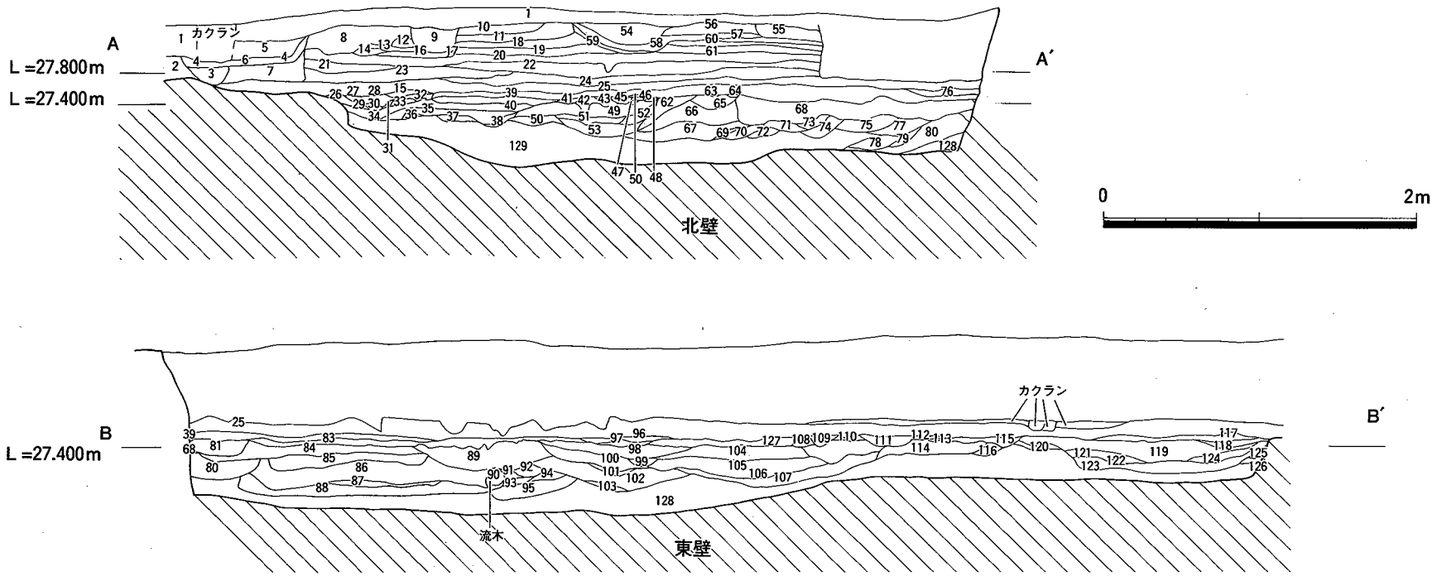
これらの溝は第２遺構面と同様に重複する。ＳＤ-301はＳＤ-302の埋没後、わずか東側にほぼ同規模の水路として設けられた。両溝は耕作地に伴う水路と考えられる。

鋤溝　A-4区で検出した鋤溝である。鋤溝は北西－南東方向（座標北に対して50°西に振った方向）と北東－南西方向（座標北に対して50°東に振った方向）に走る２種類を検出した。前者の規模は検出長0.6～0.9m、幅約0.1m、深さ0.02～0.11mを測る。埋土は黄灰色土である。後者の規模は検出長0.6～1.8m、幅0.1～0.2m、深さ0.01～0.03mを測る。埋土は灰色土である。遺物は瓦器椀片、須恵器片が出土している。

Ｐit-301～306　B-4、C-3・4区で検出した土坑である。直径0.25～0.4m、深さ0.1～0.13mを測る。埋土は灰色土である。遺物はＰit-301・302から土師器片が出土している。

第４遺構面（図６）

第7層黄褐色土上面で確認をおこなった。遺構面は調査区西端（B-4・5、C-3区）で灰黄色礫



1．盛土
2．7.5Y6/1灰色土
3．10Y4/1灰色粘質土
4．2.5Y6/4にぶい黄色砂質土
5．2.5Y3/2黒褐色土(粗砂、小礫混じり)
6．2.5Y3/2黒褐色土
7．5Y6/3オリーブ黄色土
8．現代耕作土
9．現代耕作土と5Y4/4暗オリーブ色土の混じり
10. 現代耕作土
11. 現代耕作土
12. 5Y4/4暗オリーブ色土
13. 5Y4/4暗オリーブ色土と2.5Y4/6オリーブ褐色土の混じり
14. 5Y4/4暗オリーブ色土と2.5Y4/6オリーブ褐色土の混じり
15. 10YR4/4褐色粘質土
16. 2.5Y4/6オリーブ褐色土と2.5Y5/2暗灰黄色土の混じり
17. 2.5Y5/2暗灰黄色砂質土
18. 5Y4/4暗オリーブ色土(第3層に対応)
19. 2.5Y4/6オリーブ褐色土(第4層に対応)
20. 2.5Y5/2暗灰黄色土(黄色小礫を含む)(第5層に対応)
21. 2.5Y6/3にぶい黄色砂質土
22. 2.5Y5/2暗灰黄色土(第6層に対応)
23. 2.5Y5/3黄褐色土
24. 2.5Y5/3黄褐色土(SD-401遺構埋土)
25. 5Y5/2灰オリーブ色砂質土
26. 2.5Y5/3黄褐色砂(地山混じり)
27. 10YR4/4褐色粘土
28. 10YR4/4褐色粘土
29. 10YR4/4褐色粘土(黄色礫混じり)
30. 10YR4/4褐色粘土
31. 10YR4/4褐色粘土(黄色礫混じり)
32. 10YR4/4褐色粘土
33. 10YR4/4褐色粘土(小礫を含む)
34. 10YR4/4褐色粘土(粗砂を含む)
35. 10YR4/2灰黄褐色粘土
36. 2.5Y5/2暗灰黄色粘土
37. 2.5Y5/2暗灰黄色粘土
38. 2.5Y5/2暗灰黄色粘土
39. 2.5Y5/3黄褐色土(SD-401遺構埋土)
40. 10YR4/4褐色粘土と2.5Y5/3黄褐色土の混じり
41. 2.5Y5/3黄褐色土と2.5Y7/3浅黄色微砂の混じり
42. 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト
43. 2.5Y7/3浅黄色微砂
44. 2.5Y7/3浅黄色微砂
45. 2.5Y4/3オリーブ褐色土と2.5Y7/3浅黄色微砂の混じり
46. 2.5Y4/4オリーブ褐色土
47. 2.5Y4/4オリーブ褐色土
48. 2.5Y4/4オリーブ褐色土と2.5Y5/4黄褐色砂質土の混じり
49. 2.5Y5/4黄褐色砂質土(粒子が細かい)
50. 2.5Y5/2暗灰黄色砂
51. 2.5Y6/2灰黄色細砂
52. 2.5Y5/2暗灰黄色砂
53. 2.5Y5/2暗灰黄色砂(粗砂混じり)
54. 現代耕作土
55. 現代耕作土(瓦を多く含む)
56. 現代耕作土
57. 現代耕作土と5Y6/3オリーブ黄色土
58. 現代耕作土(上部に灰・瓦が混じる)
59. 現代耕作土
60. 5Y6/3オリーブ黄色土(粒子が細かい)(第3層に対応)
61. 5Y5/2灰オリーブ色土(第6層に対応)
62. 2.5Y5/4黄褐色土
63. 2.5Y4/4オリーブ褐色土
64. 2.5Y4/4オリーブ褐色土
65. 2.5Y5/4黄褐色土
66. 5Y6/2灰オリーブ色砂
67. 5Y6/2灰オリーブ色礫砂
68. 2.5Y5/6黄色褐色シルト質土
69. 2.5Y5/2暗灰黄色微砂
70. 2.5Y5/2暗灰黄色シルト
71. 2.5Y5/2暗灰黄色シルトと黄褐色シルト質土の混じり
72. 2.5Y5/6黄褐色シルト質土
73. 2.5Y5/2暗灰黄色シルトと黄褐色シルト質土の混じり
74. 2.5Y6/2灰黄色細砂
75. 2.5Y6/2灰黄色細砂
76. 2.5Y5/4黄褐色粘土
77. 2.5Y6/3にぶい黄色シルト
78. 7.5Y5/1灰色シルト
79. 2.5Y6/2灰黄色微砂
80. 5Y6/2灰オリーブ色砂
81. 2.5Y5/6黄褐色土
82. 10YR5/6黄褐色細砂
83. 2.5Y6/2灰黄色微砂
84. 2.5Y6/4にぶい黄色砂質土
85. 2.5Y6/4にぶい黄色砂質土
86. 2.5Y5/4黄褐色粗砂
87. 2.5Y6/1黄灰色砂(粒子が細かい)
88. 5Y5/1灰色細砂
89. 2.5Y4/4オリーブ褐色土
90. 2.5Y6/1黄灰色粘土
91. 2.5Y6/2灰黄色粗砂
92. 2.5Y6/2灰黄色砂
93. 2.5Y6/2灰黄色砂
94. 10YR4/4褐色粗砂
95. 5Y5/1灰色細砂
96. 2.5Y7/3浅黄細砂
97. 10YR5/4にぶい黄褐色土
98. 2.5Y5/4黄褐色粗砂
99. 2.5Y4/2暗灰黄色粗砂
100. 2.5Y5/3黄褐色砂
101. 2.5Y4/4オリーブ褐色粘質土
102. 2.5Y5/2暗灰黄色粗砂礫
103. 2.5Y6/1黄灰色シルト
104. 2.5Y6/3にぶい黄色砂
105. 2.5Y6/2灰黄色細砂
106. 2.5Y4/1黄灰色粘土
107. 2.5Y4/1黄灰色粘土(粗砂を含む)
108. 2.5Y4/6オリーブ褐色土
109. 10YR4/6褐色土
110. 10YR4/4褐色土
111. 10YR5/3黄褐色土
112. 10YR5/3黄褐色砂質土
113. 2.5Y4/2暗灰黄色土
114. 2.5Y5/3黄褐色土
115. 10YR4/3にぶい黄褐色土
116. 2.5Y5/2暗灰黄色砂
117. 2.5Y5/4黄褐色土
118. 2.5Y5/2暗灰黄色粘土
119. 2.5Y4/2暗灰黄色粘土
120. 2.5Y5/2暗灰黄色土
121. 2.5Y4/1黄灰色粘土
122. 2.5Y5/2暗灰黄色砂
123. 2.5Y4/1黄灰色粘土
124. 2.5Y4/2暗灰黄色粘土と黄灰色砂の混じり
125. 2.5Y5/2暗灰黄色粘土
126. 2.5Y6/2灰黄色粘土(砂を含む)
127. 2.5Y5/3黄褐色砂
128. 2.5Y5/2暗灰黄色礫
129. 2.5Y6/2灰黄色砂

図 17　調査区土層図

層を確認した。調査区東側はＳＤ-401上面を検出した。

ＳＤ-401　A-3・4、B-2～4、C-1～3区で検出した自然流路である。検出長約13m、幅最大７ｍ以上・最小1.5mを測る。

ＳＤ-402　B-3区で検出した溝である。埋没後のＳＤ-401に沿うように検出した。検出長3.1m、幅0.3～0.6m、深さ0.05～0.08mを測る。埋土は黄褐色粘質土である。遺物は土師器片、瓦器椀片が出土している。

露出した第10層の灰黄色礫（B-4・5、C-4区）に沿って溝が設けられていたと考えられる。撹乱によって南方向のつづきは検出できなかった。

ＳＤ-403　B-4区で検出した溝である。検出長3.6m、幅0.8m、深さ0.09mを測る。埋土は黄灰色砂質土である。第５遺構面で溝のつづきを検出している。

ＳＤ-404　C-4区で検出した溝である。検出長2.6m、幅0.6m、深さ0.03mを測る。埋土は黄灰色砂質土である。第５遺構面で溝のつづきを検出している。

ＳＤ-403・404は第10層の灰黄色礫層を掘り込んでいる。

ＳＤ-406　E-6区で検出した溝である。検出長2.1m、幅0.85m、深さ0.05～0.1mを測る。埋土は黄褐色粘質土である。遺物は土師器片、瓦器椀片が出土している。

E-6区の堆積土層の状況からＳＤ-406は第４遺構面に対応するものと判断した。

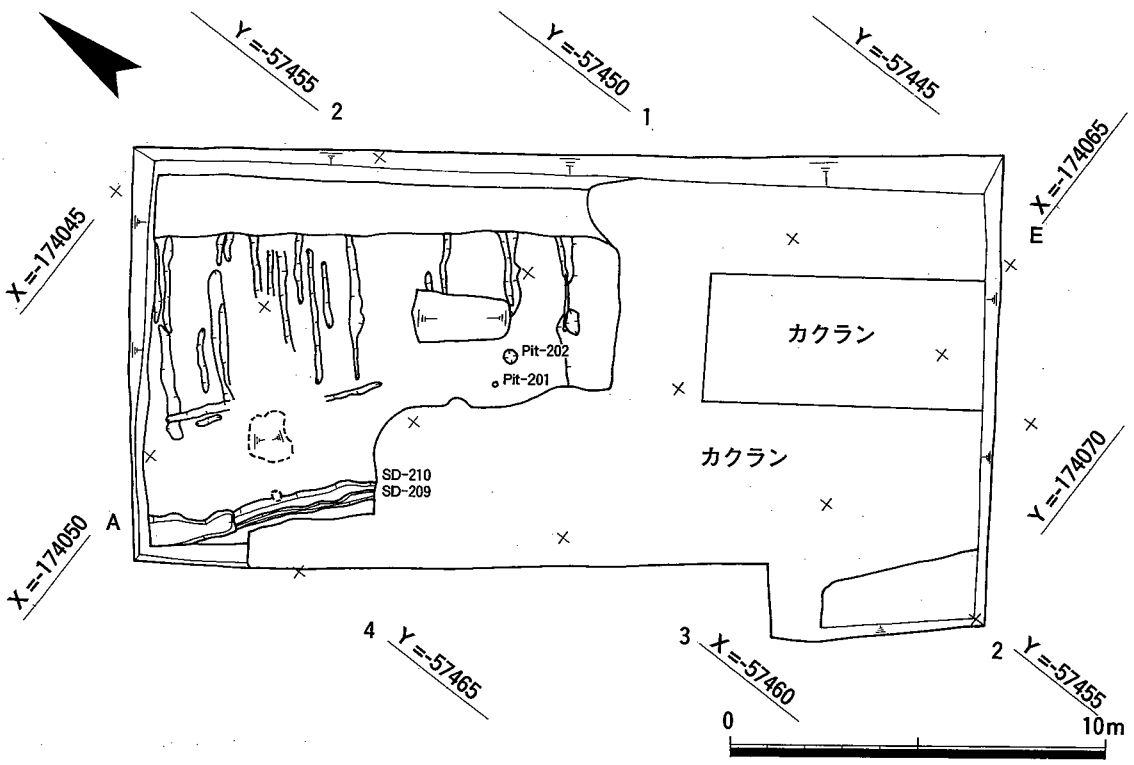


図18　第2遺構面遺構配置図

第５遺構面（図７）

ＳＤ-401の堆積層で薄い砂層を確認し、この上面を第５遺構面とした。

ＳＤ-501　A-3・4、B-3・4区で検出した溝である。ＳＤ-501はＳＤ-403によって切られているためＳＤ-501-1・2に分けて掘削をおこなった。検出長7.1m、幅約2.8m、深さ0.05～0.1mを測る。埋土は灰黄色砂質土である。遺物は土師器片が少量出土している。ＳＤ-501はＳＤ-403より先行して流れていた。流路は埋没したＳＤ-401内で大きく広がっている。

ＳＤ-502　B-3区で検出した溝である。検出長４m、幅0.1～0.6m、深さ0.07mを測る。埋土は灰黄色砂質土である。遺物は出土していない。またＳＤ-404と重複している。

ＳＤ-501・502は当初から溝を深く掘り込んでいなかったと考えられる。

ＳＤ-403　A-3、B-3・4区で検出した溝である。検出長9.2m、最大幅2.4m・最小幅0.4m、深さ0.08mを測る。埋土は黄灰色砂質土である。溝底は西から東へ0.11m下がっており、検出した流路痕は東へ広がっている。ＳＤ-403はＳＤ-501の流路痕上を流れており、ＳＤ-501埋没後同じ水路を用いていた。遺物は土師器片が出土している。

ＳＤ-404　B-3・4区で検出した溝である。検出長7.8m、最大幅１m、最小幅0.25m、深さ0.06～0.25mを測る。埋土は黄灰色砂質土である。溝底は西から東へ0.15m下がっており、検出した流路痕はＳＤ-403同様東へ広がる。ＳＤ-404はＳＤ-502の痕跡を流れており、ＳＤ-502埋没後同じ水路

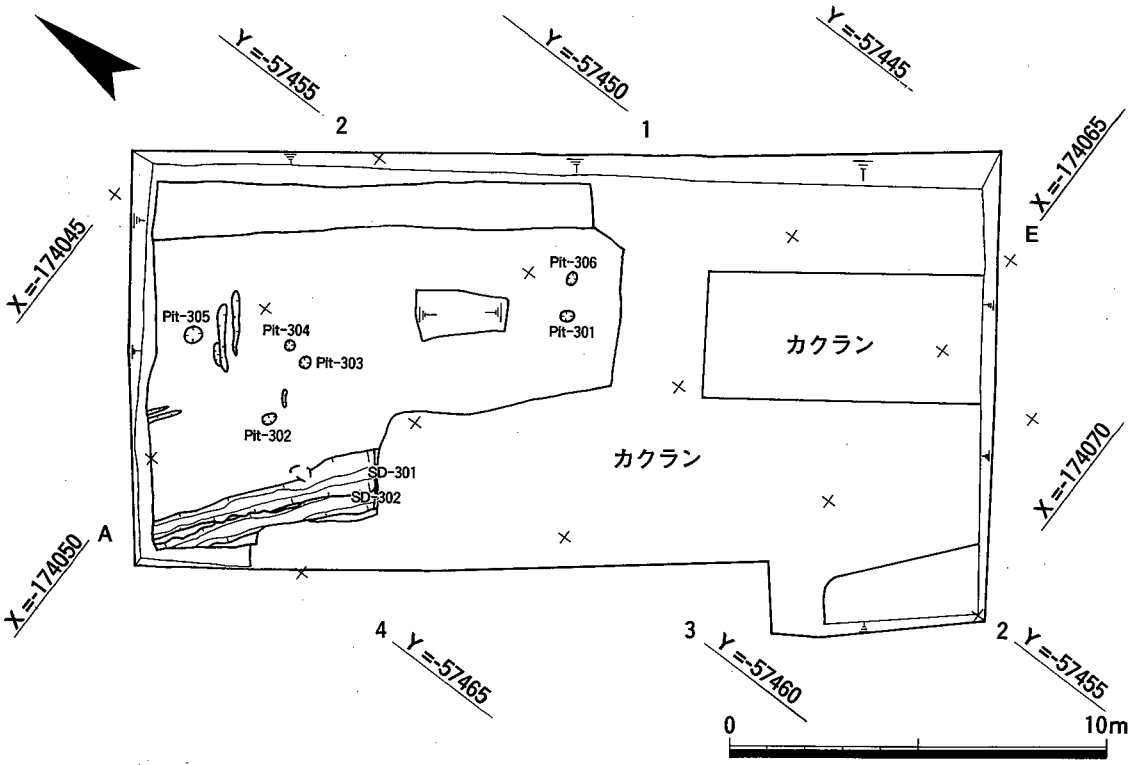


図19　第3遺構面遺構配置図

を用いていた。遺物は土師器片が出土している。

第6遺構面（図8）

第6遺構面は第5遺構面で検出したＳＤ-401内の砂層の下面にあたる。

ＳＸ-601　A-3区で検出した性格不明遺構である。直径0.55m、深さ0.6mを測る。埋土は灰褐色土である。遺物はサヌカイト剥片1点が出土している。

ＳＸ-602　A-3区で検出した性格不明遺構である。長径0.5m、短径0.35m、深さ0.2mを測る。埋土は黄褐色砂質土である。遺物はＳＸ-602から土師器片が出土している。

ＳＸ-603　A-4区で検出した性格不明遺構である。直径0.3m、深さ0.16mを測る。埋土は褐黄色砂質土である。

ＳＸ-602・603は切り合っており、ＳＸ-602はＳＸ-603より先行する。

ＳＸ-604～610　A-4区で検出した性格不明遺構である。長径0.35～0.55m、短径0.3～0.4m、深さ0.06～0.21mを測る。埋土は灰黄褐色砂質土である。

これらの遺構は東西方向にほぼ一列にのびている。自然流路であるＳＤ-401に伴う木杭の痕跡の可能性も考えられる。

ＳＤ-401　A-4、B-3・4、C-2・3区で検出した自然流路である。検出長約13m、幅約4mを測る。流路規模が崩壊で縮小した状態で検出している。埋没状況は東側より次第に土砂が崩れて落ちて

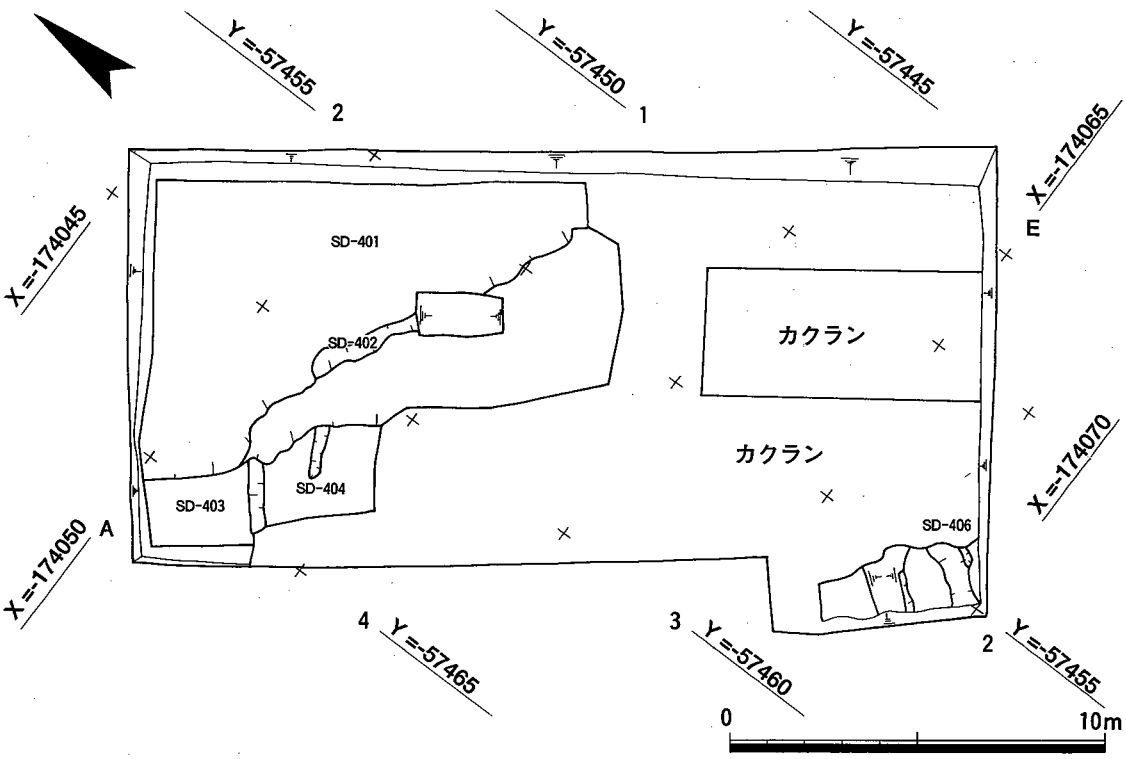


図20　第4遺構面遺構配置図

いる。ＳＤ-401が埋没する過程で水流が次第に弱まり、中央部で土砂が山状に堆積する。

ＳＤ-401の断面観察から第９層の灰黄色砂礫堆積後、調査区東側よりシルト質の砂が西方向に向かって数回にわたって流れ込むように堆積している。

ＳＤ-401肩部の堆積状況は灰黄色砂礫堆積後、粘土が堆積していることから調査区東側とは異なり滞水状態であったと考えられる。その後肩部の堆積は黄色礫と黄褐色砂が混入した状態で堆積している。第10層の露出部分で堆積した土が雨などによってこの肩部からＳＤ-401に流れ込み堆積したと考えられる。

第７遺構面（図９）

ＳＤ-401　A-3・4、B-3・4、C-2・3区で検出した自然流路である。流路は西側の肩部を検出した。検出長約13m、幅８ｍ以上、深さ１～1.2mを測る。水は南東から北方向に流れていたと考えられ、底部比高は0.2mを測る。また調査区北部で深さ1.2mを測る部分が存在し、その部分からは広葉樹と考えられる長さ３ｍ以上の流木、枝、葉や種子が集中する状況で堆積していた。ＳＤ-401の埋没の状況は上層で粘土、下層で砂を中心に堆積していることから、上流からの砂の堆積により次第に流れが弱まり、滞水状態の後埋没したと考えられる。

遺物は瓦器皿片（図10-1)、瓦器椀片（図10-2・3)、土師器杯片（図10-4・5)、須恵質こね鉢片（図10-7）等中世の遺物が中心である。しかし、流路底部からは土師器高杯脚部（図10-6)、サヌ

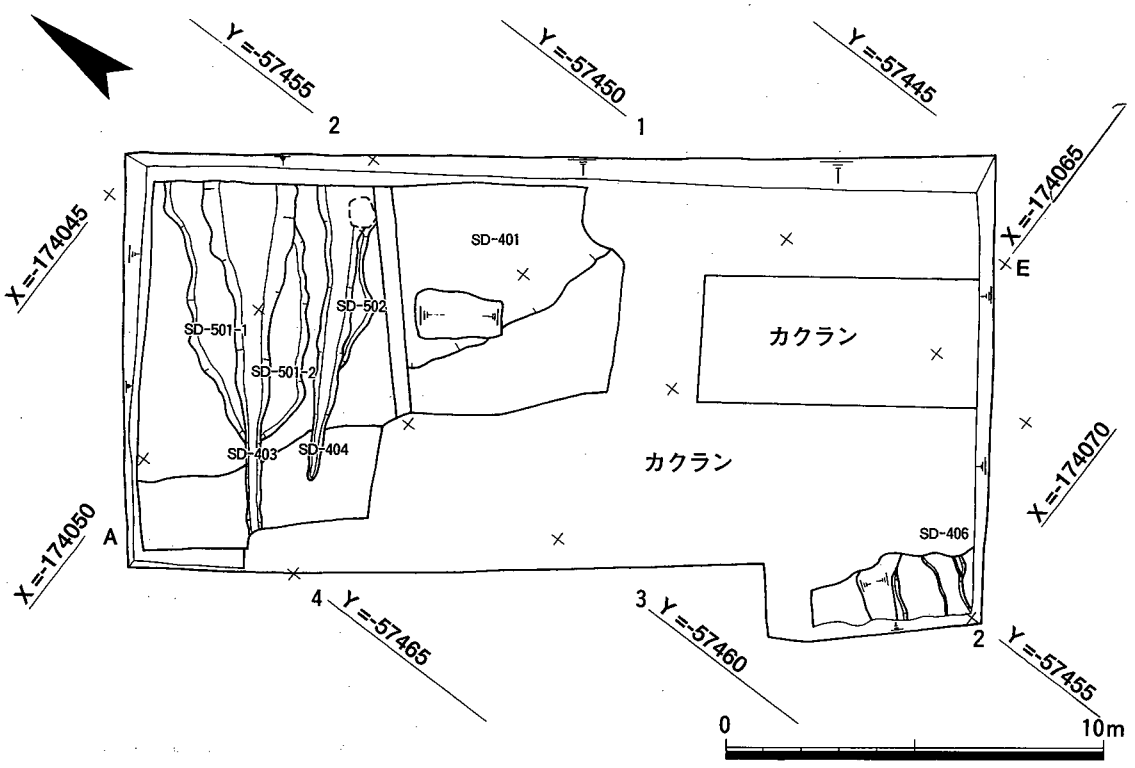
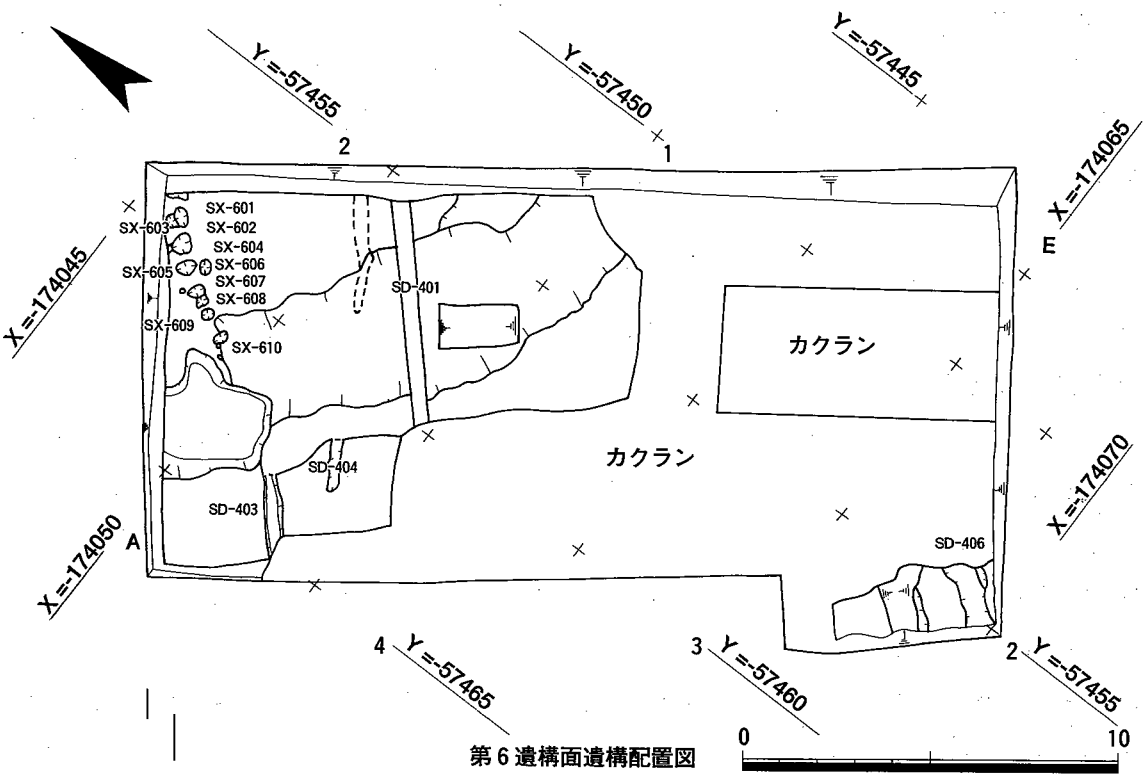
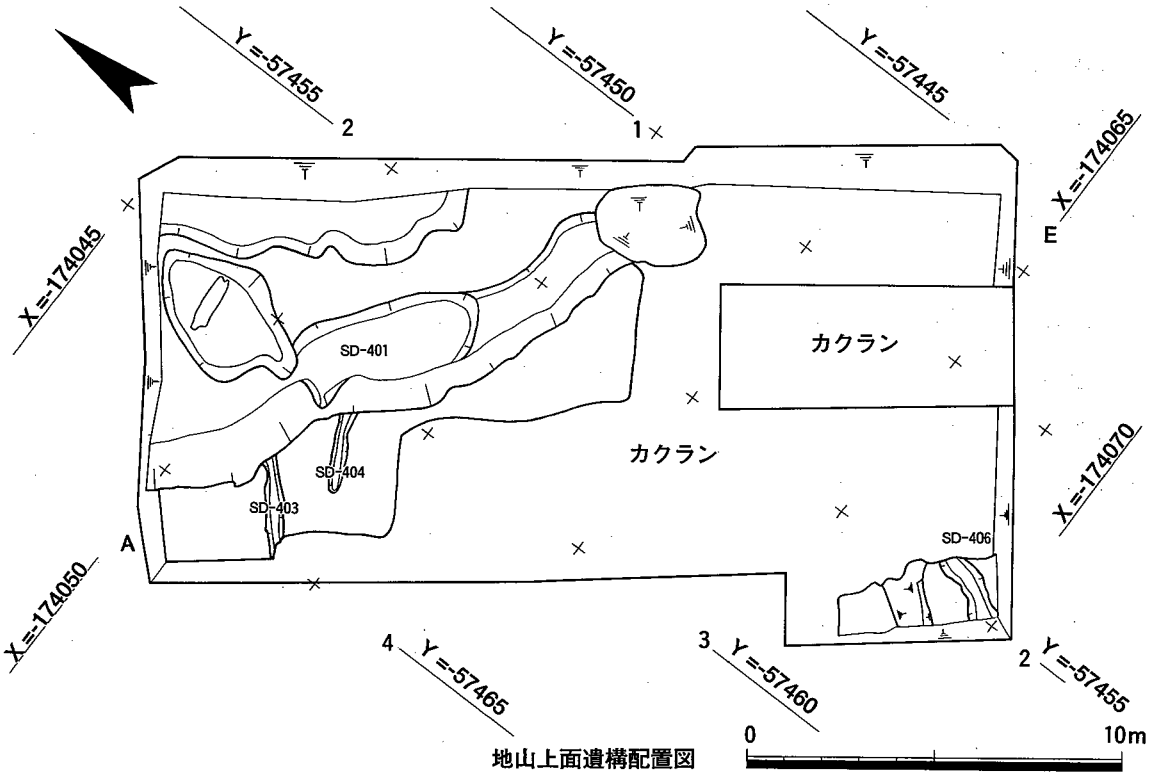


図21　第5遺構面遺構配置図



第6遺構面遺構配置図



地山上面遺構配置図

図22　遺構配置図

カイト剥片等比較的古い遺物のみが出土しており、流路の初現時期は古墳時代以前まで溯る可能性もある。

5、出土遺物（図10）

第3～9層の各遺物包含層から土師器片、瓦器片、須恵器片などの遺物が出土している。遺構からの出土はＳＤ-401からは古墳時代以前まで溯る可能性のある遺物が出土している他、各遺構からは土師器片、瓦器片などの小破片が出土している。

ＳＤ-401

1は瓦器皿である。復元口径9.4cm、復元器高1.7cm、器厚0.5cm を測る。口縁部と内面見込み部分にヘラミガキがわずかに残り、外面には指圧痕が認められる。2は瓦器椀底部である。復元高台外径5.4cm、器厚0.4cm を測る。貼り付け高台であり、見込み部分にはヘラミガキを施す。3は瓦器椀底部である。高台外径5.6cm、厚さ0.4cm を測る。摩滅により調整は不明瞭。外面には強い指圧痕が認められる。4は土師器杯である。復元口径15cm、器厚0.5cm を測る。口縁端部は若干外反ぎみである。色調は浅黄橙色である。5は土師器杯である。復元口径15.4cm、器厚0.4cm を測る。口縁部は内湾ぎみである。6は肉厚の土師器高杯脚部である。復元底部外径8.4cm、残存器高4.6cm を測る。底部は荒く指で1cm 押し上げた後ナデ調整をおこなっている。胎土は0.4cm 程度の砂粒を多く含む。摩滅により調整は不明瞭。色調は橙色である。7は須恵質こね鉢口縁部である。復元口径26.2cm、復元口縁外径27.4cm、残存高4.6cm、器厚0.7～1cm を測る。胎土は0.2cm 程度の砂粒を少量含む。内外面とも回転ナデ調整。

第6層出土遺物

8は瓦器椀底部である。高台外径4.7cm、器厚0.5cm を測る。外方に向いた貼り付け高台である。内外面とも摩滅により調整は不明瞭。色調は灰白色である。胎土は0.1cm 程度の砂粒を含む。9は瓦器皿である。復元口径12.8cm、器厚0.3cm を測る。口縁部は若干外傾する。内外面とも摩滅しているが内面にわずかにヘラミガキ痕、外面には指圧痕が認められる。10は瓦器椀である。復元高台外径5.6cm、器厚0.5cm を測る。貼り付け高台。内外面は摩滅しているものの内外面にヘラミガキが認められる。外面に強い指圧痕が認められる。11は瓦器椀である。復元口径14.6cm、器厚0.3cm を測る。口縁端部は若干外反している。口縁部外面にわずかにヘラミガキ痕が認められる。胎土は0.1cm の程度の砂粒を少量含む。色調は灰白色である。12は土師器小皿である。復元口径7.4cm、復元器高1.3cm、器厚0.5cm を測る。口縁部は外傾する。底部は若干ヘソ状にくぼんでいる。胎土は0.1cm 程度の砂粒を少量含む。色調は灰白色である。13は白磁碗玉縁口縁部である。復元口径14.4cm、復元口縁部外径15cm、器厚0.3cm を測る。色調は浅灰黄色である。14は土師質羽釜である。器厚0.8cm を測る。胴部は内湾ぎみである。外面はケズリ調整である。胎土は0.4cm 程度の砂粒を含む。色調は黄褐色である。

第5層出土遺物

15は土師器壺底部である。復元底部外径4.4cm を測る。底部の厚さは0.8cm と肉厚である。色調は黄褐色である。16は瓦質鉢口縁部である。器厚0.8cm を測る。口縁部径は不明。口縁部内面には

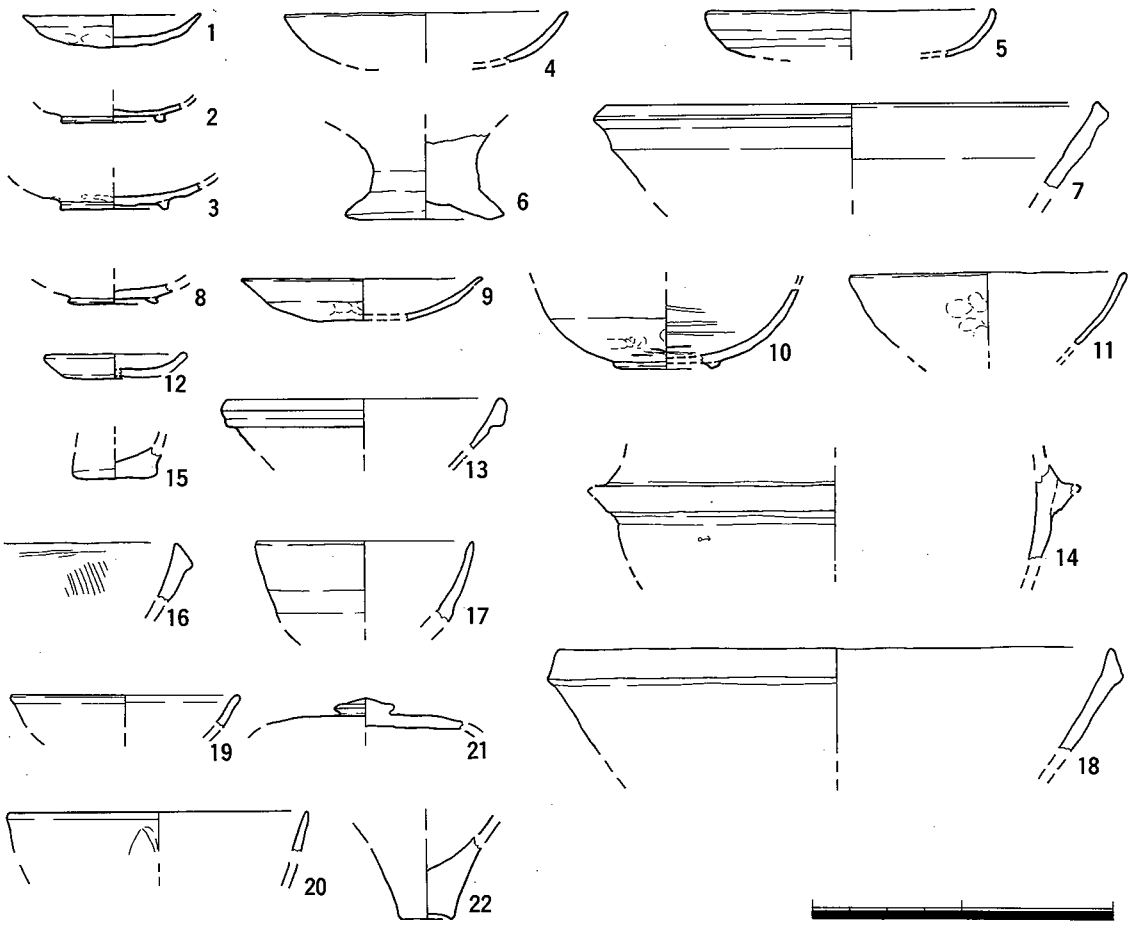


図23　出土遺物

横方向、縦方向のハケ調整を施す。内外面は回転ナデ調整。胎土は0.4cm 程度の砂粒を少量含む。

第４層出土遺物

17は須恵器杯である。復元口径11.4cm、器厚0.4～0.8cm を測る。内外面とも回転ヘラケズリである。18は瓦質鉢である。復元口径29.2cm、復元口縁部外径30.2cm、器厚0.7cm を測る。口縁部は若干内湾する。内面はナデ、外面はケズリ調整である。外面には指圧痕が認められる。胎土は0.2cm 程度の砂粒を少量含む。19は青磁碗口縁部である。復元口径12cm、 器厚0.4cm を測る。口縁端部はやや外反する。色調は緑灰色である。

側溝出土遺物

20は青磁碗口縁部である。復元口径15.4cm、器厚0.5cm を測る。外面には蓮弁文が施されている。色調は灰緑色である。21は須恵器杯蓋である。器厚0.7cm を測る。宝珠の外径は2.9cm、高さは0.9cm を測る。内面はナデ、外面は回転ヘラケズリである。22は製塩土器底部である。内外面ともナデ調整である。胎土は0.2cm 程度の砂粒を多量に含む。色調は褐色である。

６、まとめ

古墳時代以前まで溯る可能性がある自然流路ＳＤ-401は流路底部から出土した長さ３ｍを越える流木から一時的にせよかなり強い水流があったことを示している。その後流れはおさまり、枝、

葉などが堆積するほど水流は弱まっていったと考えられる。

中世にはＳＤ-401の大半が埋没した状態であり、流路としての性格を失い、窪みに水が溜まっていた状態であったと考えられる。またこの頃には水路（ＳＤ-403・404）が設けられ、この両水路はＳＤ-401に排水を流し込んでいたと考えられる。この水路の存在から調査区周辺で耕作がおこなわれていたと推測される。

ＳＤ-401が完全に埋没したのは中世後半頃と考えられ、その後土地は耕作地として利用され始める。

水路（ＳＤ-201・202、ＳＤ-301・302）は、いずれも同一方向に設けられていることから、土地区割を考えるうえで手掛かりとなる資料であり、中世後半から近世に至るまで土地区割を受け継いできたと考えられる。

本調査地周辺では数回の発掘調査がおこなわれている。これらの調査からは耕作地跡を検出している。1992年度、1995年度の調査はいずれも都市計画道路大阪和泉泉南線沿いでおこなわれている。1992年度の調査では鋤溝等の耕作地跡を検出している。1995年度の調査では平安時代の掘立柱建物や溝等が検出されたほか中世から近世に至る耕作地跡を検出している。

1992年度調査検出の鋤溝の方位と1995年度調査検出の鋤溝の方位は前者は座標北に対してほぼ真北の方向であり、後者は座標北に対して50°西に振った方向である。本調査地のＳＤ-301・302、ＳＤ-209・210の方位は座標北に対して50°西に振った方向である。

各調査地で時代が違うこともあるが、1995年度の鋤溝と本調査地の溝の方位が一致するものの、さまざまな土地区割で耕作をおこなっていたと考えられる。

本調査地が所在する麻生中地区の特徴は、本調査地の西側には平安時代中期から鎌倉時代初めにかけて盛んであった熊野詣に利用された道である熊野街道が縦貫している。この街道は麻生中地域に入ると貝塚市北側に比べて道の屈折が多くなる。また熊野街道と水間街道との分岐点にあたるため土地区割が複雑化していると考えられる。またこの地域は水利事情からため池が多く造られており、このため池を中心とした土地区割がおこなわれていたのであろう。

遺構の時期の違いや麻生中地区での数例の調査での判断は危険ではあるが、これら３ヶ所の調査区から検出した方位の異なった鋤溝、溝の方向性（土地区割が一定しないの）はこれらの要因を反映したものと考えられる。

報 告 書 抄 録

ふりがな	ひがしいせき2、 にいのいけいせきはっくつちょうさがいよう
書名	東遺跡Ⅱ、新井ノ池遺跡発掘調査概要
副書名	
巻次	
シリーズ名	貝塚市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第44集
編著者名	前川　浩一、三浦　　基、木嶋　崇晴
編集機関	貝塚市教育委員会
所在地	〒597-8585　大阪府貝塚市畠中１－17－１　TEL 0724（23）2151
発行年月日	西暦1998年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	しょざいち 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひがしいせき 東遺跡	おおさかふ 大阪府 かいづかし 貝塚市 ひがし 東	27208	97	34度 26分	135度 22分	1996,12,2 1997,2,28	900	共同住宅
にいのいけいせき 新井ノ池遺跡	おおさかふ 大阪府 かいづかし 貝塚市 あそなか 麻生中	27208	30	34度 25分	135度 22分	1997,5,6 1997,6,13	240	校舎増築

ふりがな 所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ひがしいせき 東遺跡	集落	中世 近世	溝、土坑、井戸	瓦器、瓦質土器、獣骨	獣骨廃棄土坑
にいのいけいせき 新井ノ池遺跡	集落	中世	流路	瓦器	

図　　版

図版1　東遺跡

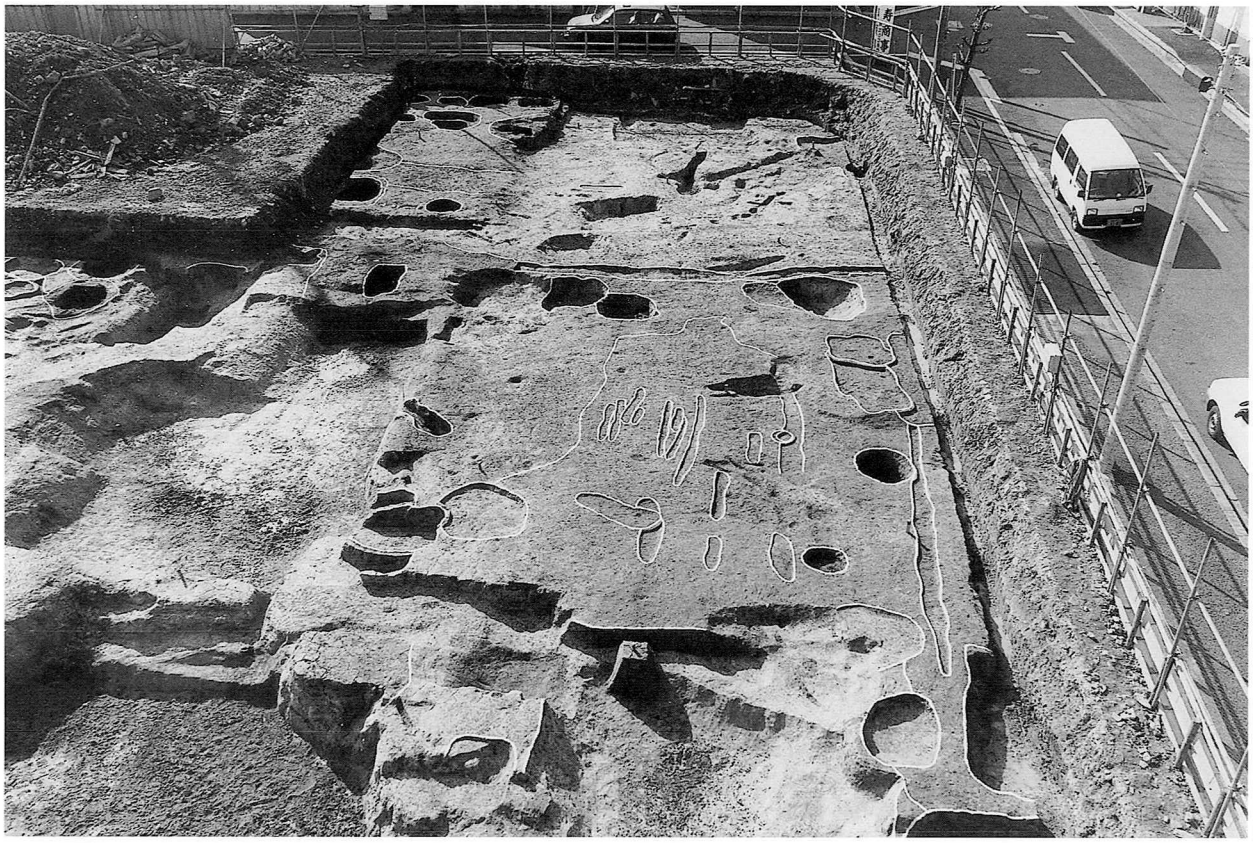
1．調査区　　南東部　　北より

2．同　　上　　北より

図版2　東遺跡

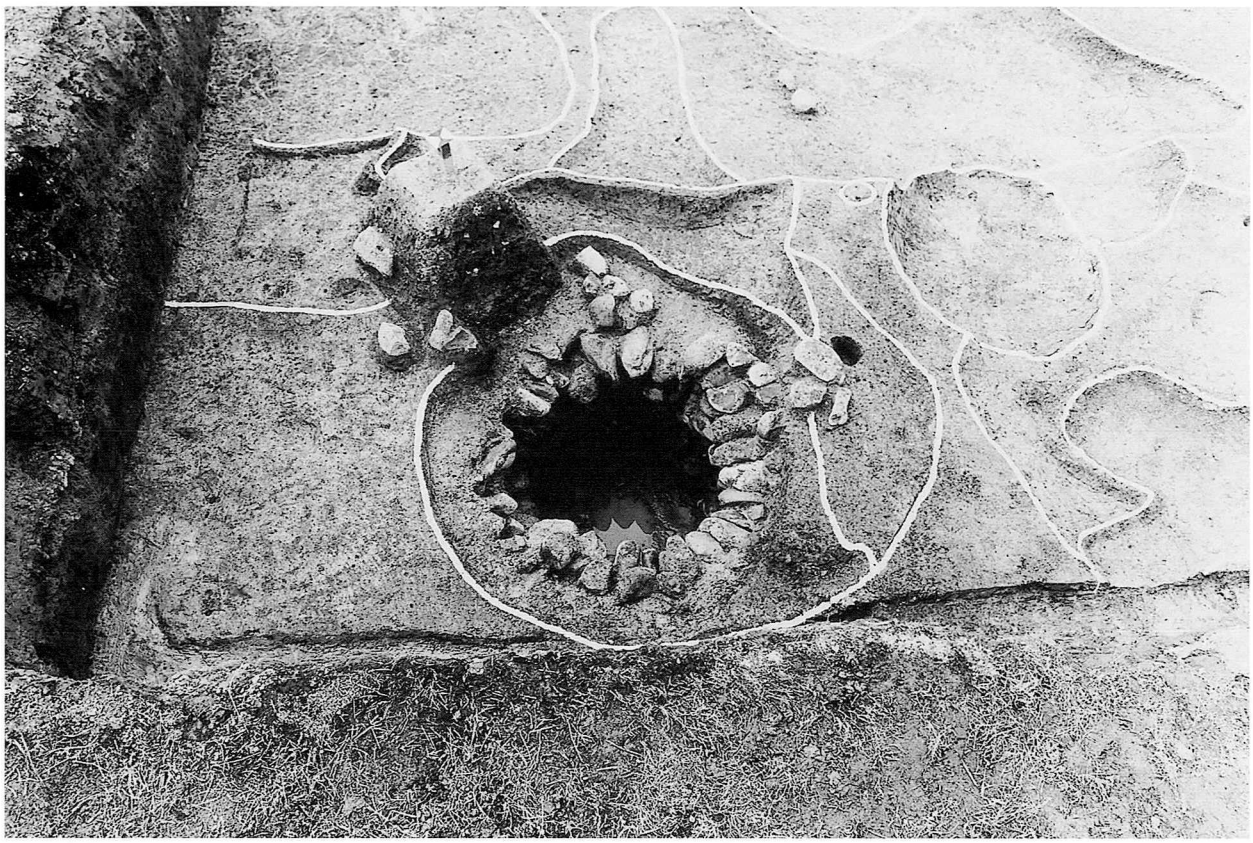
1．調査区　中央部　　北より

2．同　　上　　北より

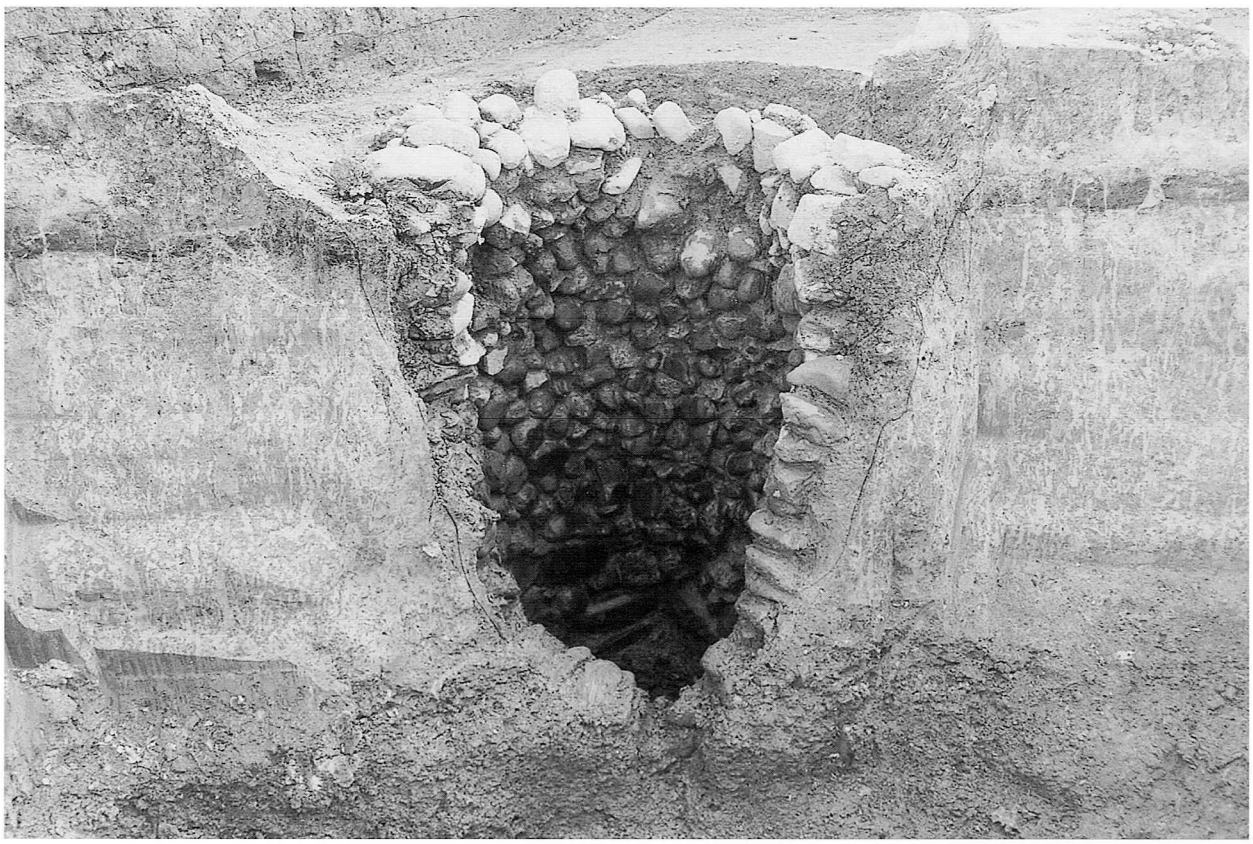


1．調査区　北西部　第1調査面　　北東より

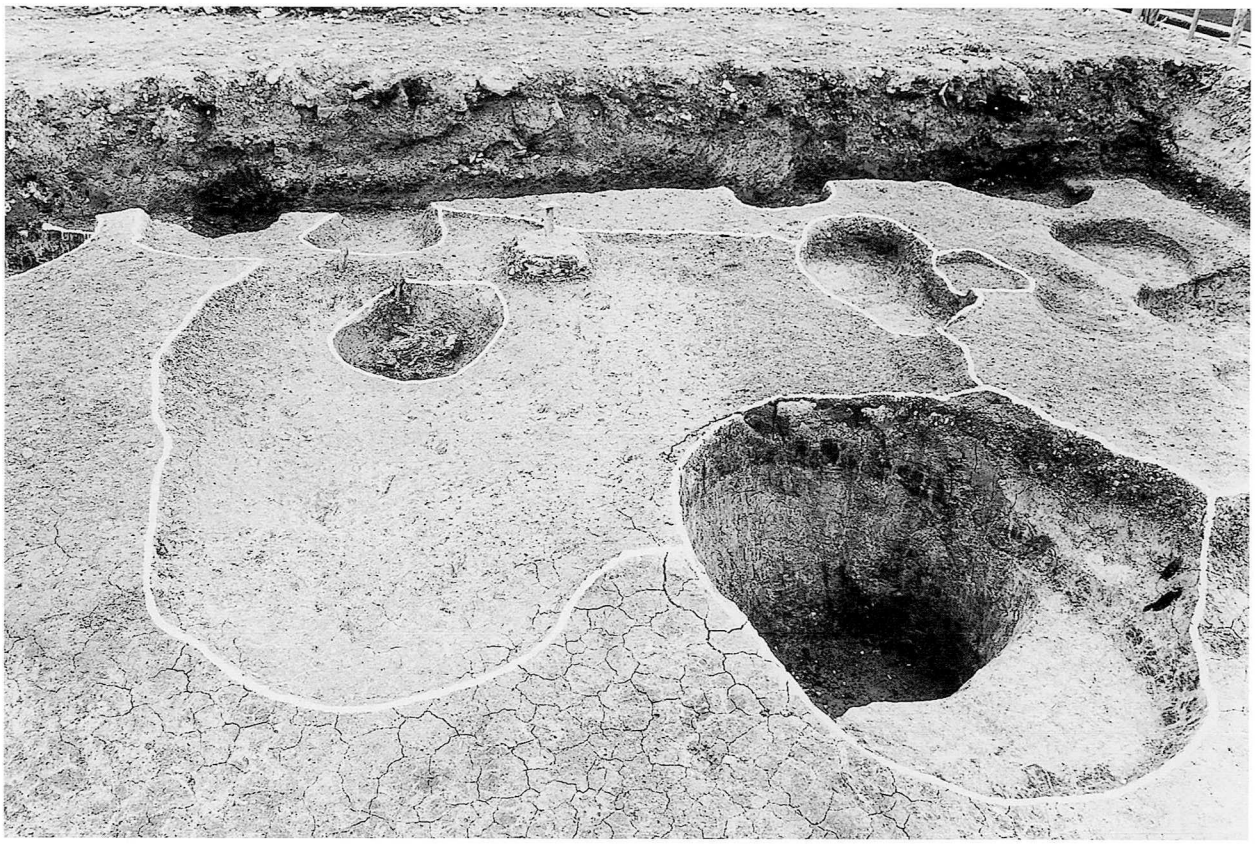
2．調査区　北西部　第2調査面　　北東より



1．SE－201　　南東より

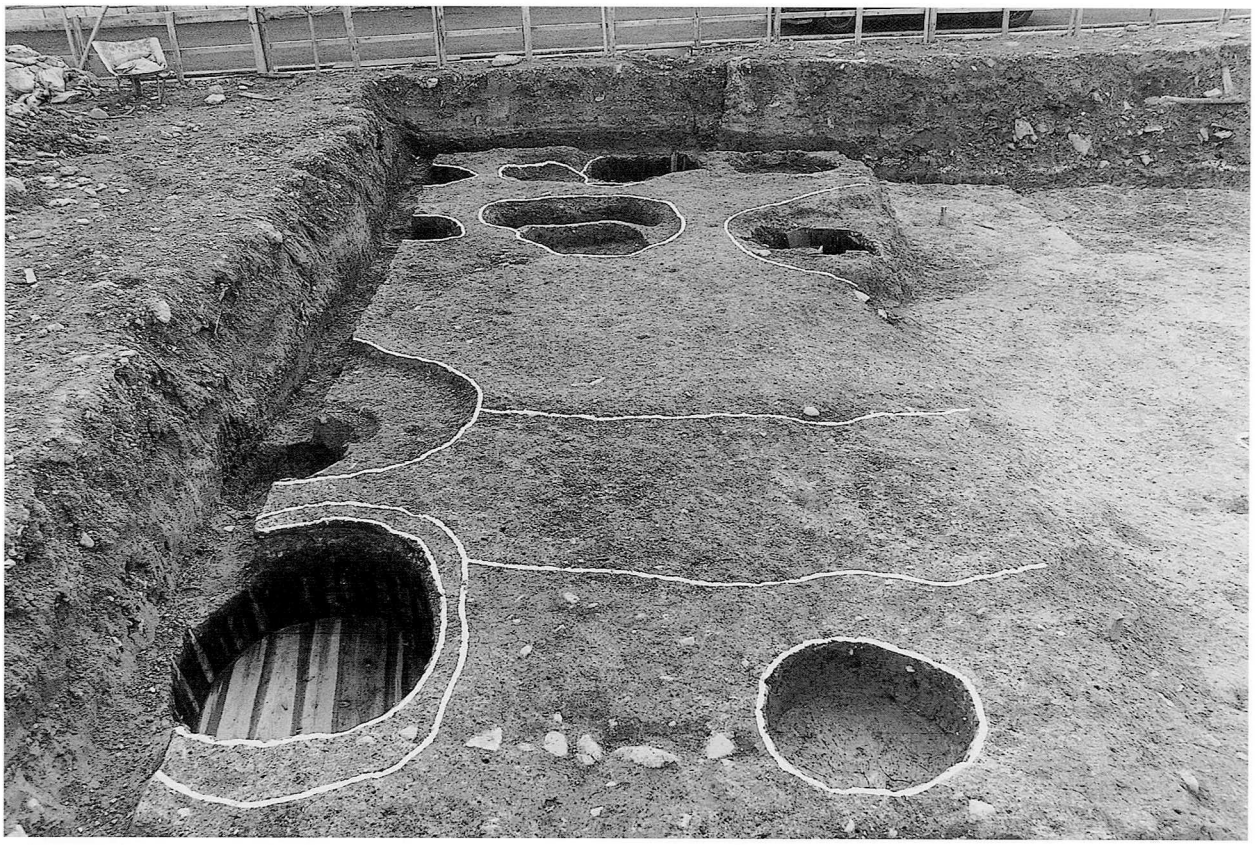


2．SE－201　断面　　北より

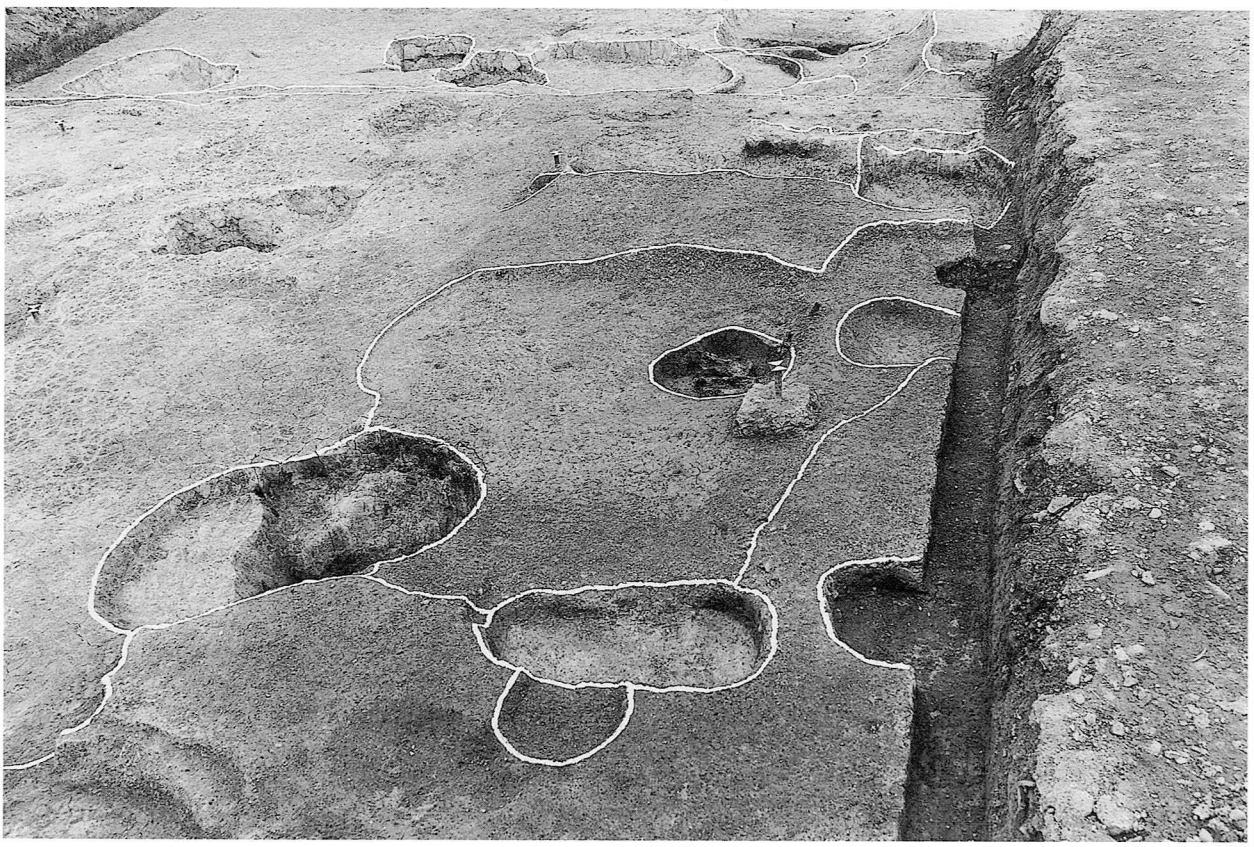


1．SX－201　　西より

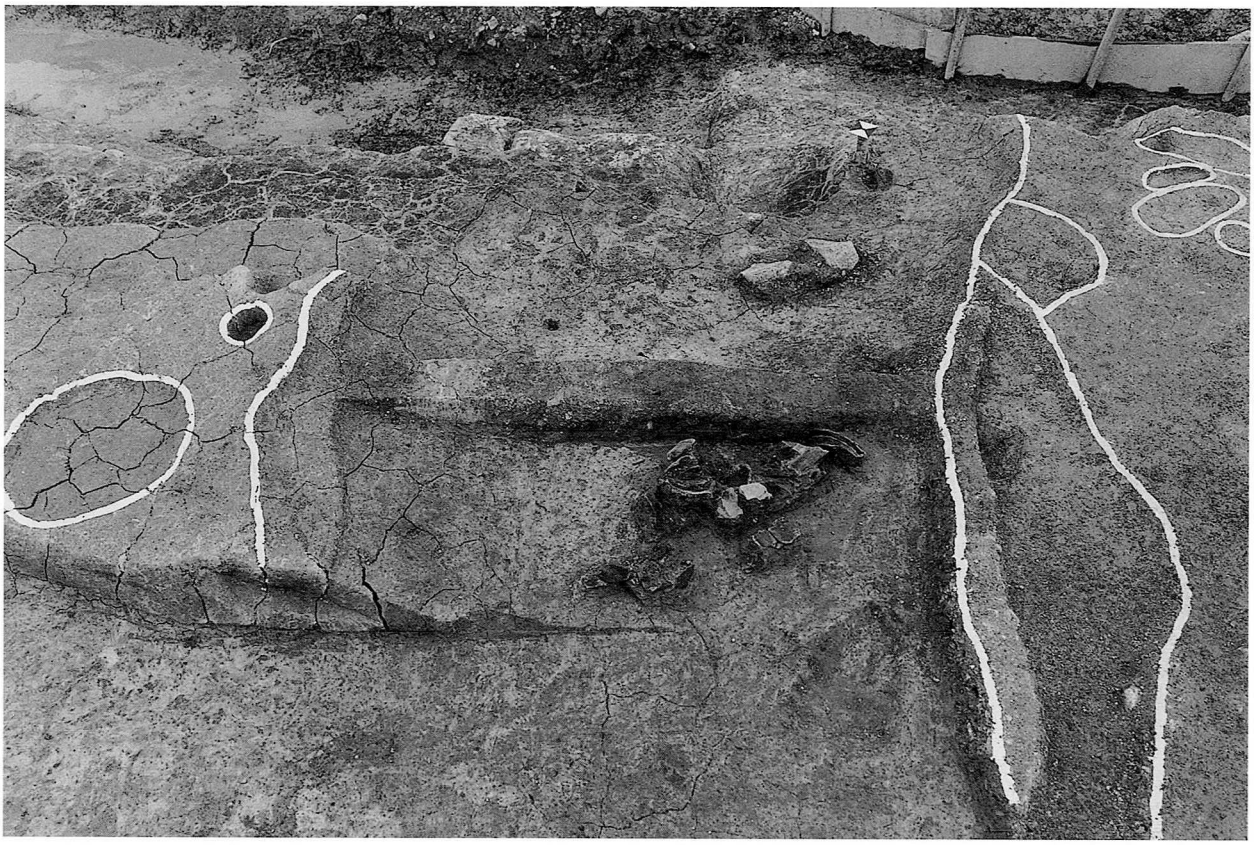
2．SX－201－3　　北より



1．SX－201　上面遺構状況　　北より

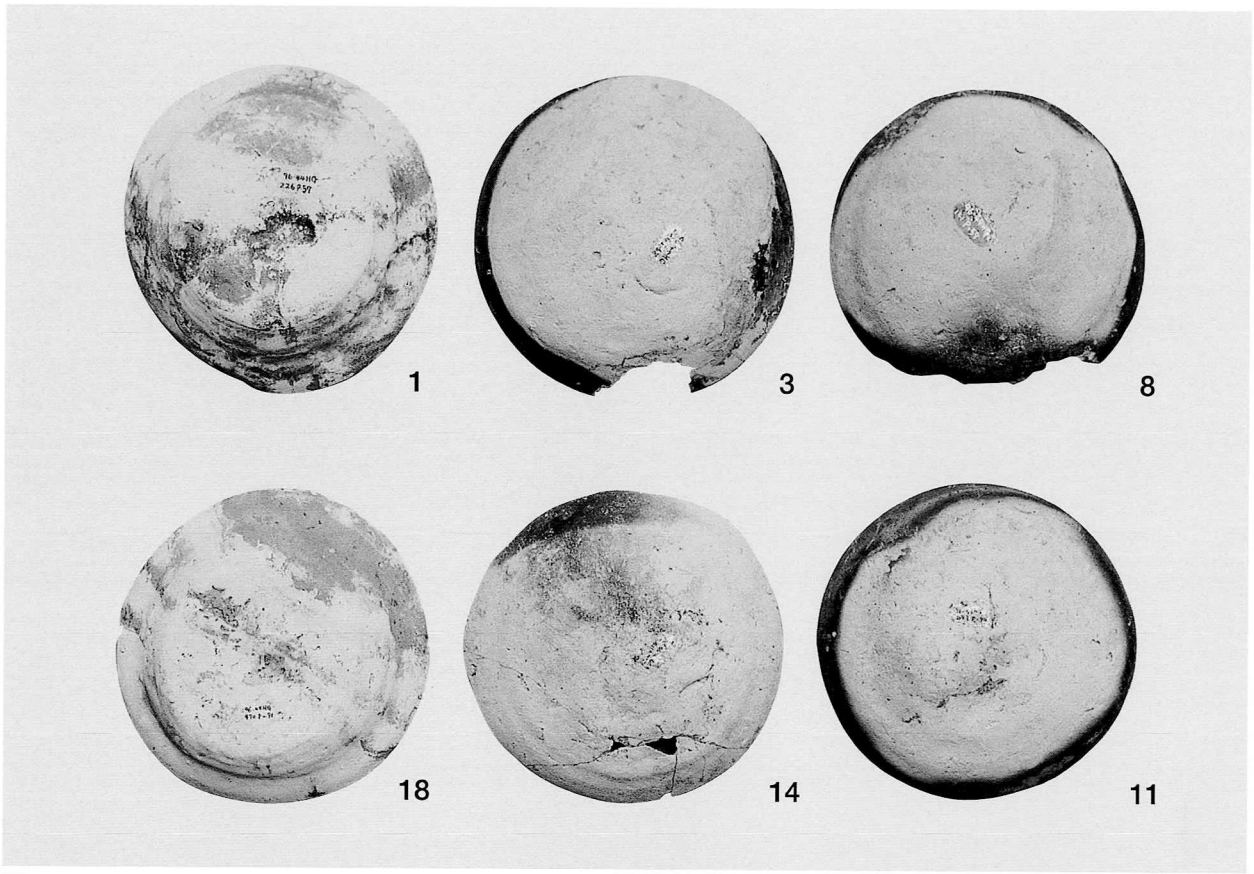


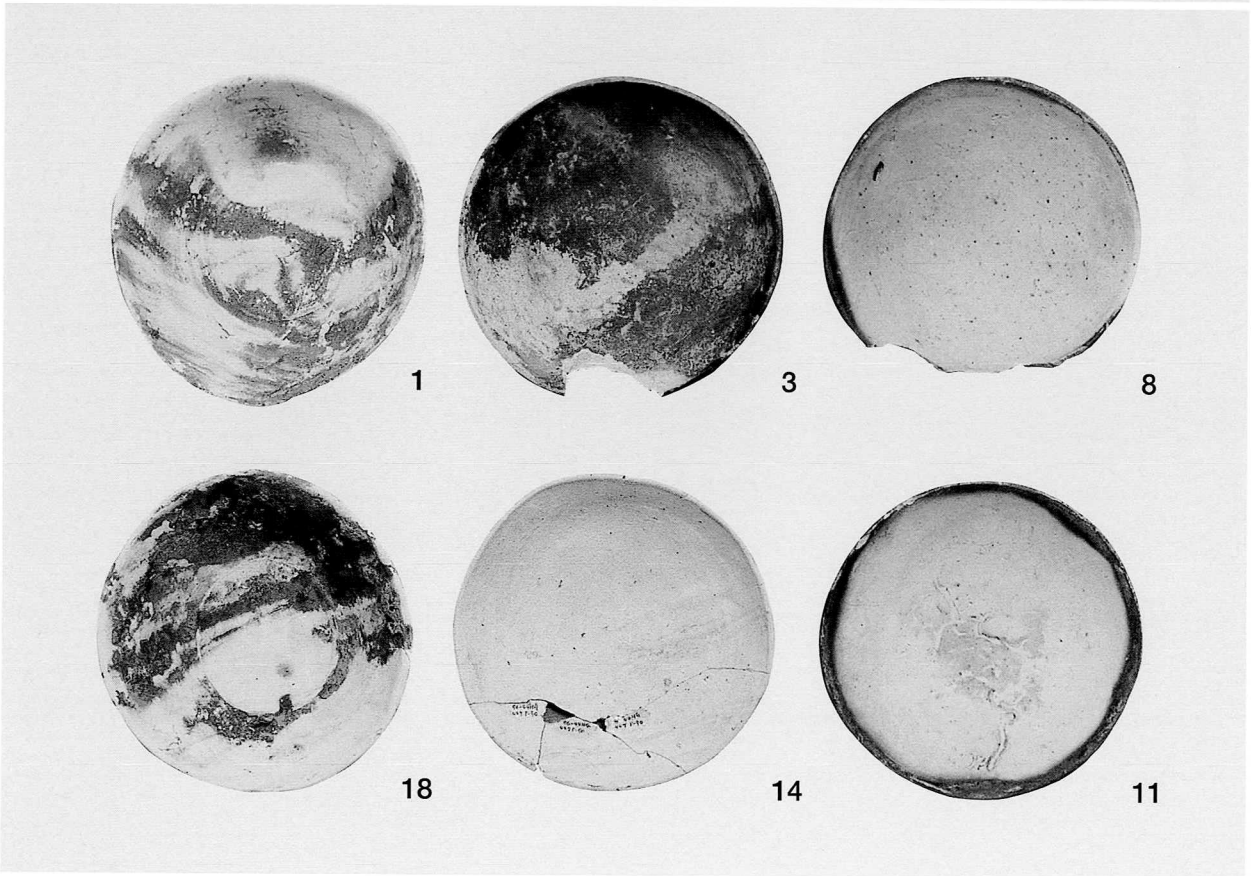
2．SX－201　　南より



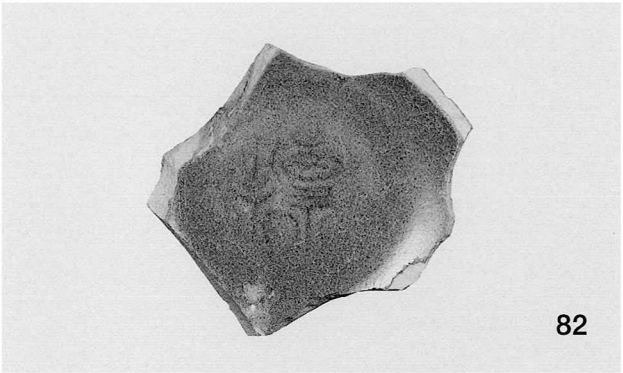
1．SX－207　　西より

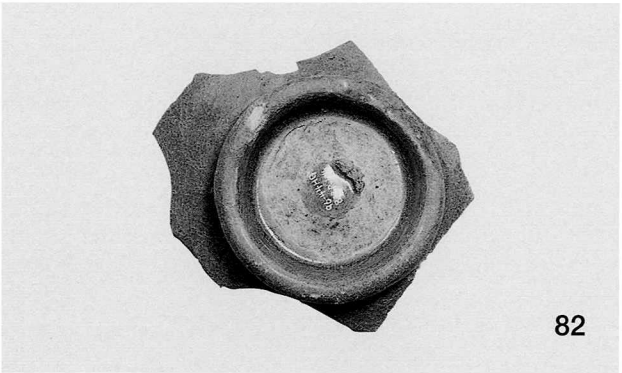
2．SX－207　　東より

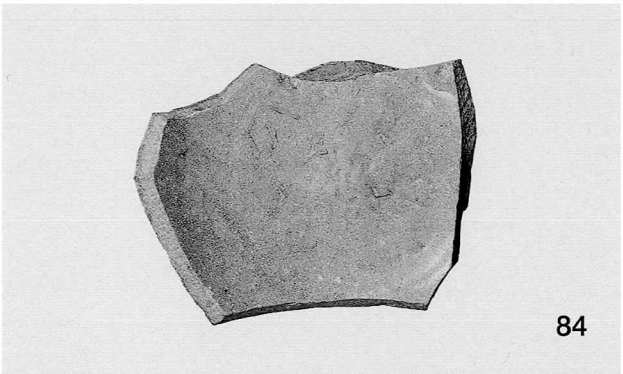


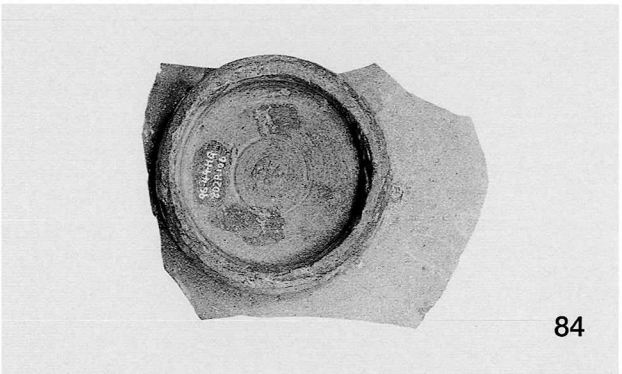


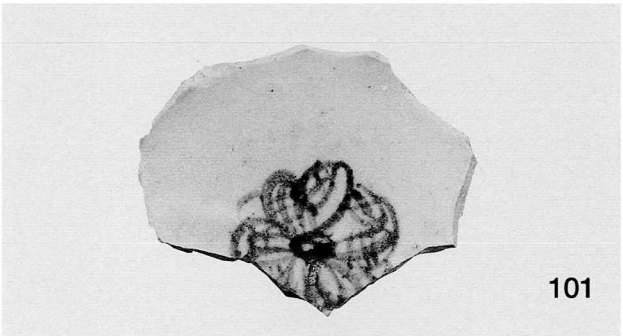
SE−201（1、3、8、11、14、18）

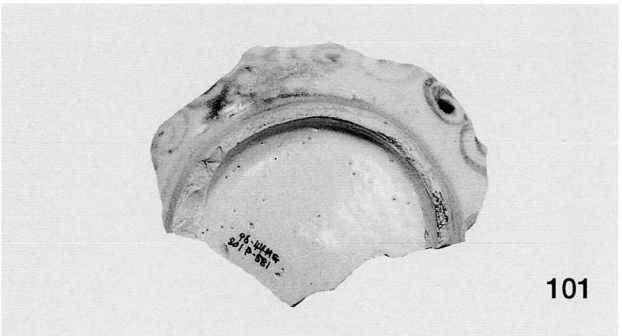

82


82


84


84

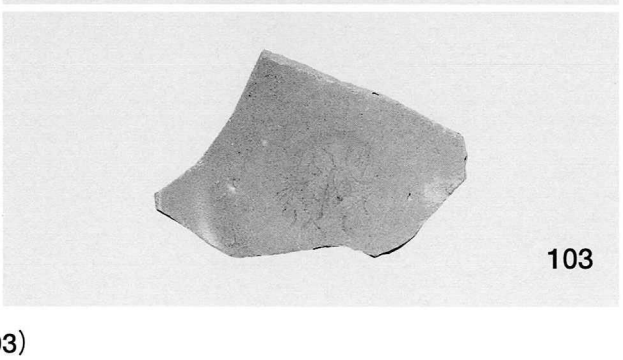

101


101

16

102

16

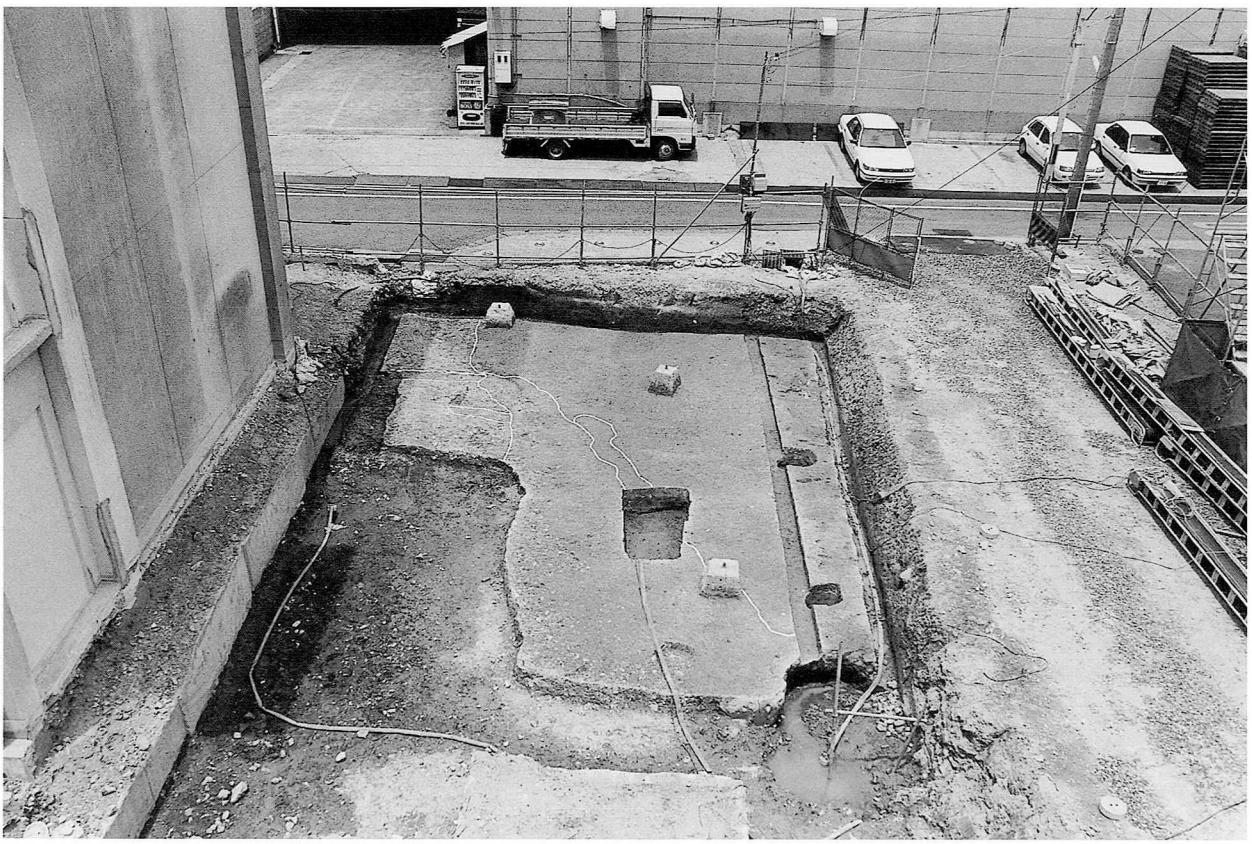

103

SE－201（16）、SX－208（82、84）、包合層（101、102、103）

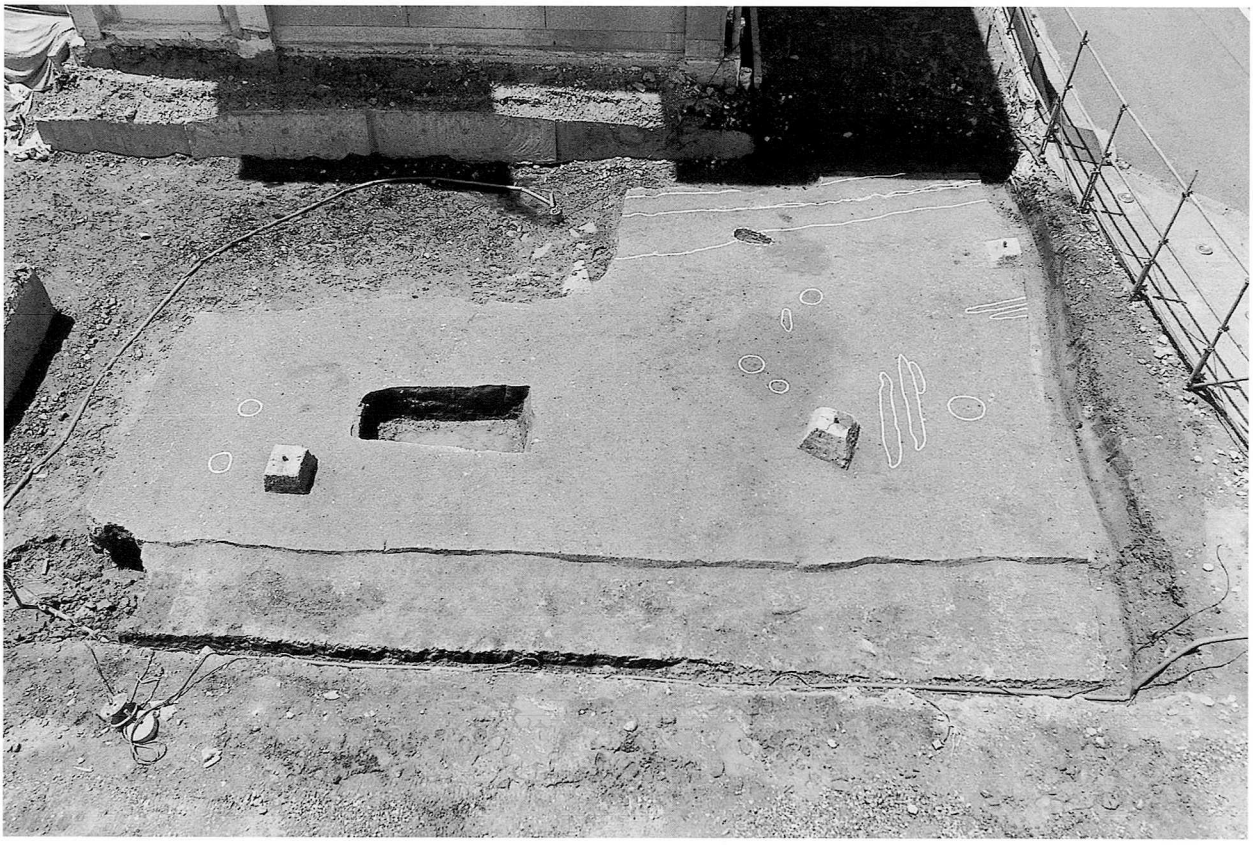
1．SD－401　　南東より

2．第6遺構面　　南東より

1．第5遺構面　　南東より

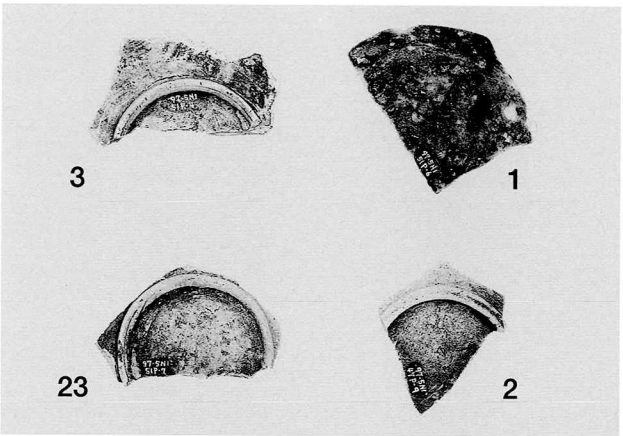


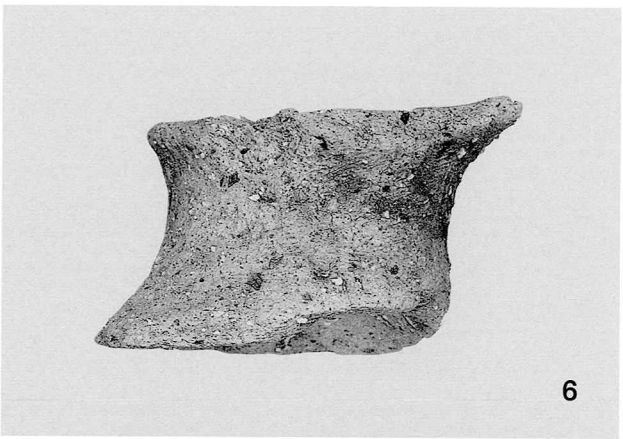
2．第4遺構面　　南東より

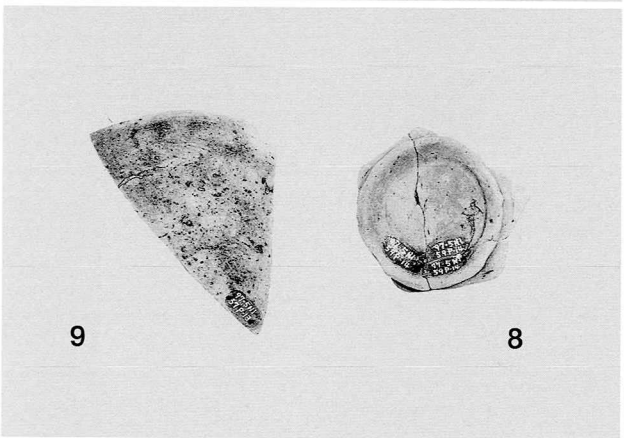


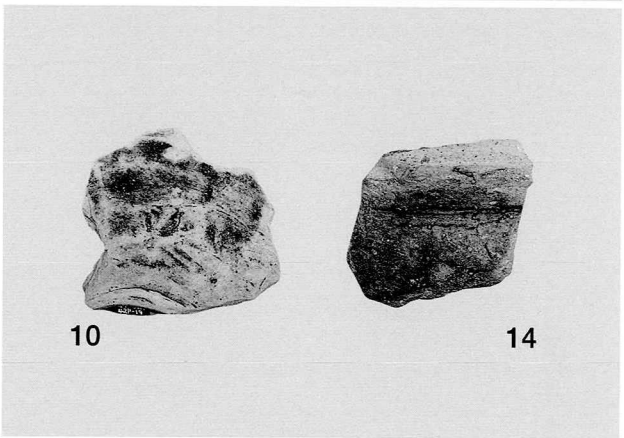
1．第3遺構面　　北東より

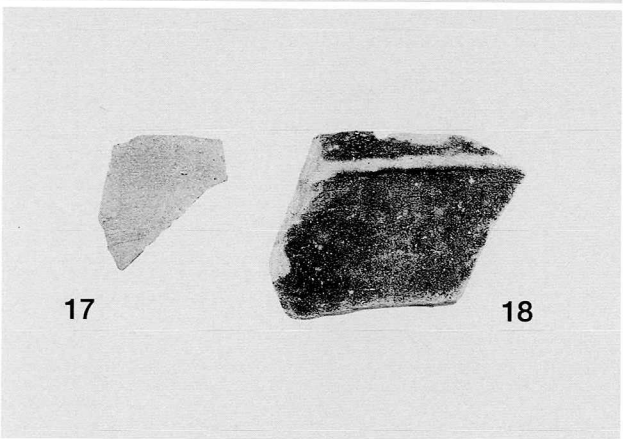
2．第2遺構面　　北東より

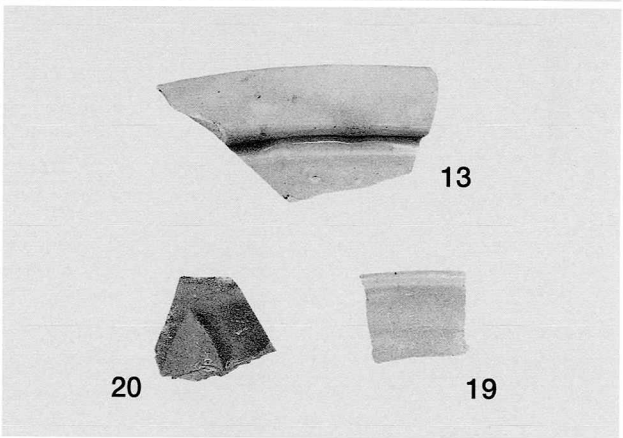


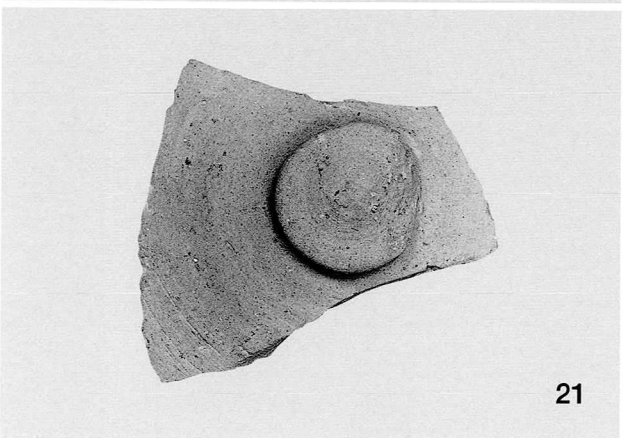


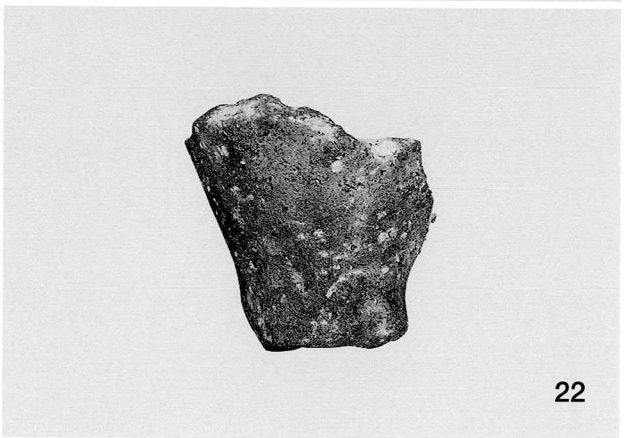












SD−401（1、2、3、6、23）包含層第7層（8、9）第6層（10、13、14）第4層（17、18、19）側溝（20、21、22）出土遺物

貝塚市埋蔵文化財調査報告　第44集

東遺跡Ⅱ、新井ノ池遺跡発掘調査概要

発　行　日　1998. 3. 31

編集・発行　貝塚市教育委員会

大阪府貝塚市畠中1丁目17番1号

印　　刷　摂河泉文庫（貝塚市北町20－18）